

---

# 北斗による協奏曲

三河あおい

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

北斗による協奏曲

### 【Nコード】

N3953A

### 【作者名】

三河あおい

### 【あらすじ】

（自称）カリスマリーダー明彦、怒ると力を発揮する俊、運がない孝之、ケンカが強い甲斐の中学生4人で結成された「北斗軍団」がいろんな事件を仲間と協力して解決してゆく物語。はたして、今日の事件は？

## 人物紹介〜スタート

時間は現在、45分の休憩時間、周りの人はトランプ、おにごっこやらで熱中していた。

その教室の中心でやや凛々しげな男が黙って椅子に座っていた。

「・・・・遅い・・・・」

がその男から微かに苛立ちを感じる眩きが聞こえた。  
数十分後、

「いやあすまない団長、遅れてしまったよ。」

「遅いぞ、お前ら！会議の時間に30分も遅刻だぞ！俺が社長ならクビだぞクビ！！」

と団長は不満を爆発させたが、二、三回深呼吸をして団長はすぐに落ち着きを取り戻した。

「ふう、まあいい。団員よ、急いで一見様に自己紹介しようじゃないか。」

「「「・・・・・・は？」「」「」

戸惑う三人をよそに、団長は迷わず机から立ち上がり、

「俺は北斗軍団の団長、こはしかわ あきひこ小橋川明彦。君たちバカを仕切るカリスマリーダーだ。よろしく」

と、誇らしげに明彦は名乗った。明彦が紹介した後、周りにいた三人から、

「はぁー？何でお前がカリスマなんだよ？」

「お前はカリスマじゃなくて、青虫だろ」

「レタスでも食ってろ、ニセモノめ」

と言われていたが、明彦は満面の笑みで、

「・・・おい、甲斐、次はお前だ」

と、最後に文句をつけた男に紹介をするよう、アイコンタクトで説得された。甲斐と呼ばれた男はめんどくさそうに頭をかきながら自己紹介をした。

「・・・名前は紗次田甲斐<sup>さしだ かい</sup>、団員番号は1番・・・こんな感じでいいのか？」

甲斐のテンションの低さに対し、明彦は、

「おいおい、今日も元気ないのか、頼むぜえ。しゃあない、次、俊だぜ。」

なぜか毎日元氣が無い人みたいな解説を口にした。すると、不意打ちに

「団員番号2番、屋比久俊<sup>やひく しゅん</sup>、まあよろしく。」

と言った直後、明彦が

「ひねりゼロかよ、これだからばかミーちゃんは・・・」

と言った。すると、俊が突然、

「だあれがミーちゃんだ、ゴRRRRRRルア！」

「よ、よせ！俺は団長だぞ！誰か止めてくれ！！」

俊にはある特性があり、ネコ系の言葉を（ミーちゃんの他にタマ、もしくは、そのままネコとか）言っていると、異常に反応してキレる性格らしい。

こうなるとなぜか手がつけられない俊をどうにか甲斐がどうにか羽交い絞めにしたが、その後、甲斐は耳元でなにかを俊の耳元で呟くと、途端に大人しくなった。

「何を言ったんだ。なぜか顔が真っ青になってるんだが・・・」

「気にするな。ちよろつと脅迫しただけだ。」

「・・・ま、まあ最後だな、さ、孝之。」

と、孝之に紹介をうながすように言った。孝之ははりきって

「団員番号3番、おおしろたかゆき大城孝之。特に好きなものはガンダム、かな？」

と言ったら一部のクラスメイトから真っ白な目で見られていた。

「孝之、発言には気をつけろよ。場合によってはこの作品消されかねないから」

「え？う、うん」

と俊がマジメにフォローし、孝之は深くうなずいた。少し訂正するなら、彼は純粋なアニメ好きであって、その中でガンダムが好き、という意味が含まれている。

明彦が一つ咳払いをして、

「では諸君、一見様への紹介もすんだし、会議を始め……」  
キーン、コーン、カーン、コーン……

予想外の休憩時間終了のチャイムに（北斗軍団）全員が驚いていた。

明彦は、何もなかったように冷静に、

「やれやれ、鐘がなったようだ。諸君、会議は終了だ。また明日しようじゃないか。」

と言って、なぜか勇ましく机に戻っていった。その後ろ姿から高笑いが聞こえてきそうだった。ポカンとしている三人は、とりあえず、

「時間ってあっても足りないもんだな……」

なんとなく、感慨深い一時を過ごしていた。

## ヤツの恋人疑惑

シュツ・・・シュツ・・・

ある日の美術の時間、俺たちは印鑑を作っていた。自習のような響きをしているが、実は教員はしっかり存在し要所所で説明も入るため、何気に普通の授業をしている。だから、自習に近い空気が流れているのに教員がいるだけで、割とそうなっていない。

シュツ・・・シュツ・・・

聞こえるのは微かな話し声と彫刻刀の彫る音。

班になって固まる北斗軍団、とりわけ沈黙の苦手な明彦は時折をもどかしそうに口を動かしていた。

「・・・別にちよつと話すくらいならいいんじゃないのか？」

彫刻刀を止め、ぎこちなくなく手を動かす明彦に声をかけた。

「確かにそうしたいが・・・生憎おれは二つのことを一編に出来るような器用なこと出来ないんだよ。それになぜか進行が一番遅れるし。」

「大丈夫だろ。間に合わなかった時は星形の彫り物でも造って学校中に配ってやれよ。」

「嫌だよ！確かに姉貴はいるけどまだ結婚しないからな！」

さすが明彦、絶妙な突っ込みだ。

と、感心をしていると隣に椅子に誰か座り込んだ。

「そんな異次元な会話しても誰も分かんと思うけど？」

声に振り向くと、呆れ顔の義孝の姿があつた。よしたか勉強が好きで得意、スポーツは好きじゃないけど得意というなんとなく分かりやすい明彦の友人である。当然本人は北斗軍団の団員では無いし、むしろ物凄く嫌がつている。(理由はわからないけど、特に明彦をかなり嫌がつている。)

「俺、話題に付いて行けない人間は置いて行く主義だから。あまり気にしないでくれ」

「さらつと冷たいこと言ってさ。ま、いいけど。甲斐も本気じゃなさそうだし」

はは、と軽く笑い義孝は思い出したように小さく口を開いた。

「そうそう、孝之、おまえ好きな人がいるって聞いたけど本当か？」

・・・少し沈黙が流れた。幸いなのは、他の誰にも聞かれなかったのか視線が集まらなかったことくらいだ。

ていうか、今の話は本気なのか？俺は孝之に目を移した。向かい合った俊が目を見開いて、

「お、おい、マジなのか？」

と聞く。孝之が、

「へ？マジで？何が？」

震える口と手で俺たちを眺め回した。



休憩時間に入り、場所は男子トイレの個室に移動し会議を行った（バカみたいにせまい・・・）。ではなくほぼ尋問をしていた。

「貴様、俺より先に恋をしやがって、何故黙ってたんだ！」

自分たちに隠していた事と恋愛事情で団員に先を越された事によって明彦は2倍キレていた。（こいつはアホだと思った。）

孝「違う！好きじゃなくて・・・」

明「じゃあどうだと言うのだ？んん？」

孝「ただ気になってるだけ・・・」

甲斐「それってほとんど同じじゃない？」

俺のこの余計な一言によって俺と孝之を除く団員たちは個室の扉を開け次々に出て行った。

「よし、孝之、お前の『気になる人』を拝見させる！」

孝之はしぶしぶ教室を出ていった。僕達は操られたように孝之についていった。

孝之は三組の教室の前に止まり、大きなため息をついた。明彦は子供のよう

「なあなあ、どいつかね？お前の姫様は？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

と聞くと、孝之は真剣に口を開くことを嫌がっていた。しかし、明彦が握りこぶしを作り奇妙な笑顔で、

「孝之、本気出しているのか？」

結局孝之は観念したようだった。孝之はうつむいたままある方向に指をさした。

俺たちは指の先にあるほうへ向くとそこには心底驚くような人物がいた。

なかだみちこ

仲田美智子。言い表すような特徴はないけど、クラスの人から天然ボケ（時々俺もそういわれるが、まあそれは置いといて）と評価されている女子、て位にしか俺には分からなかった。

「なんつーか、妥当な・・・」

俊はかける言葉がなかったのだろう、それだけを言った。俺から見たら意外な組み合わせに啞然としていたかのだが。

「な、なんか意外な組み合わせだな・・・」

図らずも明彦と同意見。やっぱり俺たちにはそう映る、と思う。しばらく美智子の様子を見てみたが、彼女は本当に天然なのかもしれない。

消しゴムを机の下に落とし、それを拾い上げた拍子に机に頭を打ち付けた。そこまでなら目をつぶれるかもしれないが、問題は、その後にもまた消しゴムを落とし、拾い上げ、拍子に・・・というループが二、三回目の前に起きていたのだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」  
「・・・・・・・・」

一同、絶句。

明らかに濁り始めた空気を察したらしく

「まあまずはどうするかを作戦会議だ！」

そう言つて明彦は教室へ戻つていった。

俺も、変な気分に変わる前に、明彦の後ろに付いていった。

## ヤツの恋人疑惑―中盤―

一人、紹介したい友達がいる。

彼の名は大城孝之。おおしろ たかゆき理由は分らないけど、ドドリア（聞いたことは無いよな？）と呼ばれたり、授業中はよく居眠りをしており起きるとたまに鼻水をたらすことから「ボーちゃん」と言うあだ名もついたり、明らかに本名よりもその数が多い。

しかし、一番のポイントは神様から見放されたような、運の無さだろう。本当に可哀相な親友である。例をあげるなら、テストで全員がカンニングをしているのに対して、孝之だけがバレてしまう。本当にそんな感じである。

で、昼の休憩時間、

その哀れな少年のために、俺たち北斗軍団は、死ぬ気で知恵を振り絞りながら意見を出し合っていた。

明「お前らだったら、どうやって気になる女の子に告白する？ 人ずつ言ってみろ。」

甲斐「ストレートに『好きです！』、とかでいんじゃないか？」

俊「・・・花束をあげる」

明「それで、なんていうのだ？」

俊「僕は死にません！！！」

明「なぜ、パクる？」

俊「いやそういう小説だろ、これ」

明「まあ、否定はしない」

こうして、ほとんど参考にならない意見が飛び交う中、明彦は黙



「何なんだよ、あいつらは・・・」

哀れな生き物を初めて見たような視線で、俺たちを見送った。

で、放課後、

孝之は『最高の恋愛映画』の設定を聞かぬまま帰ろうとしていた。だけど、俺たちは孝之の帰り道を妨ぐ。

「おいおい、主役がいなきゃ、映画は盛り上がらねえもんだろ？」

と、明彦ははやすように言った。

「な、何だよ、いつたい。」

孝之は状況が飲み込めず、ただそう言い返した。

「言つてただろ？最高の『恋愛映画』を作ると。」

明彦の代わりに俺はそう言つて、孝之を学校に待機させた。やはり逃げる気満々だったようだ。

・・・・・・数十分後、

「来たぞ！」

と、俊が何かを報告していた。孝之は視線の先を見ると、仲田美智子が歩いてきてたのだった。

「ナニこれ、聞いてねーぞ。」

パニックになっているのがバレバレな孝之は俺たちにそう質問した。

開き直ったように明彦が、

「そりゃそーだ。何も言っていないんだし。」

と軽く言った。続けて明彦が、

「いいのか、こうしてて？何もせずに映画のエンディングをむかえたいのか？」

上手くあおるように明彦は言った。

「じよ、ジョートーだよ。やってやろうじゃないか！」

孝之も開き直っているが、なんか弱々しい足取りで美智子のところへ歩みだした……

## ヤツの恋人疑惑―中盤―（後書き）

言い忘れてましたのですが、彼らは中学2年生です。ご了承ください。



## ヤツの恋人疑惑へ決着

孝之は生ける屍みたいで、ふらふらと美智子に近づいていった。ゾンビみたいで妙に怖い・・

俺は孝之の様子を遠くから見て強く祈っていた。

「神よ、こいつを見捨てないでくれよ」

あまり他人のために必死になったことない俺は、なんとなく祈ってしまう。すると、それが届いたのか、孝之と美智子教室のドアの前で何かを話していた。少しすると、孝之が、

「じゃ。」

と言うなり美智子と別れてこちらに帰還してきた。そんな孝之を俺たちは優しく迎え入れた。

「よくやった同士よ。どうだい、反応は？」

明彦は冗談を言わず、真面目に聞く。

「いや、イエスでも、ノーでもないんだ。」

「そうか、一生友達で、ってことか・・」

「そうじゃなくて、そろそろ帰りの会始まるから、後でって言われてさ。」

「あ、なんだ」

発言が発言だから、てつきりダメだったと思ったからつい勘違いしてしまった。

「「なんだよ、かなりベタだなぁ。」」

俊と明彦は声をそろえていった。

「まあいいだろ。それなら落ち着いて放課後まで待とうぜ。」

俺は軽く言ってその場を收拾させることにする。

時間は経ち、現在午後六時、

実際に終わる時間より1時間遅く3組のホームルームが終了した。すっかり待ち疲れた俺は、

「なあ、やっぱ俺帰っていいか？」

ダメ元で聞いてみるが、明彦は俺が予想したとおりの返事が返してくる。

「弱音を吐くなバカモノ！俺たちはやるといったらやる、決して逃げたりしない男たちだ！だから認めぬ」

この言葉に俺は深くため息をつきながらも、しかたなく明彦に従った。

そのころ、俊は孝之の様子を見ていた。今の孝之の表情はというと、世界の終わりを迎えるようなブラックな顔をしていた。それを見ていた俊は無理矢理に励ましていた。

「だ、大丈夫だよ。お前のような色男をほっとくわけ無いって。」

俊がそう言った、こいつの顔は色男の影は無く、まるで40代を超えた中年のオッサンのようにやつれた顔をしていた。見ていてかなり痛々しい……

そして……さらに十分後、ようやく本人の姿を確認する。それを見た俺たちは、

「よし、孝之、ゴオオオー!!」

急に生き返ったように叫び、明彦は孝之の背中を蹴り飛ばした。孝之は蹴られた拍子に美智子にタツクルを決めていた。二人は勢いよく立ち上がり、顔を上げると偶然二人は目を合わせた。そして目を逸らすと、二人は恥ずかしそうにモジモジした。その様子を遠くから見ていた俺たちは

「や、やばい……」

「これは面白いな」

「ぷ……ぷくく……」

どうしてなのか、笑いを堪えていた。しばらく様子を見ると、二人はこちらの教室に近づいてきた。そして孝之が僕らに声をかけた。

「……頼む、誰も来ないか、見張って欲しいけどいいか？」

照れくさそうに言う孝之の誠意に答え、俺たちは親指をぐつと立てた。

夕暮れ教室の中、二人が話をしている。見張りをするために俺たちは廊下に二人、外に二人と警備を待機した。本当なら二人の会話を盗み聞こうとも考えていたけど、明彦が見張る前に言った「盗み

聞きした奴は、明日の太陽を拝めぬと思え！」と言う警告によって止めることに。

といっても、友達のため、そんなシンプルな理由で俺たちはやめた。

約二十分後の六時四十分、話が終わったのだらう、二人は教室からおもむろに出てきた。

「孝之、ちゃんと家まで送ってやれよ。」

あえて結果は聞かずにそう言った。そして、幸せそうに二人は帰っていった。二人だけ帰らせたかったが、非常に運が無い孝之の特殊能力ため、なにかのためにバレないように後ろから見守り続けていた……

……翌日

孝之はいつもとは違って、妙に男らしくなっていた。さすがに気になってしまい、俺は聞いてしまう。

「昨日のことか？」

孝之は誇らしげに首を頷かせる。

「守るべきものがあるって、すばらしいぜ！」

と、自信ありげに答えた。どうやら、お似合いのカップルが誕生したらしい。正直、ふられるだらうと予想していたからなんだか嬉しくなる。

そんな孝之を見て、明彦が

「ふう、もうドドリアとは呼べないな・・・」

とちよつと残念そうに言った。しかし、次の行動で僕らは目を覚ました。僕らの目の前で椅子に座っていた孝之が、なぜか後ろに転倒していたのだった。しかもその近くには、美智子が立っていた。

「ドドリアに格下げだな」

「守るべきものに守られてる・・・」

「うん。やっぱ孝之だ」

ああ、俊の言うとおりだ。孝之は幸せがきても孝之だ。それが改めて分かった気がした出来事だった。

## 小さな冒険／突然の事件

学校へ登校中、

天気は快晴で暑くもない寒くもない、ちょうど暖かい天気であった。けれど、僕は何か憂鬱だった。

その理由は、学校へ登校中に黒猫をたくさん見かけたり、いろんな種類のカラスが僕を中心にして、飛び交っていたのだ。朝いきなり不吉な感じがして落ち込んでいた僕の後ろから、

「よう、甲斐。何か元気が無いけど、どうかしたのか？」

孝之が声をかけてきた。憂鬱になっている僕は孝之に、

「孝之、今日はイヤな予感がしないか？」

と聞いてみたが、

「そうか？そんなことないぞ？気のせいじゃないか？」

と孝之が言い返した。

「そうか・・・そうだよな。」

と僕は少し前向きになって言った。（さっきまでの出来事は、孝之と遭遇する前ぶれだと思うようにした。）しかし、そう思ってみても、なにかがひっかかっているのだ。だから僕は、学校が終わるまで油断をしないと肝に銘じ、登校した。

無事、学校に着いて僕は、

（よし、何も起こらなかつたか・・・）

と安心していた後だった。教室の中から明彦と俊が、口論をしてる声が聞こえてきた。僕と孝之は、その会話を聞いてみた。しかし、聞いてみると余計に謎が深まってしまった。内容は、

俊「なぜだ！なぜ俺達がそんなことをするんだよ！」

明「理由は二つ。一つはこの町のため。もう一つはこの中学校生活にいい思い出を作りたいからだ。」

俊「そんなことなら、警察に任せればいいじゃないか。」

明「バカモノ。警察は少し行動が遅いからな。早いうちに、俺達がやればいいだけだろう。」

俊「バカはお前だ！そんなトラブルに飛び込んだら、俺達はあぶねえんだぞ。」

「……と言つような会話が続けていた。僕と孝之は、好奇心にかられて、この会話に入った。

「俺達も混ぜてくれよ。その話によ。」 「俺………」

僕はそう言つて話に参加した。（孝之も僕と同じことを言おうしたが、ハモツたせいで「俺」と言うセリフから黙り込んでいた。不運だな……）

「聞いてくれよ。このバカがなあ……」

俊がそこまで言つと、明彦が割り込むように会話に入ってきた。

「まあ、聞いてくれよ。俺の親友が先日、不審者につかまりそうになつてたんだ。とりあえず、逃げ切つたらしいけどよ。」

明彦はそこまで言つと、僕は察したよう（そして、『不吉』の正体を聞くように）に言った。

「とすると、俺達がその犯人を捕まえると言うことか？」

思つたことを言つてみたら、

「ビインゴオ！そういうことだ！」

と明彦は親指を立ててはしゃぐように言った。

「な。こいつ、アホだろ。」

俊が哀れむように言つたら、再び口論が勃発されようとしていた。

だけど、僕のこの一言で勃発を防いだ。（てきとうに答えたのだが、後に『不吉』を呼び寄せることになるのである）

「……まあ、面白そうだな。やってみようぜ。」

しかし、これが原因で事態は大変な方向へ向かった。それは、

「聞いたか？仲間はこれで二人だ。ボクたち死んだら、主な友達はいなくなるぞお。」

と明彦がをほとんど、脅迫らしきことしたのだ。この『脅迫』によつて、

「・・・わかったよ。やりやいいんだろ。やりや。」

と俊が言って、リタイアした。また、明彦が、

「いつものメンバーじゃないが、これで事件も楽勝だろ。」

そう言って、孝之を煽り立てた。明彦の思わくどうりに、

「上等だよ！俺もやってやるよ！」

孝之も仲間になった。（その姿を見て僕は、こんな自分達に振り回されるこいつが本当にかわいそうに思った。）こうして、いつものスタメンで僕らはちよつとした冒険をするのだった。そこで明彦が「作戦会議をしたいところだが、ちよつとジャンケンしてくれ。」と何か意味ありげに言い出した。僕らは、その言葉を疑わず、指示どうりに動いた。

「さぁーいしよーはグーー。ジャアーーンケエーーン・・・」

放課後、

僕と俊と明彦は各自で準備された自転車に乗って、その僕らの前方約十メートル先に孝之がいた。

状況を知りたいとしたら、作戦会議から説明する。明彦の考えた作戦は、不審者の現れた場所に全員が移動。一番前の人（孝之）は不審者をおびき寄せる『エサ』なのである。そこで、不審者が現れた場合、後方にいる（僕たち）『自転車隊』が追ってくる。こうして不審者を捕まえたら、ボコボコにして、警察に突き出すと言う作戦である。さきほどあったジャンケンは、役割を決めるためのじゃんけんだったのだ。（一番怖い『エサ』役に選ばれた孝之の感想は、「死にたい・・・」だった。）

一見、楽そうに見える（僕もそれが理由で選んだ）『自転車隊』だが、実際やってみるとかなりの神経を使うのだ。不審者はどこから狙っているのか、この作戦はバレていないか、孝之はまだいるだろ  
うか

など、いろんなところに目をやりながら、怪しまれないように俊と





## 小さな冒険―追跡と謎解き

屋比久俊普段のこいつは笑ってしまうほどの無気力の持ち主であり、勉強のレベルは北斗軍団（ていうか学年）の中で低い方にランクされる。理由はわからないが、周りからはのあだ名はネコ、ミーちゃん、タマなどネコに関する文字（魚やキャットフードも含む）を言くと俊本人からもなく、鉄拳制裁をいただくことになる。しかし、強くなるのは、パンチ力だけでなく、全体的な能力が大幅にアップするのだ。短距離走で例えるなら、50m走で普段の能力が約20秒だとしたら、怒らせると、約10秒の記録を作り上げそうなほどの男である。また、ケンカによる能力もひよつとしたら、かなり強い方だと断言できる。（僕より強いかも・・・）

俊の乗った自転車は、徐々に黒いバンへと近づいてきた。

（よし、いける。）

僕がそう思ったときに、バンは意外な方向へ進んだ。それは、

「な！？左折したぞ？」

と僕らは驚いた。左折をすると、そこは上り坂になっていたからであつた。いくらキレた俊でも大変なことになったのだ。俊に続いて僕も明彦も体中の力を振り絞るようにして坂を駆けた。けれど、相手はスタミナじゃなく機械でできた車だ。少し食らいついたものの、僕らとバンの距離は徐々に離されてきて、さつきとは逆の展開になってしまった。僕も明彦も俊も坂の途中で力尽き、バンは勝ち誇つたように僕らの視界から消えてしまった。何もできなかった僕は孝之に対して、

「・・・すまん・・・孝之・・・」（この時、『不吉』の正体は僕自身だったと気付いた。）  
と言っしかなかった。

バンが消え去って少しすると、僕らも完全に息が整っていた。もう一度走る事だってできる。けれど、

あのバンを追いたいのに、どこにいるのかが見当もつかないのだ。そして現在の時刻はと言うと、自分の腕時計で見る限り6時半を超えていた。はつきり言うつと、皆が諦めていたとき、明彦が

「負けっぱなしなんだぜ？これでいいのか？」

と奮い立たせるように言うつと、まず僕が、

「ちっ、俺のセリフをとりやがって。なかなか生意気だな？」

と言うつて立ち上がった。続いて俊も、

「ホント。俺もそう思っていたんだぜ？」

生意気な口をたたいて、立ち上がった。こうして全員のヤル気が上がると、こちらもヤル気になってくるから、こんな時は本当に頼もしい奴等だと思う。すると俊が、

「黒い車が通っているのを見ましたか？」

いつの間にかいろんな人にあのバンの行き先を尋ねていた。

「俺達もやるぞ。」

と明彦が言うつと、僕は、

「「ヨッシャ！」」

と張り切って言った。それと同時に僕の中にある疑問が出てきたのだった。

それから30分後、（現在午後七時）

情報と言う情報は無に等しかった。主な情報と言えば、

「あそこの方で見た。」

と言うことだけ。どこで見たと聞いてみると、その人は、坂を登ったところを見た、と答えていた。はつきり言うつと、その情報はなんの意味も無かった。なんせ、孝之を最後に見た現場だったからである。

「くっそ」。何の進展も無しか……。――

俊がばやくように言うつと、僕はさっきの『疑問』を問い掛けた。

「なあ。何で孝之は連れて行かれたんだ？」

この『疑問』に対して、明彦は、

「やっぱりアレだ。運が無いんだよ。」

僕の予想どうりの返答だった。この返答に対して（やっぱりそうなのかな？）と思った。少し落ち込んだ僕はもう一つ聞いてみた。

「じゃあ、さらわれかけたお前の親友って誰？」

この質問の答えは、

「ああ、あれか。あれは義尚だな。」（あまりそう見えないけど・・・）

明彦は思い出したように答えた。すると僕は『答え』を見つけた。僕は改めて、

「もう一回聞くけど、なぜ連れて行かれたのが、孝之なんだ？」

と明彦に聞いてみた。明彦はしばらくすると、何か納得したような、そして思い出したような顔をした。俊は話についていけず、無理やり話題に入ってきた。そして、

「何だよ。俺にも分かるように説明してくれよ。」

俊が苦しむように言った。僕はその答えを少し遠まわしにして伝えた。

「一度目は義尚、二度目は孝之、これがどういう意味分かるか？」  
そう言っても、俊は、

「何言ってるんだお前は？」

と言い返した。（つまり分っていない。）もう一度僕が言おうとすると、

「今度は、俺が言っぜ。」

と明彦が割り込んだ。（多分かつこつてたくて割り込んだな・・・）  
「少しヒントをやろう。孝之とあいつには、ある共通点がある。」

明彦はそう言ったのに、

「はあ！？だから何なんだよ？」

俊はまだ気付いていなかった。明彦がめんどくさそうに、

「もう一つヒントだ。これは決定的だ。あいつらにあって、俺達

には無いものだ。」

ここまで言ったのに、俊は、

「ああ！！？ワケわかんねーよ。要するに何だよ！？」

と少しキレ気味になっていた。まだ分っていないネコちゃんのために僕はポケットから十円玉を出して、こう言った。

「ようするに、これだ。」

簡単に僕がそう言っていると、俊は、

「そーーか！！金が狙いつてワケか！！」

今更ながら、俊が答えをとくことができた。謎解きもできたし、これからの反撃を誓う僕らであった。

## 小さな冒険／新たな策と孝之

リベンジも誓ったし、覚悟も決めた。だけど、僕らは困っていた。いくら敵を倒したいと思っても、孝之を助けたいと思っても、『場所』が全然特定できないのである。しかももう時間もヤバイのである。と言うわけで僕らは途方にくれていた。そんな状況の中、僕はひとまず提案を言ってみた。

「・・・なあ、いくらなんでも遅すぎるぞ。美智子にこのことを伝えて、明日解決しよう。」

そう言ったのだが、明彦は、

「バカヤロウ！今日で片付けねえと、孝之がアブネエだろ！」

と、ほとんど怒ったように言った。今度は気まずい雰囲気 flowed. その状況の中、今度は

「とりあえず、美智子には伝えた方がいいだろ。」  
と俊が言った。

「・・・じゃあ、そうしよう・・・」

何かしょんぼりした空気が流れたまま、僕らは美智子の家へ足を動かした

コンコンコン。

僕らを代表して俊が家のドアをノックした。

「はい。」

いつもの能天気な声が聞こえてきた。（僕らに取ってこの声を聞くことは、結構辛かった。）そして、美智子がドアを開けた。

「なあゝに？遊びにきたの？」

とあんまり言わなそう言葉で出迎えられた。普段なら笑うところだけど、僕は真剣な表情でこう言った。

「重大なことを言う。立ち話もアレだからとりあえず家に入れてくれ。」（僕の言った言葉、自分自身、変と思った。）

そうして僕らは、リビングでこれまで『事件』の話を書かせた。術と説明した後、美智子は、

「うそ・・・でしょ・・・」

と案外驚いていないような顔つきで言った。（ぶっちゃけると、もう少し驚いて欲しかった。）

「ウソじゃない。全部マジだ。騒ぎを広げたくないから、全部内緒にしてくれ。」

と明彦が諭すように言った。けど美智子は

「じゃあ、孝之が大丈夫か聞いてみるよ。」

うるたえたように携帯電話を取り出した。この様子を見た僕らは、（やっぱり話し聞いてないし。ていうーか「じゃあ」「じゃねーだろ。」といういろ（心の中で）ツツこミを入れた。それを見た明彦が、

「それだ！その手があったかー！」

何を思ったのかそう言い出した。

「コイツ・・・とうとう壊れたか・・・」

俊が哀れむように言った。けど、明彦は今のセリフを聞いていなかったように、そして生き返ったようにこう言った。

「甲斐、お前に国語の成績が本当にトップなら、やって欲しいことがあるんだが・・・」

一方、孝之はというと・・・

俺が捕まってどれくらいになっただろうか。辺りはもう暗くなっていて誰かが助けに来る、という雰囲気すら感じられなかった。そんな空気の中、グラサンと帽子で顔を隠した男は、

「さて、そろそろやるますかね。」

そう言つて、俺のほうへゆっくり近づいてきた。そしてまた、男が「なあ、携帯持っているか？今使いたいところだが・・・」

恐怖を煽り立てるように言いながら、俺の服を調べ始めたその瞬間

だった。

ピリリリリ。ピリリリリ。

胸ポケットから携帯電話が鳴り響いた。男は少し驚いたが、一瞬もしないうちに冷静になって携帯を取り出した。男は携帯を開き、

「おい。お前の家の番号か？」

と聞いてきた。俺はその番号を見てみると、それは全く知らない番号が表示されていた。俺はワケが分らないからとりあえず首を縦に振った。そうすると、男は携帯に応じた。

「やあ、こんばんは。」

男がそこまで言うのと急に静かになった。少しすると

「何だそれは？言ってみろよ。」

と俺には理解できない話が展開されていた。すると突然男が

「何だと！！それはどういうことだ！」

何かをしたような、そんな叫び声が響いた。

「それで、どうしろと？」

さっきとは変わって男は何かを知りたいように質問をしていた。（この後の話はあまり聞かなかった。俺にはついていけなさすぎだったからだ。）

少し会話が途切れて沈黙が流れていた。すると男が、

「俺の名前？まひるいんかい如月開だ。今の話、ノったぜ。じゃあな。」

こうして携帯による会話は途切れた。男は携帯の電源を消したのだ。そうすると突然男が俺を乱暴につかんだのだ。そして、

「来い、場所を変更だ。」

そう言われ、俺に何も説明しないまま、バンに乗せられ何処かへと移動した。移動中俺はなぜこうなったかを考えてみた。一つ目は何かの情報ミスで俺はニセモノ扱いされ殺される、もう一つは『アイツら』かもしれない、と言う考えが出た。けど、二つ目はやっぱりありえないなと思って自らその考えを消した。

……どれくらい沈黙が流れていただろう。気が付けば俺の知っている町並みが現れたのだ。俺は思わず、



「おお！」

と感激してしまった。（自分の家かなり恋しかったからだ。）けどそう言つと、

「おい、黙ってる！」

開が怒鳴るように言った。（そう言えば甲斐と同じ名前だと今更気付いた。そしてなぜ戻ることになったかも知りたかった。）

数分後、

車は、俺の想像どころが夢にも思わない場所に到着した。そこは、俺が小学校の頃『秘密基地』だったからである。開はバンから降りて外の三人の男に何か話をしていた。話が済んだのか、開は俺に「降りろ。」

と強引に降ろした。（その拍子におでこをぶつけた。）俺は恐る恐る顔を前に向けると、目の前にはかなり怪しい格好をした中学生か高校生三人（グラサンや帽子をかけてるせいでよく分らない）が俺を見下すように笑っていた。正直、今かなり怖い状況だった。

## 小さな冒険／事件解決

俺は正直死を覚悟している。事態がここまで来るとそうするしかないのだ。けど、何を話すのかが気になっしょうがないから俺も話に割り込もうとしたが、開が無理に俺を引き連れた。そして、この開から意外なセリフが出てきたのだ。

「ホラよ。こいつは返すから金をよこせよ。」

てつきり殺されると思っていたのに、俺の代わりに金を払う奴が出現して俺はかなり驚いていた。困惑している俺をよそに会話は続いていた。

「金は出しますよ。けど、この人をもう少し、ちゃんと見せてくれないませんか？」

見た目とは裏腹に声がやや高く少し背の低い『男』がそう言った。

「ああ、いいぜ。」

少しじれったそうに開は言った。『男』は俺の顔中をを少し眺め回した後、

「確かに。この人は違いますね。」

確認したように言った。

「やっぱりそうだろうが。早く金をよこせ！」

甲斐は我慢できないように言った。『男』は少しため息をついて、  
「・・・いいでしょう。金はあげますよ。」

と落ち着くように言った。『男』は隣にいた男からすぐにトランクを受け取った。そして、

「このトランクの中に、僕、大城孝之の財産が入っています。」

俺に取って驚きの発言が出てきた。俺はますますこの『男』たちの正体が分らなくなっていた。俺がさらに困惑しているとき、  
「どうぞ。」

と『男』は丁寧にトランクを手渡した。そして開が、

「ハハ・・・これすべてが俺のものか・・・」

と勝ち誇った顔でトランク開けた。すると、開は何を見たのかかなり驚いたような顔をしてこちらに顔を向けた。そして、

「何故だ！話が違うぞ！」

開がそう言ったとたん、さっきの落ち着いた様子とは打って変わって『男』は突然乱暴に開の右ほほに渾身の右フックを炸裂させた。これを食らった開は勢いよくぶっ飛んだ。度重なる状況の変化に俺は頭を痛めた。何が起こったか順番に整理させていると『男』がさっきの声の高さとは正反対にかなり荒々しくしゃべったのだ。

「コノヤロー。やっと殴れたぜ。このパクリ野郎が！」

グラスンと帽子を取った『男』の正体は真正正銘の甲斐だった。

<甲斐の視線>

僕が本気の右フックを如月（名前で呼ぶとかなりむかつく・・・）にはなつた後、かなりすつきりした。なんせ、パクリ野郎を自分の手でぶっ飛ばしたし、生きている孝之と対面できたから、かなり嬉しかった。今すぐにでも孝之のところへ行きたいけれど、如月がまだ立って来る事を知っていたから僕は動かなかった。感じたとおり、如月はフラフラだが戦う意欲を見せていた。そして如月のその目は怒りに震えていた。僕はそれを煽るように、

「ちようどいい。まだこっちは殴り足りないんだよ。」

余裕な口調で言った。すると如月は、

「てめええアアア！殺してやるゾオオ！」

狂ったように叫びながらこちらに走ってきた。僕が迎え撃とうとすると、如月はポケットの中からナイフをいきなり出した。

「ヤッベ。」

僕はこの展開を考えてなかったから、ナイフの刃先と衝突しそうだった。けどとつさに顔をどかしたおかげで右ほほをかすと言う結果でどうにかなった。（まさか、コイツと同じ所をケガするとは・・・）

痛みが来たことによって、僕も思わず

「デメエ！痛えじゃねかよ！」（ほとんど同じキレ方だよ・・・）  
キレて僕はパンチの雨を如月の顔を中心にたくさん降らせた。ついでにナイフで反撃しないよう、ナイフを持った左手を思いっきり殴った。ナイフを落とした瞬間僕はもう一度右ほほに右フックを振りぬいた。

（完璧だ！）

自分でもそう思うほど見事な一撃がはいったのだ。しかし、如月は立ち上がった。けれど、さっきとはダメージの量が違うらしく、今の如月はちよつと押してもKOできそうな程弱っているボクサーに等しかった。（まさに虫の息だ）めんどくさくなった僕は、

「俊、明彦、孝之。皆でぶったおそうぜ。」

と皆に声をかけた。僕が戦っている間に孝之はすっかり自由の身になっていた。何時間ぶりに全員がそろって、僕は非常に気持ち良かった。

「いくぜ！」

孝之を先頭に皆が如月のところへ駆けていった。

「や・・・やめて・・・」

命乞いのように開が言ったのだが、その声を無視して僕らは

「オラアー！！！！」

全員が一斉に如月に攻撃した。孝之は左足にローキック、俊は右足にローキック、明彦はボディブロー

、僕は顔面にドロップキックを放った。全員一斉に攻撃したのが良かったのか、如月は本当にダウンしてしまった。（一瞬死んだと思った）少しの間休憩して、僕は孝之に、

「よ。おかえり。」

と普通に言った。孝之は、

「・・・ただいま。」

と返してきた。その直後に孝之は思い出したように、

「さっきのアレ。どういうこと？」

と孝之が聞いてきた。僕は、

「は？アレって？」

と聞き返した。（本当にわからない）

「さっき変装したヤツ。アレ何？」

ともう一度聞いてきた。僕は会話の内容がわかると、

「ああ、アレか。アレはな……」

ウーウー。

外からパトカーなサイレンの音が聞こえてきた。孝之が外へ移行とするのは僕らは拒んだ。そして、さっきの変装グッズを急いでつけて、孝之にこう言った。

「いいか。何も知らない。何も見てないって言つていてくれ。」

そう言った直後、僕らは孝之を置いてこの場所から急いで逃げ出した。（ヘタしたら、如月をボコボコにした僕らも捕まると思ったからである）

翌日、

僕らはいつもの通りに学校に通った。校門の前まで来ると孝之と出会った。すると孝之が、

「だから、変装のアレを聞かせろよ。」

聞いてきた。何かしつこいから、僕は最初にこう言った。

「それを言う前に最初から説明しないといかん。」

昨日明彦が考えた作戦は、犯人の所へ僕らが『行く』ではなく、僕らが『誘う』のである。つまり、相手をこちらにひきつけるように僕らが上手く話さないといけないのだ。そこで、国語の言語能力が高い僕が選ばれ、孝之の番号を知らない人から携帯を借りて、電話をしていた。電話での話が終わった後、俊が警察に先回りするように通報していたのだ。ちなみに、如月と甲斐の会話は、

開「やあ、こんばんは。」

甲斐「こんばんは。突然なのですが、重大なことを話します。」

開「何だそれは？言ってみろよ。」

甲斐「あなたが連れていった人は孝之ではありません。」

開「なんだと！それはどういうことだ！」

甲斐「ですからね。本物は僕なんですよ。」

開「バカな！ちゃんと家に入るところも見たんぞ！」

甲斐「僕が招いただけですよ。」

開「………」

甲斐「僕が金を払えばいいんですね？」

開「ああそつだ。」

甲斐「金はちゃんと持ってきます。その代わり、あなたにやって欲しいことがあります。」

開「ほう。それで俺はどうしろと？」

甲斐「そこにいる僕の友人を連れてきてください。金と友人を交換ってことでどうでしょう？」

開「イイゼ。その………」

甲斐「ああ、失礼。名前も聞けますか？」

開「名前？如月開だ。今の話、ノツたぜ。」

甲斐「………そうですか。それでは人気も無いし、あのR学校の近くの工場でどうでしょう。」

開「ああ。そこにしよう。じゃ、あばよ。」

ピッ。（電源を消した）

と言う会話をして僕らは孝之にはバレないよう、変装していた。（あいつが正体を言いそうだから、変装した。）そして開がトランクを開けて油断している所をたおした。と言う作戦だった。

僕が作戦のすべてを言うと

「納得した？て言うか、俺が何言ってるかわかるか？」

と聞いてみた。孝之は本当に分っているのか、

「アア、ワカッテル。」

と無表情で答えた。（絶対分ってないのはバレている）

「ところで孝之、事情聴取はなんていつてんだ？」

僕が逆に質問してみた。すると、孝之は楽しそうに、

「そのうち、わかるさ。」

そう言つて走つていった。僕は珍しくあいつのセリフが氣になった。

朝の会、

僕の担任の先生が僕のびっくりする話を始めた。

「ええ」。昨日不審者が捕まった話がありました。警察の人が犯人を捕らえた人が誰かと聞いてみましたが、聞く所によると、私が犯人を倒した事になってました。」

僕たち（北斗軍団）はこの話を聞くと思いつきり笑つてしまった。

先生が、

「おい。うるさいぞ。」

注意した。それでも僕は顔を伏せて笑つていた。

（孝之め、面白い事を・・・）

と素直に思つていた。北斗軍団以外の人から見れば変わったニューースだが、僕らだけが知っているから僕はかなり気持ちよかった。この話題が終わった後、僕たちは冒険を終えていつもの日常へと戻つていった。

## 不登校生徒を連れ戻せ！その1

「オラオラオラオラオラー！」

朝早くから、僕と俊は単純に殴り合っていた。けどそれは、一般的に見た感想であって、僕の中ではちっちゃいネコとじゃれている感覚であった。（ちなみに、上のオラオラは僕が言った。）何故じゃれているかと言うと、理由は簡単。退屈だったからである。本気で殴りあうとシャレにならないから、やっぱり軽くやっている。けど俊の場合、僕が「ネコ！」と言ったせいで本気になり、手加減しているのは僕だけであった。

「その程度の攻撃、効かぬわ。」

何かの悪役のような言葉を言った俊だが、もうこいつの体は全身が震えていた。つまり、僕の攻撃がかなり通用しているのだ。その様子を見た僕は、

「人も集まってきたし、もうやめようぜ。」

と言ったのだが、俊は無視して、

「貴様から仕掛けた勝負だろう。最後までせぬのか？」  
としつこく言った。

「・・・はいはい。今すぐ天に還らせてやるよ。」

僕がそう言ったとたん、僕は俊の懐に入り、のどぼとけの部分に逆水平チョップをおもいきり放った。その瞬間、俊は、  
「ケフツ。」

と言うおもしろい声を出してダウンした。僕はカエルのように仰向けに倒れた俊を見て、一人で大爆笑していた。

授業時間を飛び越えて、45分の休憩時間、

明彦が珍しくも真剣な顔で、

「北斗軍団、今日は深刻な会議を行う。」

と急に言い出した。あまりにも珍しい光景なので、



「ほう。それで、今日の議題は？」

と真剣に食いついてしまった。

「朝の出席確認の時、すっかり名前すら呼ばれなくなった奴がいるが、誰なのか知っているか？」

と聞いてきた。僕は、

「いや、知らん。」

と素直に答えた。すると、孝之が、

「え」と、確か、津嘉山健つかやまけんだよな？」

と言った。名前を聞かれて僕はそいつの存在を思い出した。僕の記憶が確かなら、コイツは今年に入ってから、一度も学校に来ていない生徒、いわゆる『不登校』って奴だ。

「ふうん。で、その健が何か？」

僕が何気なく聞くと、

「なにつて、あいつを学校に來させるに決まってるだろ。」

と明彦が素直に答えた。

「そんな事なら、あいつ自身で解決させろよ。」

とめんどくさそうに答えた。続いて、

「そーだよ。わざわざ俺達が行かなくてもいいじゃんか。」

孝之が反抗してきた。少しすると、

「あいつが学校に來ないのは、人が嫌いだから、らしいぜ。」

明彦は小声でそう言つと、僕のほうに「どーする？」と言つような顔つきで僕のほうを見ていた。

「・・・わかつた。わかつたよ。行けばいいんだろ。」

降参するように僕は言った。孝之は珍しそうに、

「なんでか？わざわざ行かなくてもいいのに・・・」

そう聞いてきた。僕はその質問にはつきりと答えた。

「俺とあいつに『共通点』があるからな。そついうのは助けてやらんとな。」

僕たち三人（俊は途中でリタイアした。その理由は、朝僕が放った

チョップのせいで声が軽く出なくなつたと言ふことらしい。ちなみに、休憩時間の時点で彼はすでに学校から去つていた。）は、先生から健の家の地図を書いてもらい、僕らはその地図を見ながら道を歩いていた。

「いやー。あいつの家が超豪邸だつたらな。」

僕らは健の家がどんなものなのかを予想していた。僕は今言つた孝之の意見を否定した。

「いや、違つだろ。学校に行かないのは、多分、貧乏もあるからだと思ふんだ。と言つわけで俺の意見は古ぼけたアパートだと思ふ。」僕も意見を主張した。けど、明彦が、

「アホンダラかね、君達は。ココは現実だ。だから考えすぎるのもいかん。俺の意見はな、ノーマルのアパート。これしかないだろ。」明彦もそう主張した。けど僕はその意見にけちをつけた。

「ほとんど俺の意見と同じじゃないか。」

そう言つたのだが、

「『古い』と『ノーマル』とじゃちがうんだよ！」

と言つた瞬間、孝之が

「着いたぞ。」

と言つた。僕と明彦が顔を上げて家を拝見して見た。度肝を抜かれた。なぜなら、よく時代劇で出てくる奉行所らしき屋敷が目の前に広がっていたからである。このときの僕らは本当に眼が点になっていたと思ふ。このすごさを例えたとしたら、自分の家のトイレが世界遺産に登録されたくらいのすごさだつた。

不登校生徒を連れ戻せ！！　　くその2（前書き）

あらすじ

ある不登校な生徒を学校へ連れ戻そうと家まで来て見たら、すごいものを見た。

## 不登校生徒を連れ戻せ！！　　その2

五分後、

僕らはその屋敷を発見して、まだ驚いていた。金持ちだろうと少しは覚悟をしていたけど、とても和風な雰囲気の豪邸をただの中学生が目の当たりにしたのだから驚くのも当然だった。（孝之が豪邸だと予想していなかったら、僕らはショック死していたに違いない。）  
プップー　プップー

ふと、後ろから車のクラクションが鳴り出した。僕らは今たっている所からどき、車を見てみた。その車は黒いベンツと、何か怪しい雰囲気をもし出すような物が、僕らを横切り正門に入ろうとしたときだった。突然、車の運転席の窓が開き、

「ン~~~~？何ヤツテンのかな~~~~？ボクウ~~~~？」

いかにも前科がありそうな男が、怖い笑顔でそう話し掛けてきた。黒いベンツ、和風な屋敷、そしてこの顔つき。そこで僕らは健の家は『ヤーさん』の家だと言うことが理解できた。孝之は恐ろしくなつて、

「命の大事さを知ったよ。だから、帰してください。」

敬語で話し掛けてきた。けど、僕は、

「事情を知ったからには、なおさら助けてやるよ。」

と、平然に言い返した。

「なんだよ！なんでそこまでして、健を助けるんだよ！」

孝之は本気で気になったらしく怒るように聞いてきた。すると僕は、また平然と答えた。

「一昔前の俺にソックリなんだよ。」

孝之はあまり分っていなかった。だから、

「ハッ？そっくりって何が？」

ともう一度聞いてきた。少しめんどくさくなった僕は、

「だからな、あいつ……………」

とまで言うと、ベントツの人が、

「君ら、健の友達？それならどうぞ。」

ちゃんとした清々しい笑顔で、話し掛けてきた。何か勘違いしているが僕らはその言葉に甘えて、屋敷の中に入っただけだった。

僕らは家来（やっぱり顔が怖い）の人が、健の部屋を案内してもらった。（どうやら不登校の原因は引きこもりと言ったことらしい）部屋に到着すると、僕はある不思議なものを見つけた。健の部屋の向かいはずの壁なのだが、その壁には無数の穴が刻まれていた。その穴は部屋のドアにもあるのだ。そのことを不思議に思っていると、

「おい、健。」

と言いながら、孝之が無防備に部屋に近づいていった。僕が違和感を感じながらその様子を見ていたら、家来の人が、

「危ない！止まって！」

と必死で止めにはいった。孝之は指示どおり止まると、

パン　パンパン　パン

何か渴いた音が響いた。それと同時にドアに新しい穴が作られた。僕らは事態が飲み込めず、ただボーゼンとしていた。横にいた家来は、

「そうそう。健のヤツ、部屋に入るときウチのトカレフを持っていたんだよ。」

少し困ったように、それでいて、少し気楽な感じでそう言った。

今起こったことを全てまとめると、僕は小声でこう言った。

「これって、間違いなく『立てこもり』じゃねーか。」

僕らはこの事件の後、この家で食事をいただいた。僕らから見れば、かなり豪勢なメニューであり普段なら喜ぶ所なのだが、突然、目の前で友人が殺されそう（孝之は九死に一生を得たような事件）になるという本気でビックリな展開が起こったため、おいしい食事ものを通することは無かった。おまけに健の親（多分組長って顔をして

いる）とその大勢の部下達が、意味もなく静かになっているから余計に食べづらかった。しかたなく、僕らは小声で『緊急会議』を行った。

（話がブツ飛びすぎてついていけないんだが・・・）

孝之がまず口を開いた。表情が戸惑っている所を見ると、真剣に聞いているようである。そういわれた僕は、ポケットから鉛筆と紙をだして軽くまとめた。その内容は、

『今俺達は、テロリストの基地内にいる。俺達の目的はテロリストの解放なのだが、テロリストの要求は、「俺を外に出すんじゃない！」ということだ。ついさっき、お前は外に出るよう説得をしに行こうとした。すると、おまえに威嚇射撃をした。だからおまえは生きているんだ。と言うわけなんで、まだ俺達の目的は達成されていないんだ。任務は続行いたす。』

と書かれていた。それを見た孝之は、約500万ドルの価値はありそうな笑みをしながら、本気で涙を流していた。孝之を泣かしたところで、僕は『組長』に一つ質問を投げてみた。

「健はいつから学校に来なくなっただんですか？」

そう聞いてみると、『組長』は、

「そうですねえ・・・」

そう言っただきり、真剣に考え込んでいた。しばらくすると、

「ああ！思い出しました！」

と爆発したような大声で叫んだ。僕はそれを耳を塞いではいなく、『爆発』を直撃したから、人生の中でトップにランクされるような痛さが耳に走った。それをこらえながら、

「そうですか。では、教えてください。」

と冷静に聞いた。『組長』は一つ一つをじっくり思い出しながら、僕らに話を始めた。

「確か・・・健が二年に上がる少し前の時期に、母親を無くした

んですよ。私も健も妻のことが好きだったから、あいつの為に盛大な葬式を行いました。けど、何故なのかそれから少しすると、健は学校に行くことを何か怖がっているように外へ出なくなっただけです。それで、今にいたる、ってわけですよ。」

僕はその話を聞いていると、ある疑問が浮かんだ。まさかな、と思いつつ疑問をぶつけてみた。

「喪中には、健の友達はいなかったんですか？」

『組長』はまたじつくり思い出していた。顔を上げると、今回は叫ばず冷静に、

「そのような人はちつとも見かけなかったな。」

そう言った。この一言で、先ほどの『疑問』は『確信』へと変わっていった。

「そう言う事か・・・。」

僕はそう言いながら健の部屋へと向かって行った。

「お客さん！？ いったい何を！？」

「止せ、甲斐！死ぬぞ！」

『組長』やら、家来やら、明彦やらが、口々にそう言ったのだが、僕は足を止めずに健の部屋へ向かった。

食事をいただいたあの広い部屋とは打って変わって、健の部屋の廊下はひどい位殺伐としていた。僕は後ろからついてきている人たちに、

「お願いなんだが、絶対に手を出さないでくれ。それと、もうついでこないで下さい。」

と一言言って、後ろの人々を待機させた。僕は一人で健の部屋へ足を進めた。足音を出しながら、それでいて無防備に進んだ。

（客人、それはヤバイですって！！）

かろうじて聞こえる小声で警告してきたが、僕はそれを無視しながら、歩いて行った。健の部屋のあの『ドア』に差し掛かる直前に、僕は足を止めた。そして弾丸のあたらない安全地帯の壁にもたれな

「が、僕は健に話し掛けた。  
「よう、健。」



不登校生徒を連れ戻せ！！！！その3（前書き）

前回から不自然に導入されたが、とてもわかりやすい。

あらすじ

甲斐が健に話し掛けた。

### 不登校生徒を連れ戻せ！――その3

「ちよつくら話をしようぜ。」

僕は銃弾のあたらない範囲内で健に話しかけた。けれど、健からの返事は返ってこなかった。しかたないので、僕は健に無理やり声をかけた。

「なあ、健。そんな所にいても、つまないじゃん。学校に来いよ。」

と言ったのだが、健は突き放すように、

「なんで？なんで学校に行かなきゃいけないの？」

と言った。僕は、どこかの模範生徒みたいに言った。

「そりゃ、おまえ、友達がおまえのこと心配してるんだぞ。」

我ながらくだらないことを言ったもんだと思った。そして健は、僕の少し予想したとおりの返事を返してきた。健は馬鹿にしたように言った。

「トモダチ？ハハハ、馬鹿じゃない？」

予想していたとはいえ、なんだかむかついた。僕が、そう思っていることも知らず、健はさつきとは打って変わって、少し寂しそうにもう一言いった。

「トモダチなんて、全部ウソっぱちなんだよ。」

僕は少し言葉を考えてみた。そして選んだ言葉は、

「何故そう思う？」

と言った。そう言うとき健は、

「だって、そうだろ！？皆、僕がヤクザの息子っただけで、避けていくし、親友だと思っていた奴でさえ、遊ぶことを避けていたんだ。よくよく考えてみたら、電話で連絡をする時もそうだ。僕からはかけるが、あつちからかけた事なんて一度もないんだよ！そして、誰も家に来ようともしないんだよ！だから！トモダチなんてものは、全部ウソなんだよ！」

たまっていたもの全部吐き出したように、叫んだ。僕はそこまで聞くと、

「と言ってもアレだろ？本気で心配してくれた時は助けに来たもん  
だろ？」

少し心配するように言った。そう言ったせいで、健はまた寂しそうに、話をした。

「心配？助け？ありえないね。いじめに関しては、何の問題も無かったさ。けど、勉強や、いろんなことに困った時に友達に相談をしても、相手はこっちの顔も見ないで、適当なことを言ってくる。あげくの果てには、母親の葬式には僕の友達なんか誰一人来ることなんか無かった。」

そこまで聞くと、孝之と明彦は『原因』を全て理解できたらしい。つながったように、二人は、

「ああ。」

と言った。つまり、健が部屋にこもった理由は人間不信、そして、『友達』と言うものを嫌っていると言うこと、『ヤクザの息子』と言うコンプレックスというわけだった。この二人がそこまで分ると、健は話を続けた。

「もちろん、喪中に友達にきて欲しい頼んださ。けど、どんなに誘いかけても、誰も来なかった・・・そんな目にあつといて、学校に来て、トモダチとはなす？無理な注文だね。うわべだけの友達なんて、もうゴメンだよ・・・」

そこまで言っていると、健の口調はもつと静かになり、疲れたようにこう言った。

「だから・・・もうほつといてよ・・・」

それっきり、健からの応答は無かった。そして、僕は決心したようにこう言った。

「ああ、分ったよ。」

それだけ言つと、僕の後ろの方にいた皆さんが『What?』と言う風な表情をしていた。勘違いされないために、僕はもう一言言っ

た。

「そのかわり、だ。俺の条件を一つのんでくれ。」

僕は決心した。もう迷わない。そういう感情を抱きながら、そう言  
った。

「……条件って、何？」

健が本当に知リたそうに言ってきた。場所が場所だから、僕は勇気  
を振り絞っていった。

「俺と勝負しようぜ。とてもシンプルなタイマンだ。」

不登校生徒を連れ戻せ！！！！その4（前書き）

あらすじ

貝が凄い事を言った。

## 不登校生徒を連れ戻せ！！！！その4

今僕の言った発言は相当インパクトがあったらしい。明彦と孝之は、お口を開けてポカンとして、後方にいた怖い顔の家来達も同じ顔をしていた。

「客人、アンタ、何言ってるんだ？」

口には絶対出したくないが（命がもったいないし）こいつらは顔も悪いのに頭も悪いらしい。全く話を理解していなかった。

「いちいち、タイムンをするなんて、君は何考えてるんだ？」

健は疑問に思ったらしく、僕に質問してきた。僕は迷わず

「別に。お前の頭を冷やそうとしてるだけだが？それがどうしたのか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

健は何も答えてこなかった。話が途切れた所で、僕は話を本題に戻した。

「30分。それまで庭のほうで待ってやるよ。30分以内にきたらタイムンをはじめめるぜ。」

「・・・・・・・・君が勝ったらどうするの？」

僕もそこまで考えていなかった。少しうろたえて、僕はこう言った。  
「・・・・・・・・潔く学校に来る。それだけ。しかしだ。お前が勝った場合、俺はお前に関わらないし、学校には別にこなくて良い。」

僕は付け加えるようにもう一言いった。

「あと、30分待つが別に来なくたっていいぜ。けど、来なかったら、少なくともお前は世の中を怖がつて一生そんなトコで何も変わらず、生きていくだろうな。そうなるとお前はかなりの臆病者だな。」

僕はここまで言うとか来達も黙ってはいなかった。

「客人、テメエ。いい加減ダメツてろ！」

家来はスゴイ形相でこっちに来て、僕の頭のあっちこっちに銃を突

きつめた。僕はそれに動じないで、  
「そんじゃ、待ってるぜ。」  
そういうと、この部屋を後にした。

「お前って、スゴいなあ。」

孝之からそういわれた。急に言われて僕は戸惑っていた。

「何が？」

そう聞いてみると、

「だってよー、考えてみるよ。自分の頭に銃をくっつけられてんの  
に、それをシカトして、何処かに行く奴なんて絶対いないぜ。」

孝之が熱中したように説明した。僕も考えてみた。・・・・・・・・・・

・うん。いないな。

「・・・・・・・・トイレに行ってくる。」

「？　どうかしたのか。」

「イヤ、普通にトイレに行くと思いのか？」

僕は少しキレ気味に言う。孝之はビクッとして

「・・・・・・・・どうぞ・・・・・・・・」

と言った。

僕はトイレに行くと、

「・・・・・・・・チクショウ・・・・・・・・許さんぞ・・・・・・・・」

そう言いながらズボンを脱ぐと履いていたズボンもパンツもビショ濡れだった。あまり言いたくないのだが、『失禁』と言うものを初めてしてしまった。

「・・・・・・・・クロス・・・・・・・・コロシテヤルゾ・・・・・・・・」

僕は完全に怒りに震えていた。

トイレで着替えを済まし、

僕は庭に戻った。

「よう、甲斐・・・・・・・・あれ？ズボン変わってない？」

明彦は僕の怒りのつばに触れた。

「……じゃ、ついでにテメエの顔の形も変えてやろうか？」

今の僕なら、人造人間も倒せるほどの勢いはあるだろうと思った。それくらい殺気を出していた。

「……問題ナシですな。どうやら。」

今の会話をなかったように長く話を進めた。

「で、そいつダレ？」

僕は明彦と孝之を後方に指を指した。二人が振り向くと、綺麗な顔立ちで、カッコイイ男の理想の体型っぽい、やせた人がたっていた。

「……と言っても、多分健だろうけどな。」

見とれていた二人は、「何！！」と言うような顔をした。

「ビビって逃げた、と言うわけでもなさそうだな。」

少し挑発してみたが、健はのってこないで

「いいから始めようぜ。」

と言った。ただの庭だった所が、完全に闘技場のような雰囲気に変わっていった。



不登校生徒を連れ戻せ！！！！！！その5（前書き）

前回のあらすじの所の漢字間違えた。で、

あらすじ

甲斐VS健

## 不登校生徒を連れ戻せ！！！！その5

紗次田甲斐、北斗軍団の中で唯一戦闘を好む（自分はそう思わない）人物で、ヒゲがクラスの中で特に長いため、『オッサン』と呼ばれたりしている。稀にだが奇妙な発言をしたりして、回りを混乱させたりすることが、しばしばある。好きな言葉は、『人類平等』である。

### 生徒会調べ

この広い庭に静寂が流れていた。此処にいる全員が呑気にしゃべれるような雰囲気じゃないと言う事が分かっていたのかもしれない。僕も健も沈黙しながら互いに歩み寄ってきた。お互いが殴れる範囲まで来ると同時に歩をとめた。

「・・・覚悟・・・できてるか？」

僕は試すように聞いた。それに対して健は、

「なんだ？自分にそう言ってるのか？」

挑発するように言った。この会話だけで僕は、

（コイツはもう迷ってないな。）

と確信した。

「「死ね」」

僕と健がそう言ったと同時に僕らは顔面に右のストレートを打ってきた。パンチを撃つたと同時に僕は左に、健は右（僕から見て）に顔を逸らした。そうすると、僕らは後ろに退いて距離をとった。またともにヒットしていないけど、お互い右ほほにかすり傷ができてきた。

「やるねえ。何でそんなに強いのか？」

僕はそう質問した。健は少し笑って、

「昔、一応空手をしていたからね。」

と自慢するように言った。その様子を見て僕も少し笑い、

「偶然だな。俺もその類の部活をしている。」

と言った。僕らがそこまで言うと、会話は途切れ、戦いが再開された。

僕は前に踏み込み腹を打とうと右のパンチを放とうとしたら、健のパンチがすでに来ていた。

（やば。よけられねえ！）

そう思った僕は額の先パンチを受けた。そして僕はすかさずパンチを出した。そうすると、健は膝蹴りを放った。僕はとっさにその足を殴って、膝蹴りを上手く回避させた。

「うっ！」

健は膝を殴られてひるんだ。僕はその隙に左で腹を三回殴り、動けなくなった瞬間、僕は思いつ切り右ストレートを顔面にヒットさせた。すると、健はぶっ飛んで、そのまま倒れてた。少し様子を見てみたが、あまり動かなかった。

「俺の・・・勝ちだな。」

僕は少し息を切らして、戻ろうとすると後ろから、

「・・・おい・・・待てよ・・・」

健の声が聞こえた。僕が振り向いた瞬間、何かが目に入った。それはザラザラしていたから、すぐに砂だとわかった。

「ため・・・」

目を開けて反撃をしようとしたら健のハイキックが僕の頭にまともにヒットした。ぐらついた瞬間、県の猛攻が始まった。

「オラオラオラオラオラオラ」

四方八方からとんでくるパンチとキックを全てよけきれず、ヒットした。そして、

「オラア！」

とどめに前蹴りをして、僕は吹っ飛んだ。今度は健が僕を見下ろしていた。その様子を見た明彦と孝之は「か・・・甲斐！」

信じられないものを見たように、二人は戸惑っていた。すると、

「おい、立てよ。ハンデしたまま僕に負けるのか!？」

健は少し怒ったように聞いてきた。此処にいる皆は気付いていなか

っ  
たらしい。

「・・・・・・・・・・・・・・・・なんで分かった？」

僕は平然と立ち上がった。そして、不思議そうに聞いた。

「まだ蹴りを出してないんだろ？早く本気出せよ！」

健は本気で怒っていた。皆は僕がまだ本気を出していなかったことに今気付いたようだった。

「・・・・・・・・分かったよ。けど、後悔すんなよ。本気出すと加減がわからないし。」

僕は忠告するように言った。

不登校生徒を連れ戻せ！！！！！！……その6（前書き）

言い訳させて。俺に無いのはネタじゃなくて、時間なんだ。だから書く機会無いんです。許して。

## 不登校生徒を連れ戻せ！！！！！！その6

僕は口にたまった血をブツ、と吐き出し、

「お前は俺に勝てない。その要因は3つある。」

自信たっぷりそう宣言した。僕は続けて、

「1つ。今言ったように俺は加減をすることが苦手なんだ。」

そういった直後、僕は思い切り地面をけって、瞬時に健の懐に入っていた。そして、右の拳で健のわき腹を全力で殴った。

ドン。

鈍い音が辺りに響いた。そして健は、殴られたわき腹を苦しむようにおさえていた。その隙に僕は顔面へハイキックをしようとした。するとそれに気づいた健は、腕を顔の横にかまえ、防御の体勢をとった。けど、僕にはそれが読めていた。僕の放ったハイキックは健の頭上を通っていった。僕はすかさず、左の拳で顔を殴った。健は吹っ飛んだ。健が倒れると、

「2つめ。俺に蹴りを使わせた事。実際に使ったり、フェイントに使ったりできるからな。」

僕はそういうと、即座にジャンプして健を踏み潰そうとした。健は横に転がり僕のジャンプ攻撃を回避した。そしてすぐに立ち上がるうとした。すると、健の顔の前には僕の履いている靴がすごい勢いで迫ってくるように見えた。健はそれをよけきれなかった。

ベキッ！

さっきのパンチに比べると、今のほうが危なそうな音が出てきた。モロに顔に入ったからしょうがない事だ。

今、オレの目の前にすごい事が次々と起こっていた。

甲斐と健のダウンの応酬、血みどろの殴り合い、このケンカを見て組長の部下が怒っては孝之に八つ当たりしているなど、普段まったく目にしないものを今日はいろいろ目にした。そして今、互いの攻

撃が当たる打ち合いとなっていた。確かに打ち合いだが、徐々に甲斐が優勢になつていゝる事に気がついた。そんな状況になり始めたとき、部下の一人が我慢の限界に達していたらしい。突然、

「組長！あのヤロウの頭、ハジかせてください！！」

そういつて、懷から銃を取ろうとしていた。今の彼は、組長の息子が殴られている事にひどく苛立つてゐるらしい。部下がそう言つと、組長は黙つてジロツ、と睨んだ。そんな組長にお構いなしに、

「ブツ殺してやる！！」

銃を出して甲斐に狙いを定めた。殺そうとしている部下を止めるため、オレが駆け寄ろうとして瞬間、

「やめんか！」

組長の怒つた声が庭中に響いた。（戦つてゐる甲斐達は気づいていないようだ。）組長は部下に歩み寄ると、本気で殴りだした。今のパンチは、あの二人のより、ずっと強そうだった。

「わかつてないなあ。この勝負、止める必要はないぞ。」

組長は恐ろしい声で言つた。部下は不思議に思ひ、

「な、何ですか。健さんも危ないというのに……」

と聞いた。組長は少し落ち着いて言つた。

「……なあ、健の顔を見てみろよ。」

オレ達は健の顔を見た。……じっくり見てみると、戦う前の顔は冷めた表情をしていたが、それが今、

絶対に負けん。

と言つような、前とは打つて変わつて負けん気な表情になつていた。

「……あんな顔、はじめて見た。」

オレが思わず言つと、組長は、感心して、

「そ。私も最近、健のあんな表情をしているのを久しぶりに見たんだ。だから、止めないんだ。」

こつ言つた。冷静に考えてみると、甲斐が健にケンカを誘つても、全く動じなかつたのはこの人一人だった事を思い出した。もしかしてこの人は、健がこんな風になつてくる事を読めたのだろうか。

そんな事を思いながら、俺はまた、戦っている甲斐達に目を移した。

ドサッ

健はまたしても吹っ飛んだ。健は身体中がふるえ、大きく肩で息をしながら、ゆっくり立ち上がった。

「3つめ。これは決定的だな。」

僕はふらふらした健に近づきながら、最後の説明をした。

「スタミナだ。学校で遊んだり部活している俺と、部屋にこもりっきりのお前じゃ、体力差はぜんぜん違う。だから、長期戦になれば、こっちが確実に勝てるぜ。」

僕は余裕の口調で少しづつ近づいてきた。焦った健は、とつさに右の正拳を突き出した。しかし、この正拳には以前のようなキレも速さも無くなり、

へろへろになっていた。見てて悲しくなりそうなほどの弱いパンチを手で軽く受けて、僕は止めを刺すためパンチの雨を降らせた。

「無駄無駄無駄無駄！無駄無駄無駄！」

最後の一撃を放つと、健の身体は空を飛んだように、宙に浮いた。



## 不登校生徒を連れ戻せ！！！！！！その7

ドサッ

宙に浮いていた健の体が、地面に落ちてきた。立ち上がろうとするが、もう動けないらしく、立つことに必死になっていた。

「どうした？リタイアか？」

僕はそう問いかけた。健は立ち上がれずに、

「・・・ギブアップだ・・・」

と小さく言った。勝負の結果を知った僕はあまりの疲労に後ろに倒れ込んだ。僕は何度か深呼吸すると、ひとつ質問してみた。

「悔しいか？」

「当然だろ。」

当然の反応だが、健は本気で悔しそうだ。というより、ほとんどキレている状態だった。

「部屋にこもってる時にそんな風に思ったことあるか？」

「・・・ないな。」

ちよつと会話をする、僕はあることを思い出した。

「じゃ、約束どおり、学校に来てもらいますか。」

そう言うと健は、

「やっぱり、僕は学校に行かない。」

と言い出した。約束を破ろうとしていることに対して僕は少し怒った。

「・・・なんでだよ。」

「学校に来たところで、みんな僕の事なんか覚えていないし、心配をしていたヤツなんて誰もいないよ。」

健がかなしい事言うから、こっちなかなしくなってきたな・・・それでも僕は、説得を続けた。

「・・・まあ、心配していたヤツは多分いないと思うな。」

この部分だけを聞けば、僕は血も涙もない鬼のような発言をしてい

るみたい……

「けど、お前が学校に来ないと、俺が悲しくなるな。」

僕がそう言つと、健はただ黙っていた。

「……いや、正確には俺達かな……」

と言つと、この戦いを見ていた明彦と孝之が駆け寄ってきた。

「おい、大丈夫か？」

そう言つと、二人は、僕らをゆっくり立ち上がらせた。

「まったく、ヒヤヒヤさせやがって、お前が倒れた時はめっちゃ驚いたぜ。」

明彦が妙な大声で僕に感想を言った。……うるさいな。僕にそう言つと、次は健に顔を向けた。

「いやあ、変な話だが、お前みたいなさういふヤツがいるとは知らなかったな。ちゃんと学校にこれば結構目立つと思うぜ。」

明彦が素直な感想を健に言った。そして、

「今からお前の友達第一号は俺達と言うことで、ヨロシク。」

そういつて、握手をしようと手を差し出すと、健は後ろを向いて震えだした。それでも、明彦はそれでも手を引かなかった。僕は明彦を呼んで、

（感激してるんだよ。ちょっと空気読めよ。）

と小声で伝えた。今何か言つのもおかしいから、

「じゃ、学校で待つてるぜ。」

そついい残して、僕らは帰宅することにした。

翌日、

「勝負！」

僕らは、朝からポーカーに熱中していた。

「見よ、愚民よ。10の4カードだ！」

明彦は自慢げにそう言つと、僕はそれに対抗して、

「なんの！こつちは10と12（クイーン）のフルハウス！」

そついったら、孝之はだんまりしていた。

「・・・・・・・・出せよ。」

僕がそう言つと、孝之はゆっくりカードを出した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

思わず絶句した。孝之はブタ（なにもそろってない）だったから・・

「・・・・・・・・ドンマイ・・・・・・・・」

明彦は本気で哀れんだ。微妙な空気が流れた瞬間、  
ガラッ

と教室のドアが開いた。そこにいたのはボロボロになった（人のこ  
とは言えないが）健の姿があつた。

「よ。げんきか？」

僕が普通の挨拶をすると、健は笑顔で、  
「おかげさまで。」

と笑顔で言つた。その時の笑顔はヤクザの息子という雰囲気はまっ  
たく見当たらず、ただの中学生津嘉山健の笑顔だった。

「そこに立つてもしょうがないだろ。ポーカーしようぜ。」

明彦が誘つと、健は少し困つたように、

「・・・・・・・・ポーカーか、久し振りだな。」

と言つて席に着いた。そうすると、

「北斗軍団に入らないか。」

と孝之が勧誘した。健ははつきりと、

「イヤだ。」

と言われた。ポーカーとは言え、遊んでいる健の姿は楽しそうだつ  
た。なぜかは知らないが、その様子を見ていたら、僕らまで楽しく  
乗ってきた。

カードを引くたび、うれしそうである。そして、この楽しそうな健  
が勝負ののろしをあげた。まるで子供みたいだった。

「勝負！！」

## ある日の北斗軍団（前書き）

たまにはこういうのもいいかなと思って書いてみました。

## ある日の北斗軍団

「おい、例のブツは準備出来てるんだろうな？」

「ああ、完璧だ。お前はどうか？」

「こつちも完璧だ。」

僕たちがなぜ、このような会話をしているかおかしいと思うだろう？  
だから、最初から説明したいと思う。

「あゝあ、ヤミナベの大会をしたいな・・・」

明彦のこの一言から始まった。この唐突な言葉に僕は、

「なんでやねん」

と思わずツツコんだ。明彦がその言葉を言ったせいで、『ヤミナベ  
大会』をしたくなってしまうた。

「いや・・・ヒマだし・・・な」

明彦が促すと、僕は何も言わず親指を立てた。

「お前らどうだ。するかね。」

少しテンションが上がった僕は変な口調で孝之と俊に問いかけた。  
俊は、

「ヒマだし、OKだな。」

淡々と言った。そして、孝之も、

「じゃ、おれも。」

と参加してきた。お前ら、ノれるぜ。

「よし、これで全員そろったし、今日するか！。」

「・・・・・・へ？」

これは想定外だ。

そして下校、

「ヤミナベだから、食材は何でもアリで。そういう事でいいか？」  
「当然。」

それが普通だろと言わんばかりに自信満々に答えた。

「1時間後、家庭科室に食材を持って、集合だ。何か質問は？」

明彦が久し振りにリーダーの顔になった。

「なし。」

僕らがそう言っていると、

「それじゃ、ヨーイ……ドン！」

明彦は威勢良く、言った。明彦が最寄のスーパーへと駆け込んでいった。僕らも違う店へ移動し、ありとあらゆる食材、調味料、ジュース、週刊少年ジャンプなどを買い込んでいった。

そして1時間後、

（1番最初の場面に戻って）と言う会話をしていたわけである。理解できたら嬉しい。

「……それじゃ、はじめます……」

明彦がやや小声で言っていると、僕らはカーテンを閉め、ドアの鍵も閉め、ガズコンロとナベを準備した。あと、電気も消しておいた。

「大会って言ってるけど、ルールってあるのか？」

孝之が一人で準備しながら、質問した。聞かれた明彦は下をうつむいてだんまりしていた。

「だめじゃん」

俊がそう言っていると、明彦はバツと顔を上げ、元気な声でルールの説明を始めた。

「ルールは、いたってメチャ簡単。このナベを一人ずつ食べて、『まずい』とか『あつい』とかのリアクションは一切とらない。とっていいリアクションは『うまし!!』と『ブラボー！おお！ブラボー!!』の二つだけだ。何か質問は？」

僕は手を上げた。

「『ブラボー』って、あんだ、そのセリフ結構有名だと思うから、あんまり言わない方がいいと思うが……」

「……多分バレないから、大丈夫だ……ぜ」

「またパクリやがったな。」

これ以上マンガの話をしていたら、こっちが危ないから話を本題に戻す。

10分後、

ナベがいい感じにグツグツと音を出していた。匂いは……きちゅい。

「1番手、孝之。」

僕はえらそうに指示した。孝之は震える手で、箸をつかむと、何の躊躇もなく口に放り込んだ。すると、

「ウエツツ、ゴホゴホ、オゲツ」

暗闇の中、僕らは厳しい現実を目の当たりにした。孝之 ア

ウト 残り3名 食べたもの プリン（醤油味）

次は俊が自ら手を上げ、なべの前に来た。ヤル気のないネコ、ほぼ将来はニートだろうと言われた俊が自ら困難に立ち向かうと……

・僕はこの俊に始めて敬意を払った。だが、それもつかの間、  
「ゲツ！マツズッ！！！」

俊はトイレへ向かった。俊 アウト 残り2名 食べたもの

の バスタオル

残るは僕と明彦になってしまった。明彦は自分から行かないし、僕も動きはなかった。と言うことで、僕はある提案を持ちかけた。

「明彦、俺たちはサドンデスで、一緒に食べよう。それで反応したヤツが負けるのだ。」

「いいだろう」

よし。あとは僕がミスをしなれば……。僕は箸をつかんでナベに手を伸ばした。てきとうにつかむと何か、硬いものをつかんだような感覚になった。僕はこれを生の食材だと判断した。

「せーの、でいくぞ。……せーの！」

パクッ、となるはずの物が、ガチッとなったのだ。僕は、この硬いものがなにか、すぐに認識できた。

……。鉄板じゃん……。

しかも熱いなべに入っていたから、以上に熱していた。我慢できつこなかった。

「あぢいいい!」 「チョーマジー!」

「……お前もかよ……」

甲斐 明彦 アウト 食べたもの アツアツの鉄板（甲斐）

原形がほとんど残ってない週刊少年ジャンプ（明彦）

大会成績

全選手 1回戦敗退



## 初会議

「えー、みな衆、今日は実に良い日だ。」

明彦が突然貴族のような口調で僕らに話しかけてきた。

「別に普通だろ。」

「何言ってるんだよ。オレたちは今日からひとつ大人になったっていうのに……」

えらそうにしゃべっていたと思ったら、今度はすごい落ち込んだ。どうしたんだ、こいつ？

「まあ、たしかにそうだよな。」

孝之が隣からしゃべってきた。

「おれたちって今日から3年じゃん。普通喜ぶよね。」

孝之が不思議そうに僕に問いかけた。僕は

「メンバーがメンバーだから、進級したなんて実感が湧かないんだよな。」

「……たしかに」

僕が進級しても普通にいた理由をいうと孝之は納得していた。

「よし、今日は3年になつての初会議をしようじゃないか。」

「お、おう。」

いきなり言うもんだから、おもわず「うん」とか言っちゃったじゃないか。

「さて今日の議題は俊、決めてくれ。」

「なぜおれ？」

「いいから、早くしろ。」

俊は少し考え込むと、

「……じゃ、3年生になったら、何をするか、つというの？」

とベタな案を考えた。（会議のテーマになつてねえ……）議題は何でも良かったのか、

「じゃ、それで」

団長が鼻をほじりながらテキストに答えた。

「発表の順番は、あいうえお順で。……………ってオレかよ！」

変なネタをして、明彦はまじめに発表し始めた。

「3年生になって頑張りたいことは、彼女をつくりたいです。そして、我が北斗軍団の活動を今まで以上に頑張りたいと思う。」

珍しくカッコいいこと言いやがって……………活動を今まで以上ってこれ以上何を頑張るんだ、一体……………

「次、甲斐だぜ。」

明彦が指を刺していった。

「3年生になって頑張りたいことは、……………いろいろ頑張る。」

「出たぜ。超普通の答え方。ププ。」

……………なぐりてえ……………思いつき殴りてえ……………

「おい俊、とつとといえ」

少し起こった僕は俊にすぐさま話題を降った。

「3年生になって頑張りたいことは、彼女を創ること。」

え??彼女を『造る』??漢字がおかしいだろ。どうみても……………

……………ていうか根本的にこいつが彼女って……………

「おい、ミーちゃんじゃん。やったな、おい。」

孝之め、禁句を言いやがった……………

「ダアレが、とつてもかわいらしい彼女の正体はミーちゃんだゴらあー……………!!」

俊が孝之に飛び掛ると、ニヤン、ニヤンといいながら、マウントポジションを取って殴っていた。もし僕らが止めていなかったら警察沙汰になっていたかも……………

「気を取り直して、最後、孝之。」

そういわれると、孝之は立ち上がって、発表を始めた。

「3年生になつ……………」

キンコーンカーンコーン キンコーンカーンコーン

「あ、チャイムだ。じゃ、今日の会議はこれにて終了ということだ。」

「明彦が席に戻ると、条件反射で僕らも席に戻った。ただ、重要なことを言いそびれた一人の男を除いては。」

「・・・許されるのか？・・・こんな・・・オチ・・・」  
孝之が小声で言った。

北斗VS南斗〜前哨戦? (前書き)

一応新章です。見てやってください。

## 北斗VS南斗〜前哨戦？

僕は自分の場所の靴箱とにらめっこしていた。その理由は、差出人の名がない手紙がひとつ入っていたからである。その様子を見ていた明彦は、

「お、新学期と一緒にお前に春が来たのか？」

と、いたずらをするように話しかけてきた。

「っーかよ、これ何？」

僕は靴箱から手紙を取り出して、明彦の目の前に見せた。それをじっくり見ていると、結論が出た。

「わかった！恋文だな、これ。」

「コイブミ？」

「ラブレターのこと。」

あまり聞かない言葉が出てきてだいぶ焦ったが、意味が分かると何の対したこともなかった。つまりこの手紙の内容は『甲斐君が好きです』って言うことだろ……。へっ？何で僕なんだろ？不思議に思っていたら、持っていた手紙を奪われた。

「じゃ、最初に読むぜ。」

「どうぞ。」

内容がどうであれ、僕は最初からこの手紙を隣にいる明彦にあげるつもりだった。手間が省けたな。

「あれ？」

黙って読んでいた明彦が突然驚きの声を出した。恋文じゃないのか？

「少し読むぜ」

手紙を取り返すと、僕は小声で文章を読み始めた。

北斗軍団団長へ

日ごろ君たちの行動があまりに派手なおかげで我々『南斗軍団』がまったく目立ちやしない。よって、一方的ながら君らを処型する

ことに決定した。ということで、今週の土曜日の正午にp体育館にて殺す。マジで殺す。ルールなどの説明は当日するのであしからず。

「南斗軍団？処型？（多分処刑だろう）ルール？こいつら何がしたいんだろ？」

「本島に謎だな。しかも所々幹事間違っていると云うところがバカだ。」

「お前もだろ。」

団長へって書いてあるのに僕のところにくるって云うのも変な話だな。

「で、どうするよ、団長」

なめられちゃってるよ、どうする？そういうふうに僕は明彦に聞いてみた。ま、答えは分かっているけどね。

「殺すしかないだろう、このパクリ集団は。」

確かにパクリだな。ほとんど。

『処型』当日、

あちらが時間どつりに来てるのに対して、僕らは20分の遅刻をしようと予定していた。その理由は、敵の戦力分析と、誰か知り合いいないかなというのをさがすためである。孝之は遠くから双眼鏡であちらのメンバーを見ていた。

「おい、大体知ってるやつがいるぞ。」

孝之が言つと、

「誰だ」

と言いながら、双眼鏡を奪い取り覗き込んだ。少し見渡すと、

「ホントだ。」

と俊の反応。今度は僕が双眼鏡を覗き込んだ。そこにいたのは、全員僕らの同級生で、ちゃんと4人いた。名前を挙げていくと、三神みかみ藍里あいりと、伊鯨瞬いけいしゅんと、伊芸良いげいりょう、そして見た感じがリーダーっていう感じの人がいた。

「誰だ、アレ？」

明彦が双眼鏡をのぞいて聞いてきた。が、誰も答えられなかった。どうやらみんなはじめて見るらしい。

「実際あってみないとわかんないし、行ってみようぜ。」

とりあえず、僕は指揮をとった。僕たち4人は戦場に向かう兵士のように黙って目的地に向かっていった。

## 北斗VS南斗〱戦の前の開会式（前書き）

約一ヶ月ぶり！！

んなワケでいっぱい書いてみるんで頑張ります。



## 北斗VS南斗の戦いの前の開会式

「待たせたな」

僕らは余裕ありげな表情で遅刻してきた。

「待たせやがつて！30分近く待つてたぞ。」

相手全員が勢いよく飛び出してきた。僕の気分としては、『小次郎、敗れたり！』と、いいたい気分だが、状況が状況だから言えるはずがなかった。よくあんなこと言えたな、武蔵。

「ところで、そいつは誰？」

孝之が、南斗軍団の中で唯一見かけない女子を指差して聞いた。

「この人？この軍団のリーダーをして……」

「はあ、恋がしたいな……」

良が話してる途中でリーダーはため息をつく、小声でそう言った。ていうか、何いつてんだこいつ？

僕らは今の発言を聞かなかったことにして、話を進めた。

「ことせ あいこ琴瀬愛子だ。ちよつと変わってるけど、うちのリーダーだ。」

ここから小声。本人に聞こえない程度の。

（ちなみに彼女、自らを『恋愛ジャンキー』と読んでるんだ。）

明彦は『What?』というような表情をしていた。僕らもそれをじっくり聞いていた。

（それって意味は？）

（・・・さあ）

「何こそそしてるの？」

愛子が突然話に割り込んできた。これには皆ビビッたらしく仲には、ウワツ！と声を上げる奴もいた。不思議なことにびっくりしたら、話の本題を思い出した。

「そういえば、俺たちをどう『処型』するつもりだ？」

僕がそういうと、和んでいた空気がいきなり冷たくなったのがよくわかった。言わなきゃよかったな。

そう思った時だった。

「ああ、そう言えばそうだな。」

軽。つーか、忘れてたのかよ。これにはさすがに皆驚いていた。

「心配するな。こっちが一方的に処刑してもつまらない。そこでだ。お互い勝負をする方が面白いだろ？」

内容的には納得できるのだが、僕らは一方的にいじめられるわけはないのだが、まあ、いいか。これはこれで好都合になったし。そんなことを思ってたたら、話は瞬から愛子へと変わっていた。

「どう勝負するかというと、これを使うの。」

愛子がポケットから出したものはただの赤い風船だった。中に水が入っている、ということ以外は。

「水風船？」

俊は拍子抜けだったらしく、ばかばかしそうに尋ねた。だが、愛子にとつては待つていたような質問だった。

「いえ、ただの水風船じゃないんだよね。これが。」

そういうと、愛子は近くにある大きな木に目掛けて水風船を投げつけた。水風船が当たると、風船は破裂した。そして中からは黄色い水が弾けたのが分かった。

「南斗特製の『絵具水風船』、これを投げ合って最後に生き残った方が勝ち。どう？」

何事もなかったかのような笑顔で僕らに聞いてきた。当然僕らは、

「ふざけんな！服が汚くなるだろ！」

とかいろいろクレームをつけると、あちら側も、

「そうだよ！つーかこれ、処刑じゃなくて、もはやゲームじゃん！あと、南斗特製って、俺らしらねーよ。それ明らか『愛子特製』じゃねーか！」

よく分からないが、内紛が始まっていた。なぜかは知らないけど、こいつらにかなり同情してるな、僕は。

「さあ、とりあえず始めるよ。異存はある？」

愛子が無理矢理言つと、横から藍里が何か耳打ちしていた。何かい

やな予感・・・愛子が何かうなずくと、今聞いたことを僕らに告げた。

「・・・p 体育館はここじゃありませんね・・・」

目前にある古びた施設を指差していった。まあ、僕はこの体育館に言ったことないから知らなかったけど。僕はめんどくさくなって、

「もうここでもやる。それが一番だ。」

「それもそうね。」

即答？考える気ゼロかよ。

「じゃ、ここですますか」

そんな感じで『開会式』は終了した。

## 北斗VS南斗〜ゲーム開始（前書き）

ていうかきづいたら20話だよ。  
多分すごいよね？

・・・ま、どうでもいいか。

## 北斗VS南斗ゲーム開始

「質問だけど」

「はい、なんでしょう。」

始めようとしたその瞬間に孝之が手を上げた。高ぶっていたやる気が下がっていった。後で敵より早く殺してやる。

「なんだよ、もう問題はないだろ。」

少し苛立った声で瞬が話を進めようとしたが、孝之は無視をしてこう聞いた。

「おれ達の水風船は？」

あ。確かに。冷静に考えてみたら、水風船を持っているのは愛子1人だった。前言撤回だな。

「あ、配るの忘れてた。」

配る？どういうこと？

「全員分作ってあるんだ。1人5個までもってね。」

持っていた袋から大量の絵具水風船が入っていた。スッゴイ用意周到だな。この人・・・

「じゃ、5分ごとに1人ずつ入って全員が入って10分後にゲームスタート、てことで」

「よしわかった。ということは1時だな。」

そう言くと、最初に入ったのは明彦だった。そして5分ごとに俊、僕、孝之と全員が入っていた。入り口に入り少しまっすぐ進むと、明彦たちが待っていた。多分、まず全員集合、ということか。

「何か策でもあるのか。」

「ああ、こいつ等にあたりを探検させて、いろんなものが見つかった。例えば・・・」

「まどろっこしい事は置いといて、早くお前の策を聞かせてくれよ。」

そう聞かれると、明彦は不敵に少し笑ったのが分かった。明彦がこ

ういう笑い方をすると、本当に凄い事を考えている証拠だ。

「いいか。一度しか言わないぞ。」

僕は顔を近づけて、静かに策を聞いていた。

「なるほど。確かにすごいな、これは」

「明彦すげーな。」

「ふ、やるじゃねーか。」

これほど絶賛される作戦は初めてだった。実行するにしてもタイミングをはずせば終わりだと思ってしまうと思う。けど・・

「これ序盤じゃできないのか？」

僕がそう聞くと、明彦は冷静に答えた。

「確実に成功するには、人数の少ない時、大体1、2人にしたほうがいい。やるなら中盤だ。」

なるほど。実に適切な返答だ。普段からこういう奴だったら、非の打ち所がない男なのだが。

「実行時間はどうする。」

今度は俊が質問した。確かにこれも重要だな。

「ゲームが始まって30分後、1時30分に実行に移せ、OK？」

「ラジャー。」

一応この施設の面積的に考えてみると、30分後にはたしかに1、2人はたおしてそんな時間だった。ホント、意外に賢いんだよな。「悟られないように、あの部屋だけは行くなよ。わかったか？」

「OK」

僕らにもう質問もないし、問題もなかった。

「みんな、死ぬなよ。」

そして、僕は四方に散っていった。

午後1時 ゲームスタート

解散して10分後、1時10分

「案外会わないもんだな。」

俺はそう言いながら、あたりを見渡しながらちゃんと注意していた。はつきり言うと、俺がついさっき考えた作戦に不安していた。なぜなら、作戦を実行に移す前にこの軍団が全滅ということもありえるかもしれないし時間になったとしても相手が誰もたおされてない状況だったらなおさら都合が悪い。ましては、相手も人間だ。相手もそれなりの策を持ってこっちに来るかもしれない。いや、必ず持ってくる。その策がこちらの策を上回っているとしたら……ガタン

考え事をしながら歩いた俺はかなり驚いた。といつても、敵襲に遭うよりましか……。今は空耳だと思おうようにしようと思ったがそれが目の前のロッカーから出ているから、そう思いうが全くなかった。俺は、自分の放つ音や声を全て消してあのロッカーへ恐る恐る近づいていった。

これは罠かもしれない。

そう思っただけを止めようとしたが、どうせなら刺し違えてやる。と覚悟を決めると、自然に足を動かした。それに、俺が殺られても、アイツらならやってくれるだろうというような奇妙な安心感があった。すでにロッカーの目の前に俺は立っていた。俺はどうでもいいことを考えるのをやめて、ロッカーの戸に手を置いた。

北斗VS南斗〜明彦VS藍里（前書き）

いっぱい書くって言ったのに2話で終了。  
すげーふがないや・・・



## 北斗VS南斗VS明彦VS藍里

こはしがわ あきひこ  
小橋川明彦いわゆる一般人に近くルックスは軍団の中で1番。しかし、それに比例して頭が弱いという欠点がある。バカではあるが、状況によつてはとんでもない賢さを発揮する。本人は学校1のモテ男といつてゐるが、本当に縁がないのが哀れ。

俺はロッカーの戸に手をかけると、勢いよく開けた。

「ん？」

中には人影のようなものなどなく、はいつていたほうきが倒れてきた。てことはだ。さっきの音は、このほうきが倒れて出たということか。

「まったく、脅かしやがつて。」

この瞬間に掻いてしまった大量の汗をポケットに入っていたハンカチで拭いた。そして同時に思った。このロッカーの音はだいぶ大きかった。こうして俺が来たつてことは、だ。俺はすぐさまあたりを見渡した。上を見渡した時だった。上の階から、あの小さい女、名前は確か藍里だっけ……。そんなことを思っていたら、藍里は無言で風船を落としてきた。

「うお！」

俺は全力で前へ飛び込んだ。そして風船はそのまま、床に落ちて紫の水がバシャッと爆発した。

「あの野郎……」

奴を倒すという気持ちで前に出て、俺は少し離れた階段へ走っていた。その間にも爆弾は上から降ってきていた。藍里が3つ目の爆弾（逃げながら弾数を数えていた）を投下して、4つ目を投げようと顔を出した瞬間、俺はようやく1つ目を投げた。

「わっ！」

もう少して当たりそうだったのだが、とっさに藍里は顔を下げてし

まっていた。はっきり言うと今のは別に当たらなくても良かった。今のは、階段を昇るための時間稼ぎのためだけに投げたのだ。俺の思惑どうりだった。あの1発で藍里は中々顔をだそうとはしなかった。俺はこの好きに階段を昇っていった。もちろん、身をかがめながら。俺は顔を少し上げて、チラツと藍里の様子をうかがった。藍里は下の方、階段近くを何かを探しているようにあちこち見ていた。どうやら隠れていることに気付いていないらしい。

「ふう・・・これでよし。」

一応安全を確保して俺は一安心した。俺はゆっくり息を整えながら、階段を音一つ立てないよう注意して昇っていった。そして藍里のいる階にたどり着いた。階段を昇ると、前、右、左と通路あった。左の通路には藍里がいる。前はトイレとその向かいに部屋が1つ、でロッカー、右は・・・暗くて分からなかった。

（さて、どうするか）

ここにきてまた作戦を考えることになるとは・・・

「・・・うし、かんがえた。目に物見せてやるぜ。」

いったい何処に行ったのだろう。

この絵具水風船を投げようとしたら、相手がもう投げていたから避けて、体勢を整えてから探してみると下には誰もいなかった。逃げたのかとも思ったが分からないし、階段のほうも見たが人がいるという感じはしなかった。

「・・・やだな・・・怖い」

私はこれに乗り気はなかったけど愛子さんが楽しくやろうといったからやってみた。なのに、場所を間違えた挙句、こんな事するなんて・・・

ガタン　　ガタン

ビクツとした。今度は何なの？さっきの人の仕業だとしたら・・・けど、何処に行ったのか分からない。てことは、そのまま逃げたのでは？そう思いながら私は先の見えない通路へゆっくり歩き出した。

先に行ってみると、いける道は真つ暗な前の道と、右の階段、左のいたって普通の通路があつた。ロッカーは左にあることを確かめた。私は周りに気を配りながら、ロッカーへと近づいていった。恐る恐る戸に手をかけゆっくり開けてみた。中を覗いてみると、何も無い空っぽだつた。

「え？」

私は冷静に考えてみた。じゃ、さっきの音はいつたい……

フニャアオ

私はまたビクツとした。振り返ると猫が後ろの男子トイレから忙しそうに走っていった。そして猫は向かいの部屋に入っていた。私はこの状況を猫は何かを見てトイレから逃げた、と確信をもち、トイレへと入っていった。トイレに入って最初に調べたものは、個室みんなが言う便器の部屋を調べようとした時だつた。最初のドアに鍵がかかつていた。

「……なるほど」

つまりここに隠れているわけね。中学3年にもなつてトイレってむしろすごいと思った。ドアをよじ登り中にいる男を倒そうと風船を投げようとした瞬間、中を覗くと誰もいなかった。

「へ？」

私が驚いていると、後ろから、

ビシャッ

と、背中に風船が炸裂したのが分かつた。びしょ濡れになつた背中よりもなぜか飛んできた風船に驚いた私は振り返ると、あの北斗軍団のリーダー、明彦がそこにいた。驚きのあまりに何もいえなかつた私に彼は指を刺しながら意味のよく分からないことを言い出した。「何が起こつたかよく分かつてないらしいな。なら説明してやるよ。次の話でな。」

## 北斗VS南斗〜リーダーと真剣勝負（前書き）

あくまで、リーダーと真剣勝負する、という意味ではない。

## 北斗VS南斗リーダーと真剣勝負

つまり、こういうこと。

藍里が下を見て俺を探している隙に、足音を殺してまっすぐ進んだ。さすがの俺もかなりの緊張感があったサ。で、落ち着いた後で俺はロッカーを叩いた。こういう緊迫した状況の中で、突然、近くで大きな物音がすれば一応見に行くだろう。先程のロッカーの音で近づいた俺みたいに。そして、近くのトイレに入って、便器の部屋にこもろうとした。けど、ここで想定外の展開が起こった。それは、『部屋』の入ろうと戸を開けた瞬間、

フニャー

と、慌てたように『部屋』から出て行った。声が出そうになるのを両手で押さえた。最初、確実にトイレにいたことがばれたから、やばい！と思ったが、ここで、あの策が浮かんた。ここで倒してしまおう。

ということで、俺は『部屋』に入り戸の鍵を閉めた。そして、この部屋をよじ登って隣の部屋へ移動した。つまり、藍里がかぎのしまった部屋にひっかかり驚いてる隙にビシャツツといく。単純に見えるがこういう状況だから引つかかる策なんだ。

「と、いうことさ。」

我ながら話が長すぎてだんだん何言っているのか分からなくなってきたが、うまくまとめきれていたらしい。藍里が残念そうに、

「……まいったな……」

と小声で言ったのが聞こえた。とりあえず俺は、

「とりあえず、お前は負けだし最初に会った入り口に戻れ。」

それでも俺は紳士を目指しているから、それらしい口調で言った。しかし、意外なことに、

「……怖いから一緒に行こう。」

という藍里のほんの少しだけ怯えている表情で、そう言ってきた。  
言われてみたらこの場所は平均的に暗いから怖いのも無理ないかも  
「・・・おう」

むしろこちらの方が紳士っぽいな。ていうか、女子と歩くって全然  
なかったな。そういえば。そんなことを考えながら、トイレを出た  
瞬間、

「いんです。愛子さん！」

そう言いながら、後ろから藍里に突き飛ばされたのが分かった。突  
然すぎて理解できないまま、周りを見渡した瞬間、赤い球形が俺の  
顔にめがけて飛んできたのが確認できた。映画で言うなら、なにか  
のキャラが死ぬ寸前によく使いそうな言葉を最後に言い放ったこと  
を鮮明に覚えている。

「・・・ノー・・・ノー・・・」

ビシャツ あわびゅ

「ん？」

今、明彦の変な声が聞こえた気がような・・・なわけないか。

「それにしても、あいつら、大丈夫かな。」

自分のことを心配したいところだけど、実際、あいつらのほうが心  
配だ。まあ、甲斐はぜんぜん大丈夫で、明彦は微妙だけど、何とか  
なるだろうと思うが、問題は孝之だ。あいつ、見事に運がないし。  
ま、オレも猫つて言われている時点で、心配されてるんだろうな。  
・・・ん？

だれがネコだと？

そんな風に一人でキレていたら、

「よう、俊」

近くの扉が開くと中から伊鯨瞬いげいしゅんが出てきた。

「今日こそ、決着をつけようじゃないか。」

「・・・なんの？」

実際心当たりがない。瞬が急に言ったことだ。本当のことを言ったのに、

「とぼけるなよ。どっちが最強の『シュン』か、白黒つけようじゃないか」

何のことかさっぱり分からんが、売られたケンカは買っしかないのがオレのポリシーだ。とにかくやるしかなさそうだ。

「いくぞ。」

声が重なったと思ったら、オレらは、同じタイミングで風船を投げた。

ビシャッ

水風船の炸裂した音が響いた。

北斗VS南斗く合流と不運の男（前書き）

まだ久々！

いっぱいよんでっぺんぞ。



## 北斗VS南斗く合流と不運の男

瞬が投げ込んできた風船はオレの頬をかすめて、遠くの後方で炸裂したのが分かった。確かに俺も投げたが、当たったかどうかは分からなかった。

「チッツー!!」

舌打ちをしながら、少し離れた所にあるテーブルに飛び込んだ。

「ふー」

ひとまず瞬の風船はこれで当たらないだろうけど、問題は当たったかどうかだ。当たったとすれば、何かしらの反応があるはずだが今はそれが無い。それに隠れているではあるが、こっちからヘタに向こうを見れないのだ。ここに隠れた所でこっちに来られてはアウトだし、うかつに顔を出してもアウトだ。つまり、絶体絶命、という状況である。

（どうする？どうするべきだ？）

そんな風に迷っている時である。

「グウアアーーーーー!!」

瞬の叫び声が響いた。驚いたオレはおそろおそろ顔を出してみると、黄色い水で顔がびしょぬれになり、もがいている瞬の姿があった。ひとつ気になるのは、この瞬の後方にすでに爆発している風船があることである。オレが瞬に投げたはずの風船だった。

「いったい、何が・・・」

困惑している時だった。後ろから不意に肩をトントンと叩かれた。

「うわああーーーーー!!」

「・・・なんだ、甲斐かよ・・・」

まさかそんなに驚くとは思わなかった僕のほうに驚いた。まあ、ひとまず

「大丈夫か？」

と話しかけてみたが、ネコ俊はまだ激しく呼吸をしていた。その状態で俊が

「つーかよ、何故ここに？」

と聞いてきた。僕は当然のように

「助けにきちやまずかったか？ま、なんにせよ瞬があんな大声で叫んでりや、場所なんてバレバレだろ。」

と答えた。が、実際は、近くを通っていたら、瞬の声がして慌てて隠れ、会話が終わって風船を投げた後、俊のところに行こうとした所を、狙い撃ち。それが偶然顔だった。それが真実だけど、それは言わないで置いた。そのかわりに

「今何時だ？」

僕は冷静になった俊に聞いた。俊は時計を見ながら、

「12時22分」

とまた少しあせったように言った。時間を行った後、俊が困った顔でこつちを見ていた。僕は気持ちを落ち着けるために、ひとまず合流したことだし、少し急ごうか」

一人ではないことと、時間にゆとりがあることを強調させながら言った。ひとまず、仲間一人を見つけ『アナウンスルーム』へと向かった。

「いて！！」

おれはまたしても、そこらのガレキにつまづいてしまった。これで7回目だから、もう飽きていた。

「くそう・・・なんでこうなるんだよ・・・」

いろんな意味で泣きたくなったが、とにかく我慢するしかなかった。唯一幸運なのは、敵といまだ遭遇していないという所だけだ。いつでも、味方にもあつてないけど。

「おーい！！誰がいるかー！！！！」

無性に寂しくなったおれは、誰かに会いたいがために叫んだ。かえってきたのは静寂だけだった。

「ま・・そんなすぐには出ないか・・・」

また悲しくなつて歩き出そうとした瞬間だった。足元に風船が爆発したのが分かった。

「だれだ!？」

おれは風船が飛んできた横の方を見て言うと、良が口笛を軽く吹いていた。よりによつて、あいてはナンバー1・2レベルのヤツだなんて、ホント、おれはツイテナイナァ・・・。おれはこのゲームをして初めてため息をついた。どうにでもなつたおれは、手に持っている風船を、良に目掛けてブン投げた。けど、いつのまにか投げていた良の風船とぶつかつて、かなりの量と緑と青の水が目の前で同時に弾けた。

「はぁ? やつぱツイテナエー」

そう言つた瞬間だった。はじけた水で相手が見えなかった。それだけで、おれはこう推理した。

ヤツもみえてないはず!

おれは覚悟を決めて、残りの水風船をすべて投げた。そして、投げた直後に気付いた。良はもう一つ風船を投げていて、それがおれの急所に弾丸ライナーの如くとんできたのを。おれの投げた風船は確かに良のシャツのむねの部分に当たつた。そしておれは、

「うおおおおあああああああああ!!!!!!」

大切な何かを失つた。

北斗 残り2人

南斗 残り1人

残り3名

北斗VS南斗く想定外と裏切り（前書き）

一挙三話だ！！

## 北斗VS南斗く想定外と裏切り

明彦の考えた作戦はこうだ。

明彦の話によると、この施設のアナウンスルームは、まだ使えることが判明したらしい。このアナウンスを使つて、『罨なんかない。話をしたいから中央の大広間に来てくれ。』なんてことをいいながら、南斗がそろつた所を一網打尽にたおす!!!

てな感じである。ベタっぱいと思われがちだが、あのアナウンスルームがまだ使えることは僕らも以外だったし、明彦もビックリだったという。なんせ、適当に動かしていたら、動いてしまったという奇跡だったらしい。

「本当に通用するのか？」

俊が不安げに話し掛けてきた。正直、僕も不安だった。

「わからない。けど、とにかくやるしかないでしょう。」

そう言うしかなかった。今僕が言った通り、ただやるしかなかった。

「今何時だ？」

「12時28分」

気が付いたら時間がだいぶたつていたことに驚いたが、今はそんな暇は無かった。できるだけ早く、アナウンスルームに行くのが先決だった。はつきり言う道筋に関しては、僕はほとんど覚えてなかった。そのため、いま何処を走っているのか分からなくなってきた。

「おい！まだなんか？」

自分でもあせつてきていることが自覚できた。僕がそう言うのと、

「あつたぞ。」

俊が足を止めると、前にはエレベーターの扉があつた。

「……エレベーター……だよな？」

「その隣」

僕は落ち着いて隣のドアを見てみた。確かにかすれた文字で『アナ  
ウンスルーム』とかかれていた。僕は安心してふう、と息を吐いた。  
「よし、入るとするか。」

僕はドアを開けて、部屋に入ると、想像してなかった光景が広がっ  
ていた。アナウンスの機械という機械に水風船が炸裂していた。

「・・・あのやろう」

誰の仕業なのか、僕は容易に想像できた。愛子、もしくは良以外に  
いないことが確信した。少し感心していたら、

「どうすんだよ、作戦は？」

「ていうかだ。」

僕はさつきから感じていた違和感があった。それは、

「もうすぐ30分だというのになぜあの2人がこないんだ？」

自分で言ってて気付いた。多分2人は・・・

「やられちゃった？」

どうやら、俊はすぐ気づいたらしい。僕は無理に話を切り替えた。

「それよりだ。新しい作戦はどうする？」

僕も俊もこれに頭を悩ませた。このとき、時計は32分だった。

「！ よし。」

僕は新しい作戦をひらめいた。小々強引だけど・・・

「俊、ちよつと大広間にきてくれ。」

何も知らない俊は、ただ僕の指示通りに動くしかなかった。

「で、何する気？」

僕はポケットに手をつ突っ込んで、水風船を一つ取り出した。そして、  
薄笑いを浮かべながら、

「我が胸の中に生きよ・・・」

とわざと聞こえるくらい言った。

「ヘッ？」

このときの俊はいやな予感がしたに違いない。だとしたら、それは  
大正解である。

「あばよ!!」

僕は俊に目掛けて、渾身のストレートを放った。

「ギャ

!!!!」

ビシャッ

北斗 残り1人

南斗 残り1人 残り2人

## 北斗VS南斗〜ゲームセット（前書き）

3話目。

今日はこれで勘弁してやる。



## 北斗VS南斗ゲームセット

俊は断末魔をあげ、地面に倒れ付した。

「これでよし、と。」

僕はそう言つて、2階にあったアナウンスルームへ、戻つていった。

同時刻、

「ん？」

いま、確かに誰かの悲鳴が聞こえた。よくは聞こえなかったけど、男の声だった。少なくとも良や瞬の声でないのは間違いない。とすると、答えは一つ。

「だれかいるな・・・」

知らない声の悲鳴だから、たおされたのは、北斗の人間。だから、味方がいておかしくない。

「・・・方向的に大広間かぁ・・・」

私は誰が倒され、誰がそこにいるか、気になって大広間に向かった。

大広間、

「あれは・・・」

ついた瞬間、私が見た光景は倒れているのは確かに北斗のやつだったが、肝心の味方の姿が無かった。

「ひょっとして、逃げたな。」

といつても、そんなに時間はたつてないから、まだ近くにいるはずである。念のため、あたりに注意しながら、仲間の名前を呼んでみた。

「りょう。しゅーん。」

だけど、何の返事も返ってこなかった。私はもう一度呼びかけを試みたが、なんの音沙汰も返ってこなかった。なんの返事も返ってこ

ないから、少し怒って、

「良！瞬！」

と呼んでみた。それでもなにも返ってこなかった。

「どうなってるの？」

私は少し困惑してきた。瞬も良もかなりの実力者のはず。実際の、あの倒れた北斗の人だったとおしているじゃない。なのになんで姿を・  
・・・

「は！」

自分で思ってた気がついた。すでに2人は・・・しかし、もつと謎なのは、この北斗の人を良か瞬が倒したとして、誰が2人を・  
・・ここまで考えていた時だった。

ビシャッ！

私の頭に水風船が爆発したのが分かった。わかっているのだが、理解ができなかった。私はまず上を向いた。そこには、北斗軍団の中で特に目立つ甲斐の姿があった。私はもうなにもかもがわからなくなっていた。

「どうやら、俺達の勝ちだな。」

僕は2階から階段を降りながら、勝ち誇ったように言った。そう言いながら愛子の表情を伺ってみたが、頭がついていけない様子だった。

「いろいろ、理解できてないみたいだが、何か聞きたいことは？」

分からすには、相手が理解できてないことをこっちでさせる、僕のポリシーだ。

「・・・良と瞬は？」

最初にギリギリで分かるような範囲の質問を愛子はしてきた。

「それは知らない。一応、誰かに倒されたらしいぞ。」

これは、僕も本当にわからなかった。適当ことを言ってるだけだ。

「もうないか？無いならゲームセツ・・・」

「アレは何？」

倒れている俊を指差して聞いてきた。表情を見た限り、これが一番分かってないらしい。普通は分からないけど。

「ああ、アレ？俺が直々に投げた。」

「な、なんで？」

愛子のもつと理解できない、と言いたそうな顔で聞いてきた。「僕が自身満々にそう言ったのが余計に不思議になったらしい。

「じゃあ、お前はなぜここにきた？」

そこまで言っと、愛子は何かに気付いたような、全て理解できたように、ハッ、とした。

「・・・すべて・・・罨、てことね。」

「そゆこと。」

全てを理解した愛子の膝が落ちた。それを見た僕は少しむかついた。なぜなら、

「こつちだつて聞きたいことはあるよ。」

愛子が顔を上げると、悔しそうな目でにらまれた。少しひるみそうになったが、僕はこらえて、

「アナウンスルームのアレ、誰がやった？」

僕はこれ一つが理解できなかった。一応、僕もスッキリしたいし。

「あれはね。団長の明彦が中に入ったときなにかいろいろさわっていたの、窓から見えたんだ。」

僕はあの部屋の中を慎重に思い出してみた。全然見てなかったけど、確かに窓があつた記憶があつた。

「ああ、あれね。」

「様子が見えてね、念のため使えなくさせてやろうと、みんなが来る前に私がやったの。」

つまり、丸見えだったわけだ。松田の・・・いや、明彦のバカ。

「・・・お互い一本とられたわけか。」

「ふふ、そうみたいね。」

お互い、スッキリしすぎて、ふふふ、ははは、果てには

アアー                   ハッハッハッハ・・・

という風に大声で笑っていた。なんだかんだでこのゲーム、結構面白かったし。

「ゲームセツトだ。いこうぜ。」

「うん！」

僕らは満足のうちに、この『処型』ゲームは幕を引いた。

北斗   残り1人           優勝   北斗軍団

## 北斗VS南斗〜ゲームセット（後書き）

1日ですきに3話って指がつかなくなるね。  
しかも、久しぶりだし。

## 北斗VS南斗〜閉会式

「おい、離せよコラ」

ゲームも終わり最初に集まった前庭戻って来た僕と、今腕に抱きついている楽しそうな愛子を見て、一同は愕然としていた。

「何があつたの？パパに話してゴラン。」

明彦は冷静に言つたつもりだろうけど、『ゴラン』の方で確実に声が裏返つていた。それに目が思いつき開いていた。

「いや、作戦勝ちしたから、『そこに惚れたー』なんて意味不明な発言されて、困ってるんだよ。」

南斗の人は、他の奴もかなり納得していたのだが、明彦だけがそばで「くそー、クヤシー！」なんて言いながら一人暴れていた。

「さ、気をとり直して閉会式しましょ。」

愛子は、テレビキャスターのようなテンションの高さで、突然言い出した。何故かは知らないけど、今の発言でなんの反論もなく、チームごとに並んだ。

「では、結果発表！」

いきなりかよ、と思ひもしたが、結果はもう知ってるから、非常に清々しかった。

「勝者は、北斗チーム！」

言われてすぐさま僕達は祭りのように騒ぎだしたが、南斗の人たちはなんの盛り上がりもなく、ただ、冷たい視線を僕らに送り続けた。

「はい、終わり」

「ちよつと待たんかー！」

勝手に終ろうとした愛子の進行に、全員が慌てて止めに入った。

「え？なんか変だった？」

「いくらなんでも終るの速いだろ！何でもいいからそれらしいことして終ろう。」

僕らはちゃんとしめくくるためにそういうと、愛子は、ま、いつか、的な切り返して司会を続行した。

「じゃ、勝者のリーダー、なにか一言下さい。」

愛子はそう言ってマイクを渡す（手振りをする）と、

「マヌケかあ、キサマらわ」

はつきり言って僕らも見てて素直に喜べないコメントを残してリーダーは僕達のもとに帰って来た。あちらの方々は今にもマヂ切れする雰囲気だったのだが、

「まあ、楽しかったんじゃないの？」

僕は、内心祈りながら平然に言った。少し静まりかえって、

「ま、確かに面白かったな。」

涼が言ってちよつとすると、みんななにかを思い出したように笑いだした。まるで、なにかとんでもないイタズラしたあとみたいな、そんな空気だった。

「じゃ、ちょうどいい感じになったし、終了しますか！」

愛子の言うとうり、周りはとてもいい感じになっていた。僕達は満足のうちに長い永い『ゲーム』に幕をとじた。しかし、

「あれ？なにか忘れてるような・・・」

僕は重要なものを忘れたような気がしてならなかった。

「オレはいつまでこうすんだ？つか、誰か来いよ」

ついさつき甲斐の野郎が裏切って、ムカムカしてたら寝ていたけど、気がついたら誰もいなくなっていた。

「オノレ、作者め！」

やや意味のある発言をして、もう一つのエンディングに幕を下ろした。

## 北斗VS南斗〜閉会式（後書き）

ただでさえ、書くのが遅いくせに休業するのを

許してくれ〜〜〜〜〜



**運動会大作戦〜前哨戦（前書き）**

約3ヶ月ぶりの投稿。

どうか温かい目で見てください。それから一言。

1周年だー！（とっくに）

## 運動会大作戦〜前哨戦

今月は7月。

この沖縄での7月はかなり暑い。水を飲んでも飲んだ気がしないよ  
うな、やってられないほどの暑さだ。個人的には、ウルトラソウル  
と叫びたくなるほど、やってられない。

それに加え、来月は運動会。

1ヶ月も練習するのだ。なおさら叫びたくなってくる。

「死・・・死ぬ・・・」

孝之が僕の隣でばやいていた。こっちだって、のどかわきまくって  
くたばりそうだというのに・・・

「これ以上・・・喋るんじゃない・・・」

ちよつとした体力すら今は惜しくて仕方なかった。なにせ、今練習  
しているのは沖縄特有の太鼓を持って踊る伝統芸能『エイサー』で  
ある。詳しく知りたい方は、辞書を引いてください。とりあえず、  
踊りに集中したかったのに暑くて暑くて仕方なかった。放課後なの  
になんなんだ、この暑さは。

「はい。じゃあ今日はこれで終わるよ。」

先生の声が体育館に響いた。汗がダクダクな僕らは、この声がどれ  
ほどありがたかったか。時計は7時を回っていた。

「ブッハーー!!」

明彦は烏龍茶を一気に飲み干した。

「いやー、いつ死んでもおかしくなかったな。おれたち。」

終わった今だからこそ笑って言える話題だが、練習をしていた僕ら  
にはほとんど冗談に聴こえなかった。むしろ、大きく共感した。そ  
れぞれが自販機からジュースを買ってガブガブ飲みながら帰宅して  
いた。

「練習して1週間なのに、意外に慣れないもんだな。暑さって」

僕が感心したように言うと、みんなが口々に文句を言った。

「慣れてたまるかだろ。普通。」

「毎日110円使うことになるんだぜ。」

なるほど。俊の言うとおり、毎日お金を使うのは、非常にもったいないな。そう思った僕は、ある案を思いついた。

「寝るときはヒーターをつけよう。これで暑さなんかヘツチャラだ。」

「うん。われながら名案だ。」

「絶対アホだろ？それはありえないって」

そう言ったのは明彦だった。

「まず、そうしようとするヤツがありえない。暑さで頭にキタのか？」

「何を言う。まだキとらんわ。」

「じゃあ、1日やってみるよ。それで暑さに強くなっていたら、おれたちもやろう。」

なぜ勝負するような雰囲気になったのだろう。意味がわからなくなってきた。

「じょーとーだ」

僕は一目散に家に帰っていった。

「ふふふ、とくと見るがいい」

僕は布団に入る前に、ヒーターのリモコンのスイッチを押した。

ピッ

途端に部屋の気温が高くなった気がした。少し危機感が出てきた。

（恐れるな甲斐。お前に怖いものはない。）

僕は自分にそう言い聞かせながら、布団をかぶって眠りについた。

「甲斐のヤツ、遅くないか？」

遅刻の時間を10分近く過ぎているのに、甲斐の姿が見当たらなかった。あいつの場合、間違いなく早く登校して、遅刻はありえない

のに・・・

「じゃ、出席とるぞ。その前に」

担任の出席点呼が始まった。そのときに珍しく何かを言おうとしていた。

「甲斐は熱を出して、お休みだそうだ。」

バカーーーーーー！何の意味があつたんだ！？あの暑さ対策は？

ちなみに、これからの物語は運動会を大成功させようと必死な中学生の姿を描いた話である。

## 運動会大作戦く対抗リレー

あれから数日。

「いやー、あれはやっちゃいかんパターンだな」

僕の体調はすっかり回復していた。今思うとほんとにアホみたいだ。  
「気をつけるよ。8月のはじめくらいに運動会があるというのに無駄に休んだらシャレにならないだろ。」

「俺は冗談でやってないよ。」

明彦は諦めたようにため息をついた。

「まあとりあえずだ。来月の運動会を大成功させるためにおれたちは頑張らなければならんだ。休むのは控えよう。」

珍しい明彦の真剣な姿に、僕たちは思わず力強く頷いてしまった。

3校時の体育、

「ネコーー！！ノロいんだよ、このボキヤーー」

「誰がネコ王子だゴルアアアー！！」

僕たちは100mリレーをしていた。一応本番に向けての練習ということなのだが、

僕たち生徒にとっては『死合い』なのだ。

「受け取れえボンクラア！！」

「任せろオ、バイキ マン」

僕は俊からバトンを受け取って走り出した。僕はそれほど足が速いほうではないから余裕をかますことなど、不可能だった。ただ、受け取ったバトンを一刻も早く次に渡そうと必死になっているだけだった。周りはその姿を見て笑う人もいたが、今の僕にはそれがとても許せなかった。

バカにすんじゃないねえ

自分では気づかなかったが、このとき僕は、限界以上に加速していた。みるみる次走る僕のクラスの走者が近づいてきた。

「・・・とは・ろしく・・・」

つかれきった僕は、はつきりと喋ることができなかった。が、伝わったのだろう。バトンを受け取った走者は、受け取ると振り返らずに、そのまま走り去っていった。座ると二度と立てなくなりそうない気がした僕は、そのまま立って呼吸をしていた。今の状況は1位だった。けど僕はこう呟いた。

（またビリだろうな）

1位をキープしたままで、走者は孝之にまわってきた。バトンをとって走ろうとしたその瞬間だった。孝之は自分の足に足を引っ掛け、縦に二回転して転倒した。見ていてとても派手な姿はさすが不運の持ち主。普通に転ばないところが見事だった。この間に一人に追い抜かれ2位に落ちてしまった。

「何してんだよドリアーン。バカかあ」

周りは孝之に罵声をぶつけた。本人だつてわざとであんな転び方してないというのに。立ち上がった孝之は、落としたバトンを拾い、また走り出した。

**運動会大作戦く対抗リレー（後書き）**

ひとまず後半へ続く

## 運動会大作戦く結末

「孝之、後ろ！」

孝之が振り返ると、本気の形相で走ってくる伊芸良の姿が背後から迫ってきていた。

「急げ！抜かれちゃマズイ」

良は僕達とは違ってもとの運動神経がハンパではない。その上、勝負事になると手加減をしないという鬼つぷりを発揮するのだ。スポーツにおいてまともに相手になりたくない人物だ。

「孝之ー！速く走れ！」

孝之はバトンを拾い、すぐさま走り出した。その時には良は真後ろにいた。トップスピードで駆けていた良は、加速をつけたばかりの孝之を追い抜いた。

「おねがい！」

孝之はすまなさそうに言いながらバトンを渡した。受け取った走者は走り去っていった。

「ドンマイドンマイ」

僕は失態を見せただけでなく、追い抜かれてしまって落ち込んでいる孝之に声をかけた。

「まあ、相手が良なら運がなかっただけさ。こけていなかったら問題はなかったよ。」

「ああ。おれが転びさえしなければ・・・こんなことには・・・」

なぜそんな発想をするのだろう。もう少し前向きに生きて欲しいな。それに、今の僕の発言もなにかおかしかった気もするけど・・・

「おい、アレ見るよ。」

僕は、落ち込んでいる孝之から目を離して明彦の指を指す方向を見してみた。

「あれ？」

後ろに結んだ髪に、結構そろえられている前髪に普通的女子より高



い身長。アレって

「なんでアイツここにいるの？違う学校じゃなかったっけ？」

「さあ。俺も今初めて見て驚いてた。」

たった今走り終えたその女子は、こちらに向かって歩み寄ってきた。

「オス、オラ愛子」

「つーか、いつの間にこの学校に来てんの？」

「詳しい話は後。で、明彦は走ったの？」

「あ、次じゃん。」

明彦は急いでレーンに向かった。なぜ愛子がここにいるのかは分からないが、とりあえず気にしないでおいた。(しかも、いつの間に僕の隣に座ってるし)アンカーの明彦がバトンを受け取った。

「うおおおお！」

声出して走ってる人初めて見た。しかも、一人を追いついて抜いていた。

「おおー！これはいけるぞ」

僕のクラスはとても沸いていた。初の最下位脱出の光が見えてきたのである。現在4位中3位だった。

「行け、このまま行っちゃえー！」

今の明彦は、本物のヒーローのようだった。歓声を背に堂々とフィールドを駆けるその姿はヒーローそのものだった。

しかし、

ゴテッ

ゴロゴロゴロ

見事に明彦も転んでしまっていた。その間に案の定、追いつかれてしまった。

『はあ……』

切ないほどため息が聞こえた。この広い運動場に響いた気がした。

結果            最下位    脱出ならず

**運動会大作戦くフォークダンス（前書き）**

30話突破じゃ〜

多分まだまだ続きそうです

## 運動会大作戦くフォークダンス

「今日はフォークダンスをするぞ」

先生のこの言葉にテンションが上がったやつと下がったやつが、真つ二つになった。

「先生。大体、なんで運動会にフォークダンスなんてするんですか？」

「僕がそう質問をすると、先生は楽しそうに答えた。

「決まってるだろ？中学の三年にとびっきりの思い出を作ろう、ということ、運動会ではこのフォークダンスを取り入れたわけ。わかった？」

「・・・はい」

多分、それは先生の意見なのだろう。

「もう一つ。なんで女子と踊らなきゃいけないんですか？」

俊が嫌そうに質問した。これには先生は即答で答えた。

「じゃお前は男と踊りたいのか？」

「・・・・・・」

俊も、その後ろで踊りたくない意見の男子達も、観念したのかとも静かになった。まあ、男子同士で踊ってもなんの思い出にもなりそうにないし。

「質問がないなら、早速練習するぞ。」

1曲目、

先生曰く、『フォークダンスに欠かせない絶対の名曲』の『青い山脈』だった。一応、毎年の運動会でこの曲が流れるのだが、フォークダンスに向くのかどうかは知らなかった。

「はい、1・2・1・2」

初めてやるという事で、ゆっくりやっているのだがよく分かん。

足の運びだとかタイミングとか、段々何を言っているのか分からなくなってきた。しかも、暑い。

そういう状態の上で女子と手を取って踊る。

少なくともそういうのと縁のない僕は手を取ることすら出来なかった。僕はそれを『女子が苦手だから』と考えず、『自分が未だに純情だから』と、思うようにした。ちなみに、他の軍団たちは、軽がる手を取っていた。

あいつらすげえな

2曲目、

生徒が選ぶ事の出来る自由曲だが、『ポルノグラフィティのジョバイロ』か『スピッツの空も飛べるはず』の二つに分かれたのだが、最終的にスピッツに決まった。ジョバイロが落ちた理由は、『簡単なダンスで満足しなくなつて、レベルが段々上がりそうで怖い』という先生側からの意見だった。ジョバイロに投票していた僕は、ひどく残念な気分だった。

とにかく、躍るのはスピッツの曲だ。

とにかく、この曲自体初めてするから先生方振り付けを全て考えてから本格的な練習をするそうだ。そのため、

この日は、ずっと青い山脈を踊りっぱなしだった。僕はこの日、ただの一度も、女子の手を取ることが出来なかった。本番に間に合うかどうかとても微妙な所だった。

## 運動会大作戦く完成、そして当日

ドン　　ドンドン

気温が非常に高い事から体育館での練習になったのだが、

余計暑い。なにせ室内だし。

まあとにかく、今やっている『エイサー』もいよいよ完成が近くなってきた。気がつけばあと一週間。その頃には運動会はとくに始まっているのだ。普段鈍感と言われる僕にも『もうすぐ運動会』という緊張感がでてきた。ちなみに僕が使っているのは『大太鼓』と呼ばれるもので、名の通り大きな太鼓である。重さは大体・・米の袋一つ分くらいだろう。結構重たいのだ。僕以外の軍団たちは、『小太鼓』で、彼らはそれを使って踊るのだ。小太鼓の場合、それほど重くはないのだが、派手に踊ることが重要であり、大太鼓は身軽に踊れない分、大きく響く音と少しの動作で小太鼓の踊りをよりよく見せるため、どちらも忙しいのだ。僕はそれほどエイサーに詳しくないから、多分こういう感じなのだと思う。

完成し始めているのは、エイサーだけではない。リレーに対しても、クラスが一丸になって協力をするようになった。僕は踊れはするが、手を取れないという、3歩進んで2歩下がるようなことを繰り返していた。我ながら情けない

運動会前日の放課後。

「完璧だ」

先生が素直に言ったこの感想に僕達は大きな歓声を上げた。ついにエイサーも完璧にやり遂げた。僕達は、このとき暑さを忘れ喜びに浸っていた。運動会はまだまだだというのに。

「では、明日に備えて、ゆつくり休んでください。」

全員は満足そうに小さく笑って、体育館を出て行った。

「明日かあ。まじ楽しみだぜ。」

俊は興奮しているのか、口元が震えていた。俊はこうするとわくわくしている、ということを実現しているという。

「確かに。なんか今まで以上に熱くなれた気がしたな。」

「な。あとはリレーでおれがこけなければ完璧なんだけどな。」

「まあ、こけないように頑張れよ孝之。」

「お互い様だろ。明彦」

僕は隣りでその会話を聞いて笑っていると、いつも僕らが世話になっている自販機があった。僕はジュースを買おうとポケットからお金を取ろうとした瞬間だった。

全員が足を止めるはずの自販機を素通りしていった。

もしかして、日ごろの練習で、暑さに慣れてしまったのだろうか。

僕はその姿を見てお金を取るのを止めた。なんだかんだで、僕もそれほど喉は渴いていなかったし。僕は本当に明日の運動会が楽しみになった。愛子もでてきて、面白そうだし。僕達は家に帰って、明日に備えて、自分の部屋で横になった。

そして今日、その日がやってきた。

## 運動会大作戦く完成、そして当日（後書き）

ちなみに筆者が沖縄のある中学校を卒業したので、全てその中学校を元に作っています。

## 最終運動会計画（前書き）

誰か私に時間と自由を下さい！！  
ほぼ毎回言ってると思うけど、執筆遅くてスンマセン。



## 最終運動会計画

「来たぜ、この日が」

運動会当日、明彦がにやついていた。多分待ちきれないだろうと思うのだが、この表情はとても危なく見えた。

「まあ落ち着けて。まだ開会式なんだし。ゆっくり行こうぜ。」  
そう言う孝之の表情も危なかった。現在気温32度。こんな暑苦しい中でまともに校長の話しを聞く人なんて、見た限りでは片手で数えきれそうだった。暑いのをごまかすために僕らは話をしながらどうにか開会式を乗り切っていった。

開会式が終わって、

「さて、どうすっかな」

一応僕達は今年最後の運動会だ。午前ので3年が出る種目は意外と少なかった。あっても一つ二つくらいだろう。

「なあ、俊。どこか遊びに行こうぜ」

僕は偶然通りかかった俊に誘ってみた。俊が答えを返そうとした、まさにその瞬間だった。

「ねえねえ、正午にやる綱引きやる？」

「・・・この声は・・・」

「愛子、わざわざ俺に声をかけてくるのは、一体どういう心境の变化なんだ？」

途中から自分でも何言ってるのかさっぱりだったのだが、今ので伝わったらしい。（隣りで聞いていた俊は、ポカンとしていた。これが伝わってない人の顔だ。）

「だって、まともに話せる人、甲斐しかないもん。」

「お前、自分のチームはどうした!？」

「あ、そっか。忘れてた。」

「おま・・・お前、夕チ悪っ!!」

僕は普段ボケキャラと呼ばれている（なぜか分からない）のだが、こいつの前ではただのツツコミになってしまっていたのに気がついた。なんか疲れるな、この人。

「大体な、綱引きは大人のやるヤツだろ。俺らがどうやって出るんだよ」

「大丈夫。私服持つて来ればいいから。多分ばれないよ。」

自信満々でこたえる愛子。やる気があるのは分かるのだが、相手が悪かった。

「そんなめんどくさいのやってられんよ。甲斐、もう行こう。」

「だな。てなワケでじゃあな」

僕らが振り返り、歩き出した瞬間だった。

「……るよ」

「ん？」

愛子が何かを呟いていた。僕は思わず振り返ってしまった。

「綱引きでそっちが勝利したら……チュ しちやうよ」  
最後のあたりで、愛子は小声になりハムスターのように小さくなっていた。

（くだらな。）

僕が愛子に背を向けた瞬間だった。目の前には明彦が立っていた。

「その綱引き、受けて経とう。」

ものすごい突然の返答だった。ていうか、いつの間にここにいるのは何故？

「はあ!？」

僕と孝之（お前もいつの間に）は納得のいかない声を上げた。

「貴様らは、彼女がいるから大丈夫なんだろうが、オレにとっては最初で最後かもしれんだぞ。一回くらいいいじゃねえかよ。」

明彦の目には、炎が燃えていた。下手に触れたら大火傷しそうなほどの情熱を、まさか明彦から感じるとは……よく見たら、隣にいる俊の目もメラメラしてるし。

「……わかった、まいった。」

僕は、観念して両手を上げた。ということで、僕らはしょうもない理由と漢の意地のかかった綱引きに私服参加する事になった。

## 最終運動会計画く綱引き編（前書き）

あらすじ

唇をかけて、綱引きを始めた。

## 最終運動会計画く綱引き編

正午、普通ならでる必要のない綱引きに僕は参加させられてしまった。原因はもちろんあの一言。

「しかも、ばれてないし。どうなってんだよ、この学校の教師は」僕は私服に着替え、サングラスをかけてまでの変装をしたというのに、だ。誰一人、僕らが生徒であるということに気付いていなかった。

「いつそ、ばれて参加しないのがベストなのになあ・・・」

「さすがにもう遅いと思うよ。前の2人のテンションが異常だから。」

孝之と僕がローテンションな会話をしている中、前では

「K・I・S・S、キッスウアア！」

と、とても異常という言葉では終わらないハイテンションな2人がいた。正直、うるさくてしょうがない。

「恥ずかしいから、黙ろうぜ。」

「ええい。わかつとる。」

じゃ、黙れよ。

そんな会話をしていたら、確認のように綱を男達が引いていた。少し引っ張っていたら今度は女がゆっくり引いていた。人数的には、互角のようだ。

『それでは始めます。よい・・・』

パーン！

開始を告げるピストルがなった。僕はそれとほとんど同時に綱を力強く引っ張った。しかし、簡単に終わらないのは、さすが綱引きだ。少し引いたと思ったら、また引っ張られたりしている。やってみたら、意外と綱引きを楽しんでいた僕らに不幸が降りてきた。

「おわっしやー！」

手を滑らせたのか、孝之は体のバランスを失い後ろに勢いよく吹っ

飛んだ。それが原因で後方にいた大人達も、うっかり手を離して、孝之をかわしてしまった。力の大半を失ったこっこの綱は、あえなく、女のほうに引かれてしまった。

『ただ今の結果、お母さんチームの勝利です。』

そのチームにいる愛子がこっちにピースをしていた。さほどやる気のなかった僕を、そのポーズでやる気を起こさせた。

「フフ、なめるなよ。」

二回戦、　　パーン！

ひとまず僕らは一番後ろのほうで固まっておいた。さらに、孝之を一番後ろにした。これならば、孝之が転んだ所で、被害は孝之一人だし、何より、後ろのほうだから力も出しやすい。僕らはテンポよく綱を本気で引いていた。この作戦が効いたのか、さっきよりも短い時間で結果を出した。

『ただ今の結果、お父さんチームの勝利です。』

アナウンサーの声が白熱していた。僕らも一勝した事によって、勢いもついたし負ける気がしなかった。愛子のほうに目をやると、彼女の表情は動揺していた。『勝利のご褒美』自体に興味はないけど、負けるのが嫌な僕は、皆に声をかけた。

「皆、次勝てば2勝1敗で俺達の勝ちだ！絶対気を抜くなよ！」

「「「オオーーーー！！！！」」」

僕らは次の1勝のために、気合を注入した。

『ではこれで、綱引きを終わります。保護者の皆さん、お疲れ様でした。』

・・・は？

アナウンスの言う通りに、目の前にいたはずの大人達がぞろぞろ戻っていった。

「なんじゃあこりゃー！」

明彦と俊が、ガクッと膝をつけて涙を流していた。僕はこの2人を無駄な時間を過ごした僕達より哀れに見えた。

戦績  
戦利品

1勝1敗  
敗者の涙

引き分け

## 最終運動会計画くTHE対抗リレー

「・・・疲れた。」

無駄に気合を入れすぎて、僕らはもうヘトヘトだった。その中で、まだ元気のあるヤツが一人いた。

「くそ！チューがあ！初めてのチュウがああ！」

なんでそんなに元気なんだ、明彦。ひとまず僕は学年ごとに設置されているテントまで移動した。すると、ある光景を目にした。ちようど、同級生達が学級ごとに色の違う鉢巻を頭につけて、ウォーミングアップをしたりなどの景色が見えた。少しいやな予感がした。「お前ら遅いぞ。対抗リレー次だぞ。」

僕らは言われて初めて思い出した。そう言えば次、3年の対抗リレーだっけ・・・

「どうしよ・・・おれ何番目に走るんだっけなあ」

順番を思い出そうとしている孝之を見て、あることを思い出した。

「なあ、提案があるんだけどいいかな？」

僕が突然言った言葉に一同は食いついてきた。

「提案？なにかあるのか？」

「あるよ。一か八かで、ひよつとしたら1位になれるし、間違ったら、ダントツの最下位になるんだけど。」

「とりあえず聞かせてくれ。」

「オッケー。俺は一言しか言わないから、どうするかはそっちで決めてくれ。」

『2レーン、一組、屋比久俊』

「誰がニヤンニヤンテレパシーだ、ゴラア」

多分、今のアナウンスがそう聞こえたのだろうか。ありえない耳してるな、あのネコ。

「ニヤンか言ったか？」



「言ってるわけねーだろ」

今、僕の心の中を読まれたみたいだ。内心、かなり焦った。

「なあ、質問質問」

さっき僕が提案を聞かせた人（名前忘れた）が僕の隣に座ってきた。  
「本当にあの順番に替えて、1位になれるのか？」

「さっき言っただじゃん。一か八かの確率って。少なくとも、最初の一番、二番は確実にいいと思うぜ？」

表情から見て、あまり理解はしていなかった。まあ、詳しくは説明していないし仕方ない事だけど。

「ま、見れば分かるさ。」

そう言っと、タイミングよくアナウンスが聞こえた。

『位置に着いて・・・』

全走者がそれぞれのスタートに適した構えを取った。（ちなみに俊は克蘭チングスタート）

『ヨーイ・・・』

全員がピストルの合図を待っていた。この瞬間、この広い運動場が静まり返ったような気がした。

パアーン！

第一走者が一斉に走り出した。

## 最終運動会計画くTHE対抗リレー2

今の順位は、俊が3位だった。実の所、俊自信の能力はそれほど高くない。細かく言えば、彼の運動能力は文化系の人と同じくらいだ。  
「おい、悪くはないけど、どこが『ブツちぎりの1位からスタート』なんだよ。」

「まあ、見てなつて。」

僕は立ち上がると、俊に向かってありったけの大声で叫んだ。

「鈍<sup>のろ</sup>すぎてハエも止まりそうだぜ！？このカスキャットがあー！」  
クラスで僕が大声で叫ぶのはほとんどないせいか、ほぼ皆がこちらに視線を注目させていた。後になつて、とても恥ずかしくなつてきた。けど、効果はあつたようだ。

「誰がハエも止まりそんなカスキャットだつてえ！？」

あの耳のおかしい俊が的確に文句を聞き取つた！それほどこの対抗リレーに勝ちたいのか……。意味は良く分からないけど、そう思つてしまった。

「フウウオオオオオー！！！」

ものすごい勢いで走る俊は先頭の走者まで、難なくブツちぎつた。

「おいおい！滅<sup>めぢやくぢやく</sup>茶苦茶速すぎるだろ！あのスピードでバトン取れるのか？」

確かに。見た感じの2位との差は人五人分の差がありながら、まだ加速していく。

「まあ、かなり厳しいだろうな」

「スピードを緩めさせろよ。そうしないと・・・」

「問題ないさ。」

この男は北斗軍団のことをそれほど知らないのか、またしてもポカンとしていた。

「次の走者が誰だか分かつてるだろ？」

「分かつてるけど、あれはさすがに・・・」

「心配ないさ。部下の能力を知らずにどうやってリーダーを名乗るんだ？だからアイツなら大丈夫さ。」

珍しい生き物でも見ているかのように、眺めていた。

「ま、見れば分かるけど。」

僕は、次の走者を見るように促した。期待通りに、リーダーは高速で迫りくるバトンを助走をつけながら、受け取っていた。この一連の動作がどんなものか理解したのか、運動場中が『おお！』と驚きの声を上げていた。正直、これくらいことをほぼ毎日してきた僕達にとっては、当然のようにしないとおかしい感じだった。

『1組が大きくリードしています！』

放送部のアナウンスもすっかりテンションが高くなってきているのが、声だけで分かった。このまま安全に1位をキープできると思っていたのだが、一つ。たった一つ、意外な事が起きた。三組の走者があの南斗の男、伊鯨瞬だったことだ。身体的に体が大きく、身長が176センチもあるという。それでいて、足が長い。瞬はその体格を生かして、歩幅を大きくして、走るようにしていた。つまり、結果的に足がかなり速いことになる。

「やばいぞ明彦！急いで走れ！」

声が聞こえたのか、それともなんとなくなのか、身の危険を感じた明彦は必死に走り出していた。しかし、このとんでもない歩幅のせいで、徐々に距離が縮まってきていた。

『三組さんが、どんどん追い上げてきます。一組さん頑張つて！』アナウンスがそう言ったところには、七人分の距離が四人分に縮まってきた。明彦も決して遅くはないのに、瞬がとんでもなく早いのが分かった。

「いよっしゃー！！」

明彦が妙な大声を上げ、少し加速した。縮まっていた差が、広がる事もなく縮まる事もないまま、明彦は1位のままバトンを渡す事ができた。

「さて、俺たちは最後だから、本気で頑張らんな。」

僕は孝之の肩をポンと軽く叩いてリラックスをさせた。

現在      5位中      1位

### 最終運動会計画 THE 対抗リレー 3

現在、リレーの状況は、本当の意味でシーズンゲームしていた。1位になったり2位になったりのくりかえしで、かなりいい調子だった。まず、練習の時にトップにすらなつた事がないクラスなだけに、盛り上がり方が普通ではなかった。その万年ビリのクラスが本番当日に突然のトップに。この事態に困惑し、1位にならないければ、という焦りからか、他のクラスもとんでもないレベルで盛り上がった。いた。

まるで、何かの祭りのようだ。

僕は、そんな運動会を今始めて体感して、身震いをしている。それは『アンカー』の孝之も気付いただろう。

「まさか・・・ビビってる？」

少し震えている声で、孝之が話し掛けてきた。

「まさか。これは武者震いってやつだよ。」

そう言うてごまかしたが、本当はビビっていた。僕はこんな舞台でトップをキープしたまま走って、孝之に繋がらないといけない。もし転んで、ビリに急降下したときには、どんな拷問が待ってるのか分かったものじゃない。といっても、アンカーの孝之には、僕の倍以上のプレッシャーがくるだろう。だから僕よりもカタカタ震えていた。

「落ち着けよ。結果はどうあれ、お前の走りをすればいい。全責任は俺がとる。」

とりあえず、僕は孝之を落ち着かせてみた。少し安心したのか、体に入っていた余計な力が抜けていくのが分かった。

「甲斐、そろそろ出番だぜ。」

そういわれて、僕はレーンの上にたつた。僕のクラスは1位を保っていた。それを見て安心した時だった。

「そつえば、初めて勝負するな。」

隣りを向くと、三組の、そして南斗のもう一人の男、伊芸良が軽くストレッチをしていた。厄介な事に、この学年で、トップ3を誇る足の速さを持った相手と走る羽目になるとは・・・

（逃げ切れるかな？）

僕は不安げにそう思っているのもつかの間、後ろから走者がきて迷う暇はなかった。

（くそう！）

何すればいいか分からない僕は、ただ開き直って、バトンを受け取り全力で走り出した。その時僕は、後ろを振り返らないようにただ前だけを見て走っていった。一応、僕も多少速いではあるけど、良にかかれば、追いつけない相手ではないだろう。

（今俺は全力で走っているんだよね？）

僕がそう思ったのは、走っているはずの僕の後ろから、恐ろしい勢いで足音が聞こえるからだ。ほぼ間違いなく良だ。僕は文字通り全身全霊、体中を使って走っていた。のはずが、気がつけば僕の隣には良がいた。

「孝之、助走をつけろ！」

コースの三分の二を走った所で、孝之に指示を送った。助走をつけるには、かなり早いのだが、なりふりかまっていられなかった。

「早く、走れ！！」

二度目の言葉を送ると、孝之はようやく助走をつけた。普通ならば、バトンを渡す時に腕を伸ばし渡すだろう。しかし、僕は違う。

カーブを曲がり、直線になった瞬間、腕を伸ばした。

僕は一刻も早く、1位の状態でバトンを渡し、孝之にゴールしてもらいたかった。だから、助走で少し長めに走らせ、僕は最初から腕を伸ばして、最短でバトンを渡す策をした。幸い、三組のアンカーは、僕より足が遅かった。恐らく、良で距離を離れたかったという作戦だろう。

「孝之！ラストは華々しくな！」

「おう！」

孝之がバトンを受け取った時には、すでにあと半分くらいになっていた。バトンを受け取った孝之は本気で走り出し、2位の走者は追いつけなかった。

「やったぁー！！最初で最後の、1位だぜー！！」

クラスははしゃいでいたが、僕は間違いなく起こる『アレ』の瞬間を待っていた。

**最終運動会計画くTHE対抗リレー4（前書き）**

あ、あらずじ

対抗リレー編、クライマックス



## 最終運動会計画 THE 対抗リレー 4

（絶対くるはずなんだ。孝之だからこそ起こる瞬間が）

勝利ムードの一組はすでに、握手をしたり、喜んだりしていた。明彦や俊もハイタッチを交わしたりなど、負けを疑っているなど、全く感じさせなかった。が、僕以外の皆が忘れている。

あの『孝之』が『ゴール前』でなにも起きないわけがない

僕はそう思ってたやまなかった。だから、孝之の走りを瞬きもせずに見つめていた。

しかし、孝之は好調に走りつづけていた。

（考えすぎか・・・）

そう思ってた安心した瞬間だった。孝之が自分の足に足を引つ掛けていた。体制を崩した孝之は前のめりに転んでいった。ゴールを目の前にして。ここで転べば1位を逃して、2位でゴールをするだろうけど、みんなの期待を裏切った扱いを受けとんでもない事になりそうな気がした。ここにいる誰もが、この少年は間違いなく転ぶだろう。そう思ったに違いない。その証拠に、僕のクラスの顔が喜びの顔から、驚愕の顔をしていた。

しかし、僕はそうは思わなかった。

それが来ることを信じて疑わなかった（言葉が悪いのは失礼だが、一応事実）僕の勝利を確信した。

「孝之、前に前転してから、テープに跳び込め！」

孝之と僕以外の人間がポカンとしていた。孝之は僕の言ったとおり、倒れる瞬間、手を前に出して、昔体育で習った前転を行った。そして立ち上がった瞬間、立ち幅跳びの要領でゴールテープへと体を投げた。孝之の体にゴールテープがピタリと張り付いたように見えた。

『ゴール！ゴールです！1位は三年一組です。2位はわずかに三組でした。』

アナウンスの外で『ワーワー』『キヤーキヤー』と女子の声が騒がしく聞こえた。この喜び方だと、事情を知っている3年だろう。放送部のテントでは、どういうわけか顧問の先生と部員が抱き合っ  
て喜ぶというシニールな場面で少し笑ってしまった。

ま、放送部の状況は置いといて。

孝之が、まだ信じられない表情で白いゴールテープを握っていた。僕は今日のヒーローに肩をたたき出した。ねぎらいの言葉を送っていた。

「ナイス！」

「かつこよかったぜ！」

「なんかおれ、孝之がハンサムに見えたよ。」

これは俊。

「ブタ野郎め」

これは僕。

「やはりな。お前ならやと思ったぜ。」

これ明彦。

「ブタ野郎め」

これも僕。

「じゃあよ、今日のヒーローを皆で胴上げしようぜ。」

僕が仕切ってみたら、一組の皆が一斉に集まった。そして、孝之を抱えてから、胴上げをした。

「どんな気分だ、孝之」

「やっと勝った実感が湧いたよ。」

「よかったじゃん」

明彦が少し微笑んだ。この雰囲気の中、放送部員のアナウンスが申し訳無さそうに聞こえた。

『あの・・・運動会自体はまだ終わっていませんけど・・・』

皆思い出したらしく、胴上げをピタリと止めた。そして、空に舞う孝之の体を受け止める人はいなかった。

ドスン　ゴバー！

孝之のむなしい悲鳴だけが、運動場に響いた。

戦績            5位中    1位

戦利品            クラスの友情、運動会が終わっていないという辛い真実

最終運動会計画くTHE対抗リレー4（後書き）

次話からあらすじちゃんと書かなきゃ・・・

## ハーフタイム争奪戦（前書き）

いろいろ、実験的な事をしてみました。  
だからといって、違う作者が書いてないから。

あらずじ

リレーが終わって・・・

## ハーフタイム争奪戦

「ッハあー、暑い!!」

学年ごとに設置されているテントの、自分の席につく瞬間に、明彦は飛び込むようにイスに座った。それもそのはずだ。今回の運動会は異常気象による高い気温のせいで帽子を着用を許されていた。けど、『そんなものは邪道だ』という明彦と俊の意見により、僕たち北斗軍団は、帽子もなしにいままでの運動会の日程を過ごしていたということもあるし、もちろん、いままでの競技のたびにいちいち本気でやっていた事もあるだろう。

「ゲ・・・ゲータレードくれ」

「なんで俺に聞くんだよ。ていうか持つてゐるわけないだろ」

焦点のあつていない孝之の視線が僕の良心にダメージを与えていたのだが、その効果はいまひとつのようだった。

「ったく、そんな事言うからのど渴いたじゃんか」

僕はそういうと、席を立ててテントを離れていった。

「どこ行くんだ？」

「あっち」

僕は、人気の少ない水道の方に指を刺した。そのとき、孝之の目が光ったように見えた。いや、間違いなく光っていた。孝之はものすごい速度で僕を追い抜き、水道のほうへ走っていった。

「くっ・・・待てよ、コラ。」

どういう根拠なのかはわからないが、今僕の心の中では『孝之に抜かれ、自分より先に水を飲まれると負け』というルールが、一瞬にして出来上がっていた。

「うはははは！この勝負はおれが勝ったようなもんだなあ！」

いつの間にゴールに着いた孝之が、勝ち誇ったように蛇口に手をかけた。（いつそこについたのか、本当に気になる）

「あーばよお」

孝之が水道に口を近づけようとしたときだった。

「それにさわんじゃねえ、クソ野郎！」

横から蹴りを入れたのは、サンジ・・・ではなく、なぜか怒りの表情の俊だった。（ていうか、お前もいつの間にそこに・・・）」

「わかつてるのか！ここにある水はオレ以外、絶対飲むんじゃねえ。」

「お前何言ってるの！？」

孝之がフツーツにつつこんじやったよ。さすがに僕もなんか納得した。

「だから、オレがたらふく飲んでやる」

そう言つて、俊が水道に口を近づけた時だったときだった。

「пей！！！！！！」

という奇声を上げて、横から飛び蹴りをしたのは、明彦だった。（お前らしい加減にしろよ。どんだけ足速いんだよ）明彦は、倒れた2人を見下ろしながら、腕を組んで（えらそうに）語りだした。

「お前らは、黙って聞いていれば、たかが水で殺しあいやがって。地に堕ちたか、アホンダラ共め。」

結局、明彦も『たかが水』で、1人ぶつ飛ばした時点で、あいつ等と同じレベルなのがわかった。

「だから、もうお前らがケンカしないよう・・・」

そう言いながら、蛇口に手をかけた。

（まさか！）

「お前らの分も飲むでしょう！」

「やめろおー！！」

パツと見ると、とてもシリアスな場面に聞こえるが、内容を知ると酷く馬鹿みたい。そんな場面の中、僕はとってもマジで明彦を阻止しようとしている。（結局僕も、明彦達とそう変わらないレベルだった。）水の出た水道に、明彦が口を近づけた瞬間、僕は自分の履いていた靴を脱いで、手に持つと、目掛けてぶん投げた。

「うるあー！！！！」

僕の靴は、見事に明彦の顔にジャストミートした。明彦は後ろに倒

れていった。

「やつと・・・やつとだ。」

僕はとうとう、水道の前に立つことができた。もう僕を邪魔するやつはいない。僕は遠慮なく、蛇口をひねり、水を喉に通した。だが、ある予想外が起きた。

「アツツツ！」

僕は忘れていた。太陽のせいで、冷たいはずの水道がかなりの熱湯になっていた事を。僕はあまりの事態に目の前が真っ暗になった。そして、その場で僕は倒れこんだ。

皆も、こういうことには、ぜひ気をつけてほしい。



**最終運動会計画（後半戦（前書き））**

あらすじ

バテバテな4人。

## 最終運動会計画 後半戦

ガリツガリガリ ボリボリボリボリ

「……………うめえ。」

こんな暑い日に何も飲めないのつらい事ではあるし、何かを食べることともつらい事だ。けど、『何を食べるか』によつては、かなり状況が変わる。まさに、今の僕らは本当の意味で天国にいるような気分になっている。

「なあ、次つて何だっけ？」

孝之がだるそうに明彦に話しかける。

「確か…………フオークダンス…………だった気がする」

焦点の合わない目で孝之を見ながら明彦が答えた。話し方を聞いた限り、相当めんどくさがっているのがよく分かった。実際、僕もとてもめんどくさいし、なにも考えたくない気分だ。暑いし。

「いっそ、逃げた方が良いだろ」

急に何を言い出すんだ、俊。

「帽子も被ってないのにこれ以上運動会してたら死んでしまつて。」

「バカタレカア！」

突然、明彦が激怒した。僕はその理由を暑さのせいかと思つたら違つていた。

「一応、オレ達最後の運動会だろうが！アホみたいな思い出の一つくらい作るうじゃねーか！倒れたら倒れたで、いい思い出になるだろ？」

いい事言つてると思うけど、なんか違つてる気がしてならない。僕は微妙な心境だった。とりあえず、今回は明彦の味方につくことにした。

「俺もそう思うな。思いで作りに運動会は最適だろ？」

僕がそう言いなだめると、俊はおとなしくなり、孝之の持っている

『固体』を何気なく奪って口にした。

ガリツガリガリ　ボリボリ

「・・・っうし。たまにはムチャもしよっかな。」

「・・・っていうか、それ、おれの・・・」

・・・ちなみに、さつきから僕達が食べているのは、俊と孝之がどこから持ってきたか知らない『氷』だ。やっぱり、氷はこういう時に役に立つもんだ。

フォークダンスを体育着で踊るのもおかしいだろう、という先生方の意見で僕達3年生は、各自、制服に着替えに行った。だが、しかし。ここで、ある重大な事件が起きた。

制服忘れた。しかも、北斗軍団全員。

ひよつとしたら、僕等はフォークダンスに参加できないかもしれないかもしれないことになってしまった。僕と俊としては、どちらでもいいのだが、明彦と孝之は、

「絶対嫌だ！オレ絶対このダンス出る！」

と、ただっ子のようにごねていた。孝之は彼女がいるからいいとして、明彦がなぜ困るのかよく分からない。けど、こんな本気な明彦も珍しいから、僕はまた味方した

「・・・明彦、賭けは好きか？」

「一か八かは結構好きだな。」

「そうか。一か八かね・・・」

その時、僕はどんな顔をしたのか分からないが、明彦は僕の顔を見てハッとしたのが分かった。

「・・・何を考えてるんだ？」

「別に。ただの悪巧み。」

僕はそう言っつて、職員室の方へ駆けて行った。後ろで、明彦達が不安そうな表情をしているのが見なくても分かった。けど、僕はこう思っている。

この賭けに勝てば、フォークダンスは確実にもっと楽しめるはずだ  
！！

## 最終運動会計画／共闘（前書き）

祝40話！！v（-・-）v 　　淒いかどうかはわかんないけど・・

・

あらすじ

見てろよ！この作戦

## 最終運動会計画と共闘

「教頭。教頭先生います?」

僕はこういうイベントのときに、決まって外に出ない先生を知っている。僕の予想通り、その先生は職員室の自分の席でうつぶせに寝ていた。僕は職員室に入るなり、教頭の肩を軽く叩いて起こした。

「フアッア・・・起きてるよ。そんなしなくても十分起きてたからな」

「教頭。今からフォークダンスをするんですが・・・」

「まあ、誰もいないから軽く呼び捨てでも大丈夫だよ。」

「・・・はい。・・・じゃ、野原。大事な話があるんだけど聞いてくれる?」

教頭にして理科の先生を務める野原忠が軽く頭をかきながらうなずいた。僕達にとって、この野原という人は『人生の師』に等しい人物である。状況が状況だから、詳しい話はいずれしたいと思う。

「運動会のプログラムで、今からフォークダンスがあるんだ。本当なら制服でやるんだけど、俺達忘れちゃってかなりやつかいな事になってるんだよね。だから、助けてほしいんだ。」

そこまで言くと、野原は突然笑い出した。

「はっははは。やっぱりお前ら軍団は大分変わってるな。普通のヤツならダンスができなくなるくらいでそこまではしないぞ。ホントに面白いヤツだな。」

僕もそう思った。自覚できる程、僕達は変わっていることが良く分かっている。野原が、胸ポケットからタバコを取り出し、口にくわえて真剣に話し出した。

「一応、手は貸したいけどよ、お前らが何をしたいか分からないから今は何もできないよ。で、お前らはどんな考えがあってダンスに出るつもりなのか?」

野原がそこまで言くと、くわえていたタバコに火をつけた。

「考えならあるよ。しかも、普通のヤツには滅多に思いつかないと思うようなとびつきりなヤツ。」

「ほう。」

野原が楽しそうに笑んでいるのが分かった。

「一つ目は、男女関係なく私服でフォークダンスをやる。二つ目は、先生、保護者方の参加も自由にする。」

僕は自信満々に言った。野原がこらえていたものを吹き出すように、爆笑しだした。

「ボクは何人の変わったヤツを見てきたが、お前は特に変わってるな。ひとつ分らないんだが、何故保護者も参加させようと思ったんだ？」

実はその理由も考えていた。

「俺達が個人で動いたのがバレないように。結構カンペキと思うけど？」

野原はとうとう、腹をかかえて、笑いを我慢していた。

「OK。やってみたらかなり面白そうだから、他の先生方に聞いてみる。」

親指を上げて、承認してくれた。けど、まだ顔は笑いで妙に引きつっていた。

「ぜひ、よろしく頼む。」

僕と野原がハイタッチを交わすと、そのまま野原は職員室を出て行った。出る寸前にこう言い残した。

「ミスっても許してね。」

そのいい笑顔を見ると、ミスっても許せそうだった。というより、相手が野原だから許せる感じだった。これには何もできない僕は、手を振って見送った。

## 最終運動会計画はいい、終了

「お、甲斐。で、どうだった？」

少し心配そうに明彦が聞いてきた。

「うん。多分大丈夫、って言ってた。心配はいらんだろ。」

はつきり言って、僕の内心が心配だった。上手くいくかどうかも本当にわからない大博打をしているわけだから、成功するとは限らない。確率的には失敗の方がはるかに高い。

（ほとんど負け戦<sup>まいくさ</sup>だな。）

「ん？なんか言った？」

「なんも言ってねえよ。」

小声で言ったのに危なく孝之に聞こえそうだった。運動場を見ると、学校の制服に着替えた同級生たちの並ぶ姿がかなり目立ち始めた。危機感を感じた僕達のしゃべる言葉は少なくなって、気がついたら僕達軍団が尋常じゃない静けさになった。そして、運動場に集まった同級生たちが見る見る内に、それぞれ男女のペアが出来あがっていた。

「まったく！野原は一体なにしてんだよ！？」

焦りから、僕はつい孝之に怒るように八つ当たりをしてしまった。

「・・・悪い。かなり焦ってるわ。」

孝之が驚いたようにこっちを見て、僕は少し落ち着くようにした。僕が運動場を見ると、ペアになった男女が入場している姿があった。よく聞いてみたら、BGMがはつきりと流れている事にも気がついた。僕達がどれだけ焦っていたか分かったような感じがした。

「・・・終わった・・・な」

俊が遠い目をして言った。（確か俊って、ダンスはどうでもいいと言っていたと思っているのは僕だけだろうか？）孝之と明彦はこの世の終わりのような、もしくは、怪獣でも見ているかのような、かなり険しい顔で運動場を見ていた。それらは生きた人間の表情をし



ていなかった。

「・・・しよんなぁ・・・誰か夢だと言ってくれ」

「明彦・・・どうやら現実らしいよ。」

すでに運動場ではダンスの曲が流れていて、失敗に終わった事を分かった僕は、皆に言った。

「作戦は失敗だったみたいだ。じゃ、あとはエイサーで頑張ろうぜ」  
僕達はクラスのテントに戻る事も出来ないので、校内をさまようことにした。

その瞬間だった。

『現在ダンスをしている3年生の皆さん。至急、私服に着替えて、再度運動場に集まってください。また、先生、保護者方の皆さんの参加も自由なので、気軽に参加下さい。』

## 最終運動会計画くちよつとだけ大人の話

あまりにも突然な放送だった。僕たちはその内容をすぐには理解できなかった。

「・・・今の放送は・・・なんだって？」

確認の意味で、俊が聞いてきた。僕は、今自分が聞いた事を伝えた。

「あれ・・・だろ？今からの校歌ダンスは私服でやるって。しかも、保護者付きで。」

「おお！なんか分からんが、大逆転ぞお！」

「よっしゃあ！みんなおれついて来い」

明彦が叫ぶと、僕らは一斉に運動場へ走っていった。

（なんか中途半端なタイミングだな・・・）

僕は少し思った。けど、これからの校歌ダンスの楽しみのせいで、その思いもすぐに消えていった。

「教頭！あれほどダメだと言ったのに、一体何をしているんですか？！」

「何って・・・放送に決まってるじゃないですか」

放送席のいるテントの下で、校長は野原に対して今の放送で本気で怒っていた。というよりブチ切れていた。

「それは見て分かる！私が聞いているのは、なぜ『そんな放送をしているのだ』ということだ。」

校長の勢いは、かけている眼鏡が割れそうなほどの怒りが見えてきた。野原は、両腕を組んで少し考えると、一言呟いた。

「校長。お子さんはいます？」

「は？」

「いや、ですから・・・校長にはお子さんはいるんですか？」

「いるよ。ちようど高校と中学2年の息子と小学校の娘が・・・  
・それが何か？」

それから野原は、少しずつ語りだした。

「少しかけイメージしてもらいたんですが……もし校長がこちらの生徒と同じ年齢としだったとしたら、全く同じ状況になったら、どう思います？」

「そうだな……友達の親とかと踊るのは面白そうだな……それに好きな先生とかと踊るのも楽しそうだなあ」

校長は昔を懐かしむような、少し遠い目で言った。

「今の中学生もそう思っていると思いますよ。私には親は二人ともいなかったものですから、運動会とか授業参観というものが大嫌いだったんですね。だから、ここの生徒達には私の分も楽しんでもらいたいですよ。」

校長は野原のその過去を知ったためか、野原の気持ちを理解した。

「……君の事を安く見ていたようだ。私が悪かった。ところで、教員の参加がいいなら、野原君、君も一緒に行かないか？」

「言っただけじゃないですか。私の分も生徒達に楽しんでもらいたいです。」

校長が少し残念そうになると、校長は私服の生徒の方へ駆けていった。それを見送った野原の表情はどこか寂しさがあった。

「野原。」

僕達は野原のいる放送席のテントにやってきた。

「どうやって説得したの？いわゆるワイロを？」

「アホ言え。アホ共め。」

野原は煙草を一度吸って、一言。

「……大人の事情……ってヤツだな」

（うわっ、なんか言い出したぞ……）

口に出して言いかけたけど、僕はそれを飲み込む事ができた。

「まあ、なんかよく分からんけど、俺達いつてくるよ。」

「野原の分もちゃんと楽しんでくるよ。」

貴之がそう言うと、一瞬、ほんの一瞬だけ野原の表情が変わった

気がした。

「お前ら。本当にオレの分も楽しんで来いよ。」

どうやら気のせいだったようだ。いつもの野原のちよつとユルイ表<sup>か</sup>情<sup>お</sup>だった。僕達はそれから振り返らずに運動場へ走っていった。

**最終運動会計画」ちよつとだけ大人の話（後書き）**

かなりご無沙汰です。  
指つた。

**最終運動会計画〓フォークダンス前哨戦ちつく(前書き)**

珍しくパクリが多いけどそんなに深く考えないようにして下さい。

## 最終運動会計画くフォークダンス前哨戦ちつく

「さて、どうしたものか・・・」

よくよく考えてみたら、フォークダンスの曲は2曲しか無いの思  
い出した。僕は少し損をした気分になったが、

「ひゃっほおーう！アゲアゲだぜ！」

明彦が一人で飛び跳ねていた。正直、あまりに痛々しいから、僕は  
他人のフリをしていたかったが、僕の隣にいる孝之も、

「ウツシャー！！！」

と言いながら、ガッツポーズをとっていた。もはや、他人と言いつ  
れるのは不可能だと悟った。そしてもう一つ。

（そういえば、女子と手を繋がないんだった・・・）

僕はダンス自体は嫌いじゃないのに、こんな形でダンスをしないの  
はかなりもつたいたい感じがした。けど、女子と手を繋いでダンス  
ってちょっとな・・・んー、迷うな。

「見いーつけた。」

この後ろから聞こえる聞きなれた女子の声は・・・  
アイツしかない。

「・・・ラディッツめ、死におったか・・・」

「ブブー。愛子でした。」

「普通に紹介すんなよ！ツツコめよ！」

僕は勢い良く振り返ると、かなり奇妙な自己紹介をした愛子がいた。  
・・・ていうか、待てよ。

「お前、俺の前にいたっけ？」

「うん。なんか緊張してる風に見えたから、来ただけ。あんたに  
してはおかしいね。もしかして、女子と手を繋ぐくらいの事でビビ  
ってるのか？」

なんで分かったんだ？僕の表情に出ていたのか？それとも、こいつ  
の目がマサイ族レベルの視力で観察されてしまったのか、もしくは

エスパーかのどちらか・・・

「なに動揺してんのよ。凶星？」

「・・・はは、気のせいだろ」

僕はそう言うので精一杯だった。あれだけの確に言われると、そりや落ち込むだろ。

「・・・まあ、アレよ。いきなり知らない女子とダンスを始めても、あんたガチガチしそうだから、まだ知ってる女子と始めた方が、気も楽に慣れるでしょ。そんな感じで、運動会にいい思い出でもつくるうよ。」

なるほど、いい作戦だ。

「頭いいな、愛子」

「ん？よく聞こえなかったな。もう一回言ってごらんさあい。」

「戦闘力たつたの2か・・・ゴミだな」

「著作権で訴えられても知らないよ、私！」

そんなアホな会話をしていたら、いつの間にか私服の同級生、保護者、そしてなぜかの先生方も並んでいた。それで、さっきまであった迷いも無くなっていた。

「・・・いやー落ち着いた。ありがとな。」

ひとまず、愛子にマジで感謝した。

「いまさら何言っただのよ。」

「・・・ボケ」

僕がそう言った瞬間、スピッツの空も飛べるはずのイントロが流れ出した。そして、愛子が差し出した手の平を僕は力なく置いた。



最終運動会計画くフォークダンス前哨戦ちつく(後書き)

久々の一挙二話  
バテた。

## 最終運動会計画くやととフォークダンス（前書き）

この運動会編も 多分 中盤を迎えました。

・・・早く違うネタを書きたいのが本音ですネ

## 最終運動会計画くやつとフォークダンス

人間、不思議な事が起こるものだ、と実感した。

愛子が出してきた右手に、緊張しながら僕は軽く左手を乗せると、すごい事に緊張感はなくなつて逆になぜか安心してきた。

「アレだな。愛子つて精神安定剤みたいだな。」

僕としては、誉め言葉に近い言い方をしたはずだが、愛子は気に入らなかったのか僕の足の指先をわざとらしく、踵で強く踏んだ。

（ウグアアアア！！<sup>めちゃくちゃ</sup>激痛え！！！）

普段なら、声を上げて叫んでいる所だったけど僕は見事に耐え切つた。僕は心の中で叫びきつた。

「・・・何言ってるか知らないけど、もうすぐイントロ終わるから。」

明らかに声のトーンが落ちている。愛子の機嫌が悪くなったのがよくわかった。

「・・・らじゃ」

これ以上は怖くて言えなかった。曲に耳を傾けてみると、もうすぐ歌に入るところだと確認できた。といっても、この曲は基本的に『歩く』のがメインだから、それほど難しくはないけど、あえて数えるならサビのところ『スキップ』する事（これは僕個人）と、2番の歌が入る2テンポ前（と先生が言ってた）に全員が振り返り逆向きになる、くらいだ。問題は何もない。と、思った矢先だった。

愛子がどこかに行ってしまった。

ということとは、僕も自動的に相手を変えないといけない。僕は次前に進むと、南斗でさほど目立っていない三神藍里の隣に並んだ。多分愛子の仕業だろう・・・か？とりあえず、僕は三神の手を取ってゆっくり歩き出した。

「・・・近くで見ると、やっぱり藍里って小っさいなあ」

しばらく黙って歩いていたけど、あまりの沈黙に耐えられなくなり

僕は初めて積極的に女子に話し掛けた。

「甲斐だつて、そんなに大きくないよ。」

三神の声を初めて聞いたけど、驚いた。真面目に例えて『小鳥のさえずり』という言葉が一番似合う透き通った声だった。けど、一つ予想通りなのが、やっぱり声は小さかった事だった。けど、僕が実際に気にしている事をはつきり言いやがって・・・（僕の身長は159cm、三神は148cm。どっちもどっちだな・・・）僕は怒りをこまかすためにとりあえず一言言った。

「・・・いい声だな。眠くなりそう。」

「眠い？私の声であくびが出るほど微妙な声なの？」

なんでそうなるんだよ。意味わからんよ。

で、気がつくともうすぐサビに入る事に気付いた僕たちはまた相手を代えるため前に進むと、今度は仲田美智子だった。もう、3年生全員と保護者、教員が混ざってとは思えないほど、知っている女子としか当たらない。

「あ。孝之の友達だ」

「甲斐だ！名前ぐらい覚えろよ。」

それほど話した事は無いとは言え、初対面じゃない人に向かって普通はそう言えるものだろうか？しかも気がついたら、既に美智子と手を取ってるし。

「・・・結構楽しいもんだな、フォークダンスって」

「何？女子と手を繋ぐのがそんなに楽しいのお？やらしー」

・・・お、女を本気で殴りたいと思ったのは生まれて初めてだ。僕は震える右拳を落ち着けていた。

「そんなんじゃないくて。俺ってこういう行事ものってかなり苦手だったんだけど、このフォークダンスみたいにいるんな人と接するのって、以外に楽しいの知らなかったんだよな。」

「あー、それ分かる。美智子も実際やってみるまで思わなかった。じゃ、今日の運動会はたくさん楽しまないとネ。」

「そついうのは、孝之に言った方がいいぞ。」

僕がそういうと、『おバカ!』と照れくさそうにしながら顔を美智子に軽く殴られた。何故殴る?。まあ、美智子の言うとおり、運動会を楽しまないとな。と思いながら、僕はダンス相手を変えた。

**最終運動会計画くやつとフオークダンス 俊の場合（前書き）**

多少書き方を変えてみたよ。

だからと言って違う作者じゃないから。

## 最終運動会計画くやつとフォークダンス 俊の場合

（やばい！これは人生最大の危機だ！<sup>ピンチ</sup>）

オレは今焦っていた。

これを読んでいる人はこんな経験があるだろうか？親の参加する行事に、自分の親がやたらと豪華な服装で来てめちやくちや恥ずかしかったこと。誰の親なのか知らないのがかえってダメージが高くなるような経験。

オレは今、まさにその状況にいた。今8月の真っ只中、その中で真っ赤な服に、真っ赤でヒラヒラしたスカートを着ている親。誰が見ても、不自然極まりない光景だ。

「ヤバイヤバイヤバイ・・・ヤバイ・・・」

「どうしたの？」

相当なプレッシャーの中、不意に話し掛けられて、異常にビクツとした。

「な・・・なんでもない・・・暑くてもうヤバイなあ、て」

「へえ、そうかな？・・・そっか、帽子まったくかぶってなかったからね。」

なんでそんな事知ってるんだろ？少し気になったが、一瞬にしてその疑問は消えた。実際、この暑さに、正直頭もまいりそうだしあの『真っ赤な人』が気になってしょうがなかった。

（はあ、まだ2番の途中くらいか・・・）

オレにとつては飽きるほど聞いた曲だから、あと2、3分がかなり長く感じ始めていた。気力の無い俺は、相手を変えた瞬間だった。「シюнちゃん、大丈夫？」

その時顔を上げたのが、間違いだったのかもしれない。ずっと前にいたはずの親は気がつけば目の前にいた。本気<sup>マジ</sup>で心臓が止まったようだった。

「んねえ、帽子なんかかぶらないで。倒れちゃうよ。」

「・・・ちよつと待った。かなり前の方にいなかった?」

「うん。けどシュンちゃん見つけた瞬間、飛んできちゃった。」

「・・・とりあえず、シュンちゃんはやめて・・・」

オレはこの言いようのない脱力感を『吸血鬼に血を吸われた、まさにその瞬間』と、のちに語っていた。

「どう?学校は楽しい?」

周りから、少しだけだけど、微かに人の笑う声が聞こえた。開き直ったオレは、

「楽しいに決まってるじゃん。」

普通に会話を始めた。一応、北斗のメンバーは当然親を見た事があるから余計にしんどかった。普通に見た光景が、ただの中学生となんかセレブな人が何か話をしながら、ダンスをしている。誰が見ても面白いに決まってる。

「それにしても、多分初めてじゃない?」

「何が?」

「ほら。シュンちゃんってよくお父さんと話をするでしょ。わたしと話すといつても、一言、二言ぐらいでしょ?だから、息子と踊りながら話をするってなんだか嬉しくて、ね。」

冷静に思い出してみた。確かに、昔から世話をしてもらったり、いろんな話を聞いていたの父さんだった。そして、なぜなのか、今の前にいる母さんとは話した記憶がそれほどないし、自分がなにか母さんにしたのか、と聞かれると、よく分からない。

「・・・じゃ、踊ろう。母さん」

そう言った瞬間、さっきまでダラダラするような踊りが、生き返ったかのようにはずみ始めた。ハッキリ言って、周りから見るとオレが何をしたいかはあまり知らないのだが、オレは、とりあえずコレを言いたくて、楽しく踊り始めた。

「オレ、・・・とりあえず、これで、親孝行したことでもいいかな?今、他に何すれば良いのかよく分かんないからさ。」

「・・・いい孝行息子をもったね。私は・・・」



「な、泣くなよ。恥ずかしいなあ・・・っもう」

場面場面で見えていなかったけど、なんだか良いものを見たような気がした。運動会のフォークダンスの話にしては、結構いい話だった気がする。なにせ、遠くから見えていたからよく分からない所もあった。

・・・次は孝之でも見るか

## 最終運動会計画くやつとフォークダンス 孝之の場合

（ああ、まだかなあ・・・」

正直、今おれがこのダンスでの一番の盛り上がる所は多分言つまでもないだろう。

そう！美智子とダンス！！

だ。多分、北斗軍団にこんな事を言つと、おれの命は亡くなるかもしれない。さつきまで一つ、焦っていた事は、甲斐と踊っているとき、気のせいなのかなんか楽しそうだった。その時間だけ、結構シヨックだったが、甲斐のリアクションから考えて、美智子はおちよくっただけだった。（甲斐の表情つて、意外に行動で出てくるからなあ。）とまあ、おれはその瞬間がくるまで、文字通り、上の空だった。

「孝之、おい孝之。」

急に呼ばれたから、思わず

「はい、なんでしょう」

と、つい言ってしまった。おれはこの癖は分かっているんだけど、なぜか治らない癖だ。ともかく、呼んだ相手を見ると、科学の先生の阿座間先生だった。学校での呼び名は『デーモンの召喚』とまで呼ばれるほどの激怖い先生だ。

「孝之。一学期の期末テストで、赤点だったよね。二学期の実力テストが済んだら補習ね。分かった？」

「わかりました。デー・・・阿座間先生。」

危なかった。友達感覚で呼び名で呼びそうだった。

「オッケー。それじゃ。」

先生はそう言いながら、軽やかなステップで次の相手の方へ行ってしまった。結構ノリノリだな。デーモン。なんにしても、あんな暗い話題のせいで全くダンスに盛り上がらなくなってしまった。も

う帰りたい。

「どうしたの、暗い顔して。トイレ行きたいの？」

「そんなわきゃねーだ・・・」

相手が誰でも強く言い切るつもりだった。けど、相手が美智子だったらおれは当然言えない。

「もう疲れた誰か助けてよお。そんな合図だしたって。誰も見てないし、ましてタイムを告げる笛はならねんだよおー。」

「ちよ、ちよと孝之。本当に大丈夫?!」

さっきまでのどうしようもない切なさど、たった今現れた嬉しさがゴチャ混ざりしすぎて、自分でも分かるほどのみごとな壊れっぷりだった。

「・・・よし、踊ろっか」

「うん。」

ゆっくり手を出すと、美智子がそれに合わせて、手を置いてきた。デーモンが現れる前の嬉しさが再び蘇ってきた。(のちに、このときの表現を孝之は『天にも昇るような気持ち』と言っていた。が、その直後にボコボコにされた。)

「なあ、美智子。念のため聞くけど、誰と踊ってる時が面白い？」

「女の子にわざわざそれを言わすって、ダメだよお。」

美智子が照れくさそうに言った。それにっられておれも照れた瞬間。なぜか、右拳で殴られた。(そういえば、甲斐もさっきこれをやられたっけ・・・)

「当然、こうなるのは分かってたけどなあ・・・」

あまりに予想通りすぎて、僕は逆にイライラしていた。しかもなにがあつたのか、孝之殴られてるし。さて、ダンスももう少しだし。

最後は、アイツでも見るとしよう。楽しみだ。

## 最終運動会計画くフォークダンス終了 明彦の場合

はつきり言つて、俺はこのフォークダンスをアイツらの誰よりも楽しみしていた。理由は至つて簡単。

いろんな女子と話すいい機会だからだ！

無理があるかもしれないが、これは本当に、決してヤマシイ意味ではない。普段から俺は女子と喋ることがほとんどなく、会話の大半が北斗の部下達だ。しかし、このままでは俺たち軍団は『ホの集まり』やら『ゲ 集団』やら、最低な響きが出てくるかもしれない。その上、だ。部下の孝之に彼女ができて、俺に彼女が出来ないはずがない！ということから、このフォークダンスにやる気を見せていた。

だが、今は歌の最後のサビ。もうすぐ終わりなのにまとまな会話をした覚えがない。作者め、よくもふざけた設定にしゃがつて・・・

「あゝあ、良いことないなあ・・・」

やる気が無くなって、下を向くとそこには南斗の藍里がいた。背が小さいって軍団の中で噂だったけど、170cmある俺の肩ぐらゐが藍里の頭のとっぺんくらいだった。これは噂どおりなんてもんじゃない。

「いや、小っさくて見えなかった」

「小っさいっていうな。どアホ。」

いまどき『どアホ』って珍しい感じがした。ていうか、声高いけど、小っさ。こいつのいろんなところにビックリした。

「い、いや、悪気は別に無かったんだけど・・・」

「わたし、コレ結構気にしてるんだから・・・」

藍里がそう言った瞬間、この場のテンションが落ちた気がした。すっかり言ってしまったとはいえ、このままでは俺は最悪の人間になるっばい。普段から紳士を目指しているけど、そんなことなんか関係なく、謝る事にした。

「ご、ごめん。そんな気にしてるって思ってたから。運動会終わったらジューズでもおごるから、許してえ」

途中からどういいうわけか、少しふざけてしまった。それに気付いて『あ、ヤバ』と思ったときだった。

「ジューズ？いいの？！じゃあミルクティーおごって。」

さっきまではなんだったんだ？そう思えるほど表情が一転した。しかも、その見違えるほどの表情が変わった瞬間、俺は胸を押さえつけられた感じがした。俺は必死で気のせいだと言い聞かせた。

「終わったらな。」

俺は気がつく、かなり落ち着いていた。と同時に、ダンスの音楽も終わっていた。

僕はいろいろとビックリした。南斗の藍里の表情ってあまり見たことが無いけど、何故なのか、明彦と話しているときはどこか楽しそうな気がした。それに、最後の明彦の表情……

（いや……まさかな）

あの2人がどうなっていくのか。僕としてはとても気になる展開になってきていた。

とりあえず、運動会の終わりもあと少しだ。がんばるぞ。

最終運動会計画くフォークダンス終了 明彦の場合（後書き）

ひとまず三部作終了。

季節は冬だけど、私の心はまだ今年の夏休みなのであしからず。

## 最終運動会計画ゝ異変

疲労困憊ひろうこんはいというのは、まさにこのことだろう。気温は28。僕の意見としては、いつ死んでもおかしくないほどのダメージを受けていた。

「・・・もう・・・限界近いぜ・・・」

「まったくだ。誰かオレンジのジュースでも買ってきてくれないもんな。」

俊の言う通りだった。とにかく喉が渴いてしょうがない僕たちは、喉が渴いたからといって、水道から出てくる熱い水だけは飲むわけにはいかなかった。口にすれば即『死』につながる事を僕たちは話し合うことなく、理解していた。

「・・・で、次はなんだっけ？」

頭が上手くまわらない僕は、考えるのをめんどくさがって孝之に聞いた。

「んー・・・たしか、エイサー・・・だったと思う」

「エイサーかぁ・・・もう最後なのか・・・」

言われてみれば、最後のプログラムはエイサーをやって運動会の閉会式だった。なるほど。ゴールは目の前、ってことか。すると、明彦が景気よく

「よっしゃ！気合入れて、最後の運動会、おもつきし楽しんでいこうぜ！」

「・・・おおー！！！！」

と、言った。そして、僕たちはエイサーの衣装を取りに、体育館へ向かおうとしたそのときだった。

ドサッ

と、何かが倒れた音がした。振り返ると、さっきまで死に掛けていた孝之が後ろのほうで倒れていた。気になった。僕たちは孝之の方

に戻ってきた。

「おい。何倒れてんだよ。」

「このタイミングで死んだフリなんて、絶対流行らんぞ。」

どんなに俊と明彦がどんなに声をかけても、うつぶせに倒れてる孝之を軽く蹴飛ばしても、孝之はピクリとも、動かなかった。

「おいおい。この団員ふざけてんのか？」

「ははっ．．．そうか．．．も．．．な．．．．．」

今、明彦と会話をしていた俊も、僕たちの目の前で、孝之の隣に倒れこんだ。

「．．．甲斐．．．これ一体どうなってるんだ？」

「ハッキリ言って、俺もわから．．．」

それは言葉の途中だった。ほんの一瞬、僕の意識がなくなったような気がした。というより、『気絶』したのかもしれない。

「どうした甲斐？まさか．．」

「ああ。多分だけど、コイツ等が倒れたのと、今俺がそうなる原因がわかった気がする。」

だんだん消えていく意識の中、僕は明彦に伝えようとした。けど、全てを言える自信が無かった。

「多分、俺たち3人は．．．」

そこで張り詰めていた糸が切れたように、僕の意識も、ふっ、と無くなってしまった。僕は薄れ行く意識の中、明彦の声だけが耳に響いていた。



## 最終運動会計画く終幕

目が覚めると、そこは保健室のベッドの上だった。アレからどれくらい時間がたったのかは分からない。時計を見ると、すでに5時をまわっていた。

「おつ。もう起きたんだ。早いねえ。」

保健の先生の香織<sup>かおり</sup>先生が呑気にお茶を飲みながら、こっちに振り向いた。

「といつても、まだ頭がボーっとするでしょ？もちつと休んどいて。」

「・・・そうします」

保健室に行った憶えはほとんどなかった僕にとって、ほとんど冒険している感じがした。（寝ているだけなんだけど）それに、この先生はこのちよつと老けた先生方の多い中で、唯一の20代の先生だという。友達の話だと、見た目が芸能人のように綺麗な事から、この保健室に行く奴もなかなか少なくならないらしい。

「先生。孝之と俊は？」

「大丈夫。まだ寝てるよ。」

「いやそうじゃなくて、元気なのかってこと・・・」

「ああ、そっち。そっちも大丈夫よ。」

・・・信用してもいいのだろうか。この人のこんな所が少し心配なのは僕だけだろうか。また少し休むと、体調が戻ってきた感じがした。

「そんじゃ先生、もう良くなったんでもう戻りますよ。」

（戻ってもいいけど、わたし知らないよぉ）

「なんか言いました？」

「ううん。なんでも」

少なくとも僕は、あの先生の呟いた言葉をちゃんと聞いていたら、地獄に行かないですんでいたのをあとで後悔した。

「いよおゝ甲斐。必要以上に俺一人で頑張らせやがってよお・・・」

嵐の前の静けさ。そうとしか言いようが無かった。今笑顔で話している明彦なのだが、その本性は、堪忍袋を引きちぎったような勢いだろう。

「つで、なに？熱中症で倒れた3人の分までエイサーを踊った俺の努力は報われる事無く、おまけに、テントの片付けて・・・甲斐・・・お前も手伝え。嫌とは言わせん。」

「嫌、俺元病人だから、無茶させたらそれこそ本当の熱中症にかかるかもしれないだろ。」

「全然問題無えじゃん！つか、嫌とは言わせんと言った直後に嫌って言うな！」

本気で怒りの団長に逆らう事が出来ず、僕は成すがままに手伝いを始めた。ただ、疲れるだけの作業を黙々としただけだった。作業中、一度もあの2人の姿を見ることは無かった。

最後が充実しない・・・僕たちの最後の運動会の幕は降りた・・・

**最終運動会計画〱終幕（後書き）**

中途半端です

まことにすみません

## ミシシッピの独りパーティー（前書き）

この話で50話らしい。ので、  
それっぽいことを2話連続でやってみました。

## ミシシッピの独りパーティー

?? 『イエー！！皆さんこんにちは。ただいま午後2時より、ミシシッピの独りパーティーの時間だよ。どうぞよろしくお願いします。えー、このラジオは、この小説に対する過去に書かれた評価や感想をラジオのはがきやメッセージ風に返事をする、ってな感じのヤツです。では1つ感想を読んでからゲストを呼びたいと思います。では1つ目。古い順に読んでいこうね。』

ガンダマ さん。面白い、続きが読みたくなる

ミシ 『おお！ガンダマさんありがとう。やっぱりアレですね。自分のが読まれていてこんな風に言われると、嬉しくなりますねえ。』  
おっと、それではゲストの方をお呼びしたいと思います。この2人です。どうぞ！』

? 『どうも。【北斗】に出演している小橋川明彦こはしがわあきひこです。』

? 『えーと、同じく【北斗】に出演している大城孝之おおしろたかゆきです。』

ミシ 『えー、お二人さんはどのようにして、北斗軍団に入ったんですか?』

孝 『それはですね・・・』

明 『ちよつと待てい！その話は作者が前から書きたいとか言ってたから言わん方がいいでしょ。』

ミシ 『・・・作者はオレなんだけど・・・』

孝 『ん？なにか言いました?』

ミシ 『むかついたんで、次いきます。2枚目。』

タカシ さん。 甲斐久しぶりだな隆志だ久しぶりに読んだけどまあ見事にジョジョはいつてないか？まあこれから頑張れや（A、ノシ

ミシ 『タカシさんすみません。口の方が反対に出来ませんでした。』

明 『オレ知らねえっと。ていうかミシシッピさん。』

ミシ 『ん？なんだい』

明 『タカシさんって誰かな。なんか甲斐の知り合いっぽいけど』

孝 『それと、ジョジョが入ってるって言ってるけど、どおいうこと？』

ミシ 『・・・大人にはね、話せない事情があるんだよ。ちなみにジョジョは細かくは言えないけど、最初のほうにあるから自分で探してみてね。』

孝 『・・・逃げた・・・』

ミシ 『つ・ま・り！話すと長くなるの！そこは理解して！』

明 『中学生相手に逆ギレって大人気ないな・・・』

ミシ 『はい。次。』

ガラマンの風 さんから。 もっとひねりなさい

明、孝 『ダサっ』

ミシ 『ま、まあいいですよね。作者はベタなヤツが結構好きらしいから。そう思っていただけたら、こちらも嬉しいです。・・・のかな？』

孝 『中途半端はダメだよ。ミシシッピ』

明 『そうだよ。もっと自分に自信持てよ。アンタは普段から死んだ魚のような目をしちやってるから、友達からやや冷たい目で見られるんだろう。』

ミシ 『うつさい！オレの方が年上だから敬語くらい使え！ていうか、勝手にオレのプライベートを語るりゃあ！！』

明、孝 『あ、囁んだ』

ミシ 『・・・』

明 「・・・・・・・・・・」

孝 「・・・・・・・・・・」

ミシ 「はい！異常、ゲスト2人を交えてのトークでした。来週のゲストは、【北斗】の甲斐と俊をお呼びします。では、ミシッピの独りパーティーでした。バイバーイ」

孝 「ちよつと待つ・・・漢字が・・・」

明 「だっせー。間違つてや・・・」

「すっげつまんねーじゃん！このラジオ！聞いて損した。つーか聞かなきゃ良かった。なんで俺こんなの聞いてしまったんだ？！」

僕には怒りと哀しみしか込み上げてこなかった・・・

## ミシシッピの独りパーティー（前書き）

運動会編の最後がなぜあんなったのか・・・  
気になる人はどうぞお読みになって



## ミシシッピの独りパーティー

ミシ 『さーて今週もやって来ました ミシシッピの独りパーティー。今日は早速ゲストの方に登場してもらいましょう。どうぞ』

甲 『【北斗】の沙次田甲斐 と・・・』

俊 『屋比丘俊です。』

ミシ 『前のヤツと違って、今回はいい雰囲気が始まったな。この雰囲気のまま終われそうだと思う？』

甲、俊 『絶対無理だと思う』

ミシ 『・・・ダメだな北斗軍団は・・・話にならん』

甲 『一応聞こえてるんだけど・・・』

ミシ 『いいツツコミだ。罰としてこれ読んで。』

甲 『えっ、ま・・・わかったよ・・・』

アイツ さんより。 予想外デースへ どんどん続きかいちゃ  
って（＊ー、） -

俊 『・・・顔文字下手くそだな。ミシシッピって』

ミシ 『パソコンで書いてるからそりゃ難しいって。顔文字不自然になるって！先週聞いただろ？』

俊 『聞いたんだけど・・・ラジオの声だけで、どんな顔文字かとか、普通分かんって』

ミシ 『そうか！コレラジオだったな。すっかり忘れてた。』

甲 『その内、世間に見捨てられるぞ。』

ミシ 『オレそこまでひどくないわ！っーかお前ら。一言言っとくけど、一応人生においてオレの方が先輩だから。そこんとこわきまえてくれよ。いいか？』

甲、俊 『へいへい』

ミシ 『实际話してみたらむかつくヤツが多いな。北斗軍団っての

は。次のハガキ、俊読んで  
俊 『よし来たあー！』

S・Y さんからハガキ。      スごく面白い！！続きが読みたく  
なるような小説です！！

甲、俊 『・・・・・・・・・・』

ミシ 『なんだ？こっちなんか見て』

俊 『そんなにこの小説面白いのかなあ、って』

ミシ 『読者が1人でも面白いと思ったものは、大体が面白いモン  
なんだよ。知らなかっただろ？』

甲 『大体が面白い？ってことは、この小説自体微みよ・・・・・・・・』

ミシ 『シャラー プー！そんなこと言って読者が減ったら冗談  
にならないだろ。発言は結構控えてくれ。・・・疲れてきたから最後  
のハガキ』

サイコピサロ さん。      やばい面白い！孝之とかいうキャラが最

高（・A・）

俊 『あんたも懲りないね』

ミシ 『オレのせいじゃねーよ！性能の低いパソコンのせいだろ！』

甲 『いや、十分高いだろ。ところでさミシシッピ。前の運動会の  
話があつたろ？』

ミシ 『気がついたら呼び捨てかよ・・・・・・・・ああ。その話が？』

甲 『なんで最後のエイサーまでやらないで、妙な終わり方をした  
の？』

俊 『あ、それオレも気になってた。』

ミシ 『・・・・設定的には2007年の夏休みぐらいだな・・・・・・・・』

・・・・』

俊 『そうじゃなくて。なんであの終わり方？』

ミシ 『・・・・・・・・・・・・・・・・・・』

甲 『まさかとは思うが・・・【飽きた】なんて言わないでしょう？』

ミシ 『ギクッ』

俊 『ギクッって言ったぞ、この人。』

甲 『なんか図星っぽいぞ』

ミシ 『・・・だって・・・だって！運動会の話長く書きすぎてネタがいつぱい出てくるもんだから、早くそれを書きたくって・・・それで・・・漫画という打ち切りっぽく、終わったんです・・・』

甲 『お、おい。そこまで言わんでいいから早く止まれって。』

ミシ 『だって・・・だってーーーー！！ああああhげあおbご』

俊 『わぁー！母ちゃんの気が狂ったあ。』

甲 『お前ら何言ってただよ、ちきしょー！以上、ミシシッピの独りパーティーでした。また来週、会いましょう』

ミシ 『うわはははー！オレは独りじゃなあーい。皆がいるうjふぁhぐえjkふぁwhb・・・』

かなり疲れた。もう僕は二度と出ないことを決めた。

## ミシシッピの独りパーティー（後書き）

やっと、50羽を超えた!!!!!!

ネタと時期的にまだまだ続きそうですがよろしくお願いします。

休日、とにかく呼び出し（前書き）

久々の新章（？）なんで  
新鮮な感じがすごいした。

とりあえず、楽しく読んで下さい

## 休日、とにかく呼び出し

いや、一人暮らしとはいいいもんだ。

話すとても長くなる（ざっと2話分ほどの）が、ちょっと理由<sup>わけ</sup>があつてマンションの一室を使わせてもらっている。この大家さんが僕を引き取ってくれたおかげだ。とはいっても、ただ、一人だけで暮らしても退屈だからペットを飼うことにした。真っ黒い、綺麗な毛並みのネコだ。名前は（あまり大きな声では言えないが）、そのクールな外見から『ハイド』と名づけた。

「お前のおかげでわが家は寂しくないぞ。このヤロ」

そう言いながら、僕がハイドの首の下をなでている時だった。

「甲斐・・・お前ってこんな感じのキャラだっけ？」

「家にいるときだけだよ。こんなキヤ・・・ってアレ？」

なんで明彦たちがここにいるんだ？あまりの展開に僕はなでている手を止めた。

「ちよつと待った。ここに来るって全然聞いてないんだけど・・・」

「まあ、そう水臭いコト言うなって。どうせヒマだったんだろ？」

「お前らが来てからな」

僕は明彦の後ろにいる二人を見ながら言った。今日は思い切って休もうと思つたのに・・・というかだ。

「・・・で？そんなに用がないときは家には来るなと俺は言つたけど、どんな用？」

本題はそこだ。実際、滅多なことでは家には来ないし。

「あ、そうだった。これを見せに来たんだよ。」

俊がポケットから、一枚の紙を僕に渡した。手にとって見てみると、それは俊宛ての手紙だった。しかも、すでに開けられている。

「？ この手紙って誰から？」

「愛子から。しかも中読んだらお前につて。」

「なんで俺ん家じゃないんだよ！」

アイツは何を考えているのか、やっぱり分からない。とりあえず僕は、愛子の手紙を読むことにした。

なんていうーかな。

とにかく、大事な話があるんで『リンゴ公園』の男子トイレまで来てね

愛子

と、書いてあった。いろいろつつこみたいけど、めんどくさいんで一つだけつつこむことにした。

「・・・なんで男子トイレなんだよ」

「他にあるだろ。そういうトコロ。」

「まずなあ。リンゴ公園って、どこ？」

「なんでついて来るんだよ。俺一人行けばいいだろうが。」

「人聞きが悪いぞ。おれたちは場所を知らない甲斐のために、純粹に道案内をしているだけじゃん。」

「道案内をする人間は、間違ってもニヤニヤしないぞ。しかもこの大人数・・・」

北斗軍団どころが、南斗まで混じってる・・・大体、敵対してるんじゃないかったのか？

「お、着いたぞ。」

『リンゴ公園』に到着してみると、そこはなんの変哲のない、トイレの建物の上にリンゴがくつついてるだけの公園だった。パツと見ただけでは、アレがトイレと分かる人はなかなかいなさそうだ。

「あの野郎・・・人の休日潰しとして、俺をあのリンゴの中でボコボコにしようという発想があり得ん。つまらん用だったら、即

効で帰ってくるから。」

「イヤ。そういう用とは限らんぞ?」

全員が異様なまなざしで僕を見ていた。一体、あの中で何が起きているんだ?

「んじゃ、とにかく行つて来る」

僕は不気味な恐怖を持ちながら、リングの中へと入っていった。



休日、とにかく呼び出し（後書き）

いい忘れていた。

あけましておめでとうございします。  
ことしもよろしくおねがいます。

## 休日、とにかく呼び出し、後に逃亡

「まったく、電気ぐらいつけろよ。」

昼間とはいえ、トイレの中は暗くてさび付いた雰囲気をもっていた。正直、怖がりな僕には絶好な状況シチュエーションだった。僕は電気のスイッチを入れるが、電気は一向に使えなかった。あきらめた僕は、そのまま奥へ行った。外からの明かりでわずかに見えるが、トイレの個室が一つだけ閉まっていた。ますます嫌な雰囲気が出てきた。

「・・・絶対アレだよな」

僕は恐怖心を抑えて、個室の扉を開けた時だった。

ガシャーーン！！

「うおおああー！！！」

僕は足元をぶつけた『なにか』を確認した。手にとってよく見たらなんの変哲のない無い鉄パイプだった。多分、ドアにもたれていたパイプが、開けた時に落ちるように設置した感じだった。冷静になった僕は、再びドアを開けて個室を確認すると、ありえない光景が広がっていた。明らかに誰かが倒れているのだ。それを確認しようとした瞬間だった。トイレの電気が突然点いたのだ。そして、僕の目の前には何があったのか、血まみれになった藍里の姿があった。

「・・・・・・・・・・」

ワケが分からなかった。なんだって藍里がこんなことに・・・ていうか、なんで藍里がここに？

「どう、藍里。話は終わった？」

さらに展開が動いた。今度は普通ならそこにいるはずの愛子の声が聞こえてきた。僕はもう、なにがなんだが分からなくなってきた（いわゆるパニックだ）。僕がこの死体の処理に困っていた時だった。

「甲斐・・・あんた何してんのよ？」

「いや・・・あ・・・そこで藍里が死んでたんだよ。」

僕は少しずつ落ち着きながら、今の状況を語った。

「……じゃあ、それは？」

愛子の震える指の先を目で追うと、さっきの鉄パイプに、ベツトリと血がついていた。

「い、いや……これは……」

「いやぁー！ー！」

「どうした？。なにかあったのか？！」

外で待っていたアイツらが、今の悲鳴でトイレに入ってきた。トイレに入っただけで、僕はもう後戻りができない状況になってしまった。アレを見たメンバーの顔は、ひどく驚いていた。そして、こっちに顔を向けると、俊が冷静に静かに言った。

「……別に殺す事ないだろ」

「俺がなんの恨みがあつて殺すんだよ。しかも藍里つてよ」

「機嫌がわるかったとか……なんか気にいらなかった……とかよ」

「んなワケ無いだろうが。本気で俺がコレをやったと思うのか？」  
全員の冷たい視線が僕と、血にぬれた鉄パイプを交互に見ながら沈黙していた。しかも、隣にいる愛子に至ってはいつの間にか泣きじやくつていた。僕は目の前が真っ暗になったようだった。

パワー　ウーウーウー

「……パトカーの……だよな？」

サイレンの音で、南斗軍団の良も顔が青ざめてきたのがわかった。

「ど、どうする？コレ」

「知らねーよ！どうすんだよ瞬」

「オレに聞くなよ！ー！」

孝之と俊と南斗の俊がパニックつていた。良はもともと、筋が通った性格だからか、

「逃げるなよ。本当にやってないなら、ちゃんと話せよ。」

明彦に至っては、

「とりあえず落ち着け。オレは警察に絶対にチクツたりしないか

ら逃げる。証拠とかは全部隠しておくからよ。」

そして、ただ泣きじゃくってこっちを見る愛子。僕はもう考える  
余裕なんてなかった。

「ううおおー！！！」

僕はひとまず自分の家に逃げ帰ることにした。

休日、とにかく呼び出し、後に真実

「ま、マジで？」

隠れながら家に来てよかった。けど、信じられなかった。マンシヨンの前にはすでに警察が大家に聞き込みをしていた。とにかく。家には帰れなくなった。僕は冷静になって思い出してみた。

「……ここからは俊の家か……」

僕は、一番近い友達の家に行く作戦に出た。

「一体、どうなってやがる?!」

どういうわけか、俊の家の前にも警察がいた。

「いたぞ!あの少年を捕まえろ!」

長身の警察とほか数人が、駆けてきた。

(ヤバイ!!!!!!)

僕は全力で逃げ出した。多分、この様子だと他の軍団の家にもいる気がする。僕はアテもなく、ただ走り回っていた。

(なんでこんな目に合わなきゃ……ちつきしょう……)

僕は、ただ走り回っていた。

「もう、帰っていいころかな?」

僕の腕時計はもう8時を周っていた。あたりは、もうほとんど沈んでいた。今日のMステ、見逃したなあ……

「甲斐い……」

僕はドキッとした。僕は橋の下で人の少ない橋の下にいるから、ほぼ間違いなく僕以外はいるはずがない。それなのに、しかも僕の名前を呼ばれた。僕は恐る恐る後ろを振り返った。が、誰の姿も見当たらなかった。僕は首を戻して息をつく、僕の肩に、誰かの手が乗った。その手はとても冷たく、本当に人間の体温ではなかった。僕は全身に鳥肌が立ち、寒気が急激に襲い掛かった。僕は逃げるよ

うに距離をとって振り返ると、僕はさらに寒気がした。

「あ……藍里？」

僕は幽霊というのをはじめて見たが、ありえないほどはっきり見える。その幽霊は、うなり声を上げながら、僕にゆっくり、足を引きずりながら歩み寄ってきた。

「……お・おお俺は別に何もしてないんだぞ。なんでこうなるんだよー!!」

藍里が、ゆっくり足を引きずってくる。

「……悪かったから……俺が悪かったから本当許してくれー!」  
何故なのか分からないが、僕は謝った。実際、自分のせいではないのだが、僕は必死で謝った。少し沈黙が流れたときだった。

「……甲斐、本当にゴメンね」

「……は？」

藍里が申し訳なさそうに言った。僕は全然理解できない。

「いやー面白かった。まさか甲斐って、本当に怖がりだったんだな。」

「だろー？珍しいものが見れるって言ったじゃん。」

僕も珍しいものを見ている。楽しそうに北斗軍団と南斗軍団が、楽しそうに群れている。僕は何が起きたのか、未だ理解できていない。つまり……

「はつきり言おう。お前はずっと騙されていたんだよ。」

……

休日、とにかく呼び出し、後に真実（後書き）

書いて楽しい話です。

ていうかみんなのキャラ、ちょっと変わってる気が・・・

## 休日、とにかく呼び出し、後に決意

僕はそれを聞かれて、思考が停止した。まるでコンセントを抜いたように。

「・・・ごめん。頭回らないから、説明して欲しいんだけど・・・」

「いいぞ。どこから聞きたい？」

「とりあえず、いろいろとトリックは分かったんだ。けど、最初の血まみれのと警察のアレはどうした？」

「それって、半分以上分かってないじゃん。まあ・・・」

良が説明しようとする、機嫌のいい明彦が横から割ってきた。

「あの血はだな。化学部の使っている・・・ま、よく分かんが、何か変な特殊な液を赤く染めて作ってもらったんだ。どうだ？スゴいだろう？」

「・・・あの液大分掛かってたけど、あの色は洗濯でおちるのか？」

「おちるぞ。特殊だからな。」

「・・・なるほど。それで、警察はどうやって？」

「これは意外と苦労したな。実はアレって買ったもんだぜ。もちろん本物じゃないけど、それにかなり近いものをリサイクル屋で見つけたんだよな。ちなみに、お前を追いかけたヤツは、そこにいる伊鯨瞬だよ。」

全てが繋がった。なるほど。けど、もう一つ分からないのが。

「何故この企画をやるうと思った？」

「はつきり言う、アレだ。お前のビビった顔が見たかったからなあ。全員、その意見で賛成しちゃって・・・悪かったよ、ホント。」

明彦がそういうと、そろったメンバーが一斉に笑い出した。そんなに僕のこの顔が見たかったワケか・・・

(・・・殺してやる・・・)



僕の静かな殺意は誰にも感じ取れなかったようだ。近いうちに、僕が作った地獄に呼ぶことにしよう。

「お前ら……」

僕は小さく彼らを呼んだ。何かを感じ取ったのか、みんなの騒ぎは一瞬で止んだ。

「……死なない程度に殺してやるよ……」

僕は一言残すと、自分のマンションへゆっくり歩いて帰っていった。僕……いや、俺は決めた。

俺はアイツらを殺す復讐魔<sup>リベンジャー</sup>になってやる!!

「とりあえず、Mステ……途中からでも見なきゃな……」

まずはそこからだ。家に帰って、ゆっくり作戦でも練<sup>ね</sup>るとしよう。  
・  
・  
・

## 休日、とにかく呼び出し、後に準備

「おばさん、ただい・・・」

ゴシヤツ ひでぶ！！

忘れていた。ウチの大家にはこれは禁句だった・・・

「あ、甲斐。帰ってきたの。ただいま、は？」

「・・・ただいま優希さん」

「おかえり。ところで、昼間のはあんたと同じクラスの人ってね。後で甲斐に謝ってたけど。大変だったね。」

「ああ、かなり疲れた。もう寝るとするよ。」

「へえ。じゃ、おやすみ」

「じゃ。」

俺は2階の階段に上がって自分の部屋に向かうとき、後ろから

「それとね。Mステ録画してないからね。」

という声が聞こえた。（・・・わざとだな）。時計は9時12分を指していた。

「さて・・・っと」

部屋に戻って俺が一番最初にしたことは、電話の前に立つことだった。あいにく携帯はまだ持っていないから、家の電話でやるしかない。俺は復讐リベンジのための『材料』を少し集めることにした。

（性格上、アイツは自主的にあの計画には賛成ではなかっただろ  
うな。）

俺の勘が正しければ、アイツは協力してくれるはずだ。俺は、友達から聞いたアイツの電話番号をゆくり押ししていた。

トウルルルルル・・・ トウルルルル・・・ガチャ

『もしもし、三神です。』

きた！いいタイミングで出てきた！

「・・・藍里か？」

『……あのことまだ気にしてる？』

「たった数時間で忘れてくれるとでも？けど、少し協力して欲しい。そうしてくれたら、俺の『復讐』の相手にお前は選ばない。マジで約束する。」

『……わかった。協力って？』

「協力っていうか・質問しあつもんなんだけど。アレの首謀者しゅぼうしゃは誰だ？」

「確か……愛子と明彦が中心だった。」

「……ウソじゃないな？」

『ホントよ。ウソついたら後が怖いし。』

「わかった。ありがとう。じゃ、ゆつくり休めよ。」

ガチャ……

「なるほど。愛子と明彦か……」

ふざけたことをしてくれる……俺がどんな人間だったか忘れてるようだ。

「……そうだな。今回はあいつも手伝ってもらおう。」

俺はもう一度電話の前に立って、番号を押していった。

トゥルルルルル トゥルル・ガチャ

『はい。中江です。』

あいつだ！俺は今ツいてるぞ！

「大輝たいきか？俺だ。甲斐だ。ていうか分かるだろ。同じ小学校だったから。」

『今も同じ中学校だろ。今は違うクラスだけどな。っで。珍しいな。お前から電話って。なんか良い事があつたのか？』

「逆だよ。久々に酷くやられたからな。復讐に相応しいなにかスゴイ奇策はないか？なあ、俺に奇策のコツを教えてくれた師匠さん。」

『まあそうだけど……自分でやればいいだろ？』

「俺も最初そう思ったさ。けどよ。いろいろやってたら、俺がやった、ってバレルじゃん。だから、俺はそのバレないかつ、ヤバイ策が欲しいんだ。なんか、そんなヤツある？」

『・・・・・・・・ひとつだけあった。昔やろうと思ったけど、なんだかんだで時間がなくて出来なかったのがあるんだ。おれ達中学生だからもう出来ると思うけど。』

「なんだそれ。早く教えてくれよ。」

『わかった、教えるよ。長い話だから紙と鉛筆準備してくれ。・ひとつ条件があるんだけど大丈夫だよな？』

「楽勝だよ。ドンと来いだ。」

『条件は、だ。材料を色々買いに行くときだが、クラスの誰にも見られるなよ。特に、お前の言う『復讐』の相手にはな。』

「・・・・・・・・それはちよつと厳しいな・・」

『おいおいおい・・・・材料は怪しまれないからおれが買いに行くよ。・・じゃ、作戦の内容を言うから、お前の分かるようにメモしてくれ。材料をお前ん家に持ってきたときに細かい質問とか聞くよ。ここまでで問題は？』

「ない。続けて。」

『じゃあ言うぞ。おれがやろうとしたのはな・・・・・・・・・・』

『

9時33分。

『どうだ？面白そうだろ？』

「これはいいな。本当に小学生のときに考えたのかよ。」

『本当だよ。またなにか気になったら、来たときに聞いてくれ。じゃ。』

「わざわざありがとな。じゃ。」

ガチャツ・・

「持つべきものは友・・だな。・・・・フッフ・・ハハハハ・・..  
ア―ッハッハッハ―！」

笑いが止まらない！この大輝の策によって皆殺しにしてくれる！

「来週が楽しみだな・・・・・・・・」

俺はソファに座り、ハイドを撫でながら高笑いをしていた。

休日、とにかく呼び出し、後に準備（後書き）

この作者も書くのが楽しみになってきた。

## 仕返しの序曲

同時刻、甲斐が高笑いしている頃。

「いやーさつきは楽しかったな。あの甲斐の顔は傑作だったぜ！」  
よっぽど楽しかったのか、俊や愛子たちはさきほどの出来事について、まだ話題が盛り上がっていた。

「まったくだ。しかし、アレだな。録音して実際に鳴らしたパトカーの音って案外気付かないもんだな。コレって誰が考えたんだ？」

「俺だよ、俺。<sup>おれ</sup>」

「瞬か。結構やるじゃんか。」

「だろ？」

といったように、会話が弾んでいた。敵のはずである北斗軍団と南斗軍団がたった一人を陥<sup>おとし</sup>れただけなのに、すごいはしゃぎようだった。ただ一人を除いては・・・

「どうした、孝之。さつきから黙ってるけど大丈夫か。」

明彦が心配そうに話しかけた。二人以外はまだ話題に熱中していた。

「大丈夫。けど、今になって恐ろしくなってきたんだよな・・・」

「はっ？なにが？」

「アイツの事だよ。」

孝之は恐ろしいものを見たような表情で話し出した。

「ほら、覚えてる？昔、アイツに一度いたずらをしたとき、おれたちがしたときの5〜6倍近くのいたずらをかえしてきたのを・・・」

「・・・・・・・・」

思い出した。アレは去年くらいか。たしか、国語の時にアイツの教科書と知らない女子の教科書を摩り替えて、音読の時に気がついたアイツは、『話せない女子』ということから、本人に直接返さずに、俺の方に持ってきて一言、こうつぶやいた。

・・・思い知らせてやるよ。

そう言い残すと、アイツ・・・甲斐は俺に本を持たせて帰っていった。

「・・・そして翌日、その一日が悪夢だったんだよな・・・」

「・・・思い出したら、恐ろしくなってきた。」

この話を聞いていたのか、ここにいる全員が静かになっていた。

「なあ、アイツのしたいはずらってどんな事したんだ？」

良が興味が湧いたように聞いてきた。明彦は恐ろしそうに語りだした。

「そうだなあ・・・俺の上履きの中に、ポテトチップスの欠片がボンドでくっつけられたり、数学の教科書の数字が書いてある所だけ、マジックで塗りつぶしたり。とどめには、俺とネコ俊が付き合ってる、なんて最悪なデマながしたり、散々だったな・・・」

「ネコって言うな、ボケ。」

「・・・悲惨だな」

良が聞いて後悔をしていた。

「・・・ってことは、だ。オレ達の今回のいたずらに対しての、5倍近くの復讐って何をすると思う？」

「・・・」

完全に静まり返った。ただ、さっきまであったはずの暖かい空気が、一瞬にして失ったのは全員が確認できていた。

「分かん。けど、はつきり言えることは・・・」

「はつきり言えることは？」

「近いうちに仕返しをするだろう・・・ひょっとしたら明日には始まるかも・・・な」

「それはヤバイな。みんな、これから気をつけんとな。少なくとも、アイツの誘いには絶対に乗らない方が良いな・・・今日は遅いから帰ろう。」

「そうだな。じゃあな」

一同は不安を抱いて、家路に向かった。



## 仕返しの序曲（後書き）

同時連載中なんで、そちらの方もよろしくお願いします。

## リアル肝試し 戦の前の開会式

チャチャン チャン チャチャン

数日後、日曜日の朝に、ターミネーターの着信音が響いた。

「はい・・・もしもし・・・」

朝早いせいなのか（厳密に言うと、時間は正午近くをさしていた）、愛子はだるそうな声で電話に出た。見る限り、あまり意識はなさそうだ。

「え、藍里？珍しいね。こんな時間に・・・そう、もう昼なんだ。それで、話って？」

愛子はしばらく話を聞いていた。その内、愛子に笑みが出てきた。「ふうん・・・面白そう！それってどこで？」

愛子はその場所を聞いて驚いた。

「へっ？うそ！？あの『幽霊病院』！？」

時間は2時13分。一人を除いては全員が集まっていた。

「しかし、藍里も考えたね。ここでまた甲斐を驚かそうなんてね。でも、アイツ来るのかな？」

「大丈夫。甲斐には『来なかったら、学校で幽霊を信じているお子様だと言いつたから、絶対来てやる！』って言うてた。」

「・・・意外と恐いね。藍里は。」

「しかし、アレだな。おれは初めてこの事知らないけど、この『幽霊病院』ってさ、どんな場所？」

疑問に思った孝之が藍里に尋ねた。藍里は、おじいちゃんから聞いたという昔話を静かに語りだした。

それは、この沖縄が戦時中の頃の話

その当時は、当たり前のように戦争での負傷者も多かったという。そのため、医療道具も機器も満足にないまま、あちらこちらで小さな病院ができた。その中でこの病院には、道具も機器も十分にそろっていた。しかし、この病院に治療を受けに行った人たちが帰ってくることは無かった。

「なんで？道具とかも揃ってるのに人が死ぬのか？やっぱり、医療ミスとか、どうしても助けられない患者がいたとかか。」

「ううん。私もそう思ったけど違うみたい。あくまで噂だったんだけどね。」

当時のこの病院の院長が治療している患者が目の前で死んだ事から、気が狂ってしまい、病院の医師達や患者を持っていたメスで全員殺したらしい。

「・・・ってことは、この病院にいる幽霊って・・・」

「当時の院長なの」

孝之の顔から血の気が引いてくる様子がよく分かる。今の孝之にはさっきまでの元気はほとんど消えうせていた。

「といっても、私も初めて来るから単なる噂話とも思っけど・・・あ、きた。」

藍里の目線に目を向けると、この場所の主役が顔面蒼白で現れた。あいつ、沙次田甲斐が。

リアル肝試し〜戦の前の開会式（後書き）

超久々に投稿したぞー！

とりあえず2話書いたのでよろしく

## リアル肝試し〜ゲームスタート（前書き）

ここからちょっとホラーにしようと思死に製作中です。  
途中から飽きないで下さい

## リアル肝試しゲームスタート

「ご丁寧にたくさん呼んでくれたな・・・」

やっぱり気のせいではなかった。甲斐の話し方にいつもの覇気のようなものが全く感じられなかった。それに、どんなに顔を見ても、やっぱり顔面蒼白になっていた。しかも、少し声が震えてて、緊張してるのか、ポケットから手を出そうとしない。

「どうした愛子。俺の顔になんか付いてるのか？」

「いや、幽霊が憑いてそうな・・・」

「幽霊っていうな・・・オバケと呼べ。」

・・・相当同様してるな。これは。

「え？幽霊が怖いのか？」

挑発するような愛子の話し方・・・いつもなら全力で否定してやるが・・・今の僕にはこう言い返すしかなかった。

「・・・オバケの方がかわいく聞こえるだろ？」

・・・話を進めよう。こんな事を言ってる場合じゃない。

「・・・で？俺呼んだ用ってなに？さつさと話して終わろうぜ。」

「そつか。じゃ、今からルールを説明するよ。その前にちよっとくじ引いてみて。」

何か調子狂うな、コイツ。とりあえず僕たちは（僕はようやくポケットから手も出せて）、藍里の持っている穴の開いた箱から丸められた小さな紙を一枚ずつ取り出した。

「じゃ今から、紙に数字の書かれている順に一分ごとに中に入っていく。そして、病院の中の部屋の中に箱を置いてあるから、自分の数字の箱を持って帰って来て。分かった？」

「・・・つまり、俺は1番最初に入って一分後に2番の人が入るわけだな。俺は1番の箱を持って戻ってくる、ってことだな。」

「うん。そう・・・っへ？」

僕がそう聞くと、全員がビックリしたようだった。間違いなく、

僕が一番ビツクリしているのに・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

僕は一目散に病院に入ってしまった。院内に入るまでに、僕は一度も振り返る事は無かった。

「いやあ、アイツもツいてないな。まさか1番手ってキツいだろ。」

明彦が同情するように言った。

「けどオレ2番だしなあ・・・どうしよっかな・・・」  
俊がため息をついた、その瞬間だった。

「うああああああ!!」

「・・・甲斐？」

根拠は無い。ただ嫌な予感がした。

リアル肝試し〜ゲームスタート（後書き）

夏バテに気をつけてください



## リアル肝試し遭遇

現在2時半、

昼間の時間帯のはずなのに、どこか空が曇っているようだった。カラスが飛びまわったり、妙に風が強く吹き出しだしたりしていた。この雰囲気の良いくないことを、一同が気付いていた。

「・・・な、なあ、なんだ今の？明彦・・・」

それはオレも思っていた。けど、考えられることが一つしかなかった。

「・・・たぶん出たんじゃないのか？」

「出たって・・・ナニが？」

孝之がおそろおそろ聞き返してきたが、返事はしなかった。この病院の事を知っていればすぐに気付くだろうと思ったからだ。

「・・・ウソに決まってるだろ？なんで幽霊が出たって言い切れるんだよ！？」

予想通りの答え方だったが、オレだって完全に信じたわけじゃない。むしろ、信じられないくらいだ。

「オレだって信じたくない。けど、アイツが叫ぶってよっぽどの事が起きてるのは間違いないんだ。オレは中に入って調べてくる。」

「私も行くよ。なんか不安になってきた・・・」

全員が不安に駆られ、藍里を除いた一同が病院内に入ることを決めた。

「あいつは行かないのか？」

愛子に尋ねた。

「藍里って靈感があるみたいだから、中には入りたくないみたい。」

「そうか・・・」

とりあえずオレ達は病院の中に入っていった。中の様子は、錆びが目立って臭いが悪く、灯かりも無い、まさに出てきそうな場所だ

った。外も暗いから、灯りになりそうなものは、各自が持っている携帯電話ぐらいだった。

「・・・たたく、臭いったらないぜ。」

「仕方ないじゃん。戦時中の病院だったらいいし。それにしても、そういう時代にしては、結構立派な病院建てられたな。」

言われてみればそうだ。戦時中の病院のイメージって、テントで治療してるとか、広い小屋のような場所のような気がするが、ここは3階建てだ。今現在見たら、電気器具や道具とかがそろってないが、施設自体は、本当に立派なものだ。

コツツ・・・      コツツ・・・

奥のほうから足音が聞こえてきた。

「甲斐？ 甲斐か？」

オレは足音のする方に向かった。しかし、途中で違和感を感じた。

今の音は革靴の音だ。

アイツがどんな靴を履いてたか知らないが、間違いなく革靴のはずがない。一体誰なんだ？ 答えはすぐにやってきた。

「・・・な、なんだよ・・・これ・・・」

ライトを照らしたものは、着ている白衣と手に持ったメスに血が滲んだ、恐ろしいくらい前傾姿勢の男がいた。

## リアル肝試し〜遭遇（後書き）

随分久々（執筆のたびに思う）に投稿です。

ちなみにこの話で60話みたいです。この小説で頑張ってきた  
いです。

## CHRONICLE - 0 - プロローグ

「へえ、それは大変だったな」

「だろ？しかも2時間くらい追われたあげく、その白衣の幽霊を演じたのが甲斐だったんだよ。しかも監理と組んでやがった。」

現在、夏休みのあけた九月、

明彦は夏休みに起こったある事件を健に話していた。今でこそ怒りに満ちた声で話しているが、その時の明彦を含めた全員が本気で泣きそうだったという。健はそれを笑いながら聞いていた。

「・・・なあ、これ笑い話ではないんだが・・・それは知ってるよな？」

健は、机にうつ伏せになっていた。別に気分が悪いわけではない。単純に笑いをこらえているだけだった。

「いや・・・分かってはいるんだけど・・・笑てしまっただって。聞いただけじゃ、こんなの騙されるわけ無いじゃん。なのに見事にはめられて・・・普通おかしいって！アハハハハ！」

明彦は両手で顔を隠すように覆った。あの場所の雰囲気と、そろえられた計画と小道具で確かに本物と思っていたが、冷静に考えてみれば、いくらなんでも幽霊がメスを持っているわけが無いし、すぐにバレるはずだろうという以外に浅い内容だった。コレで騙され続けた明彦たちは実際に面白い。そう思われても仕方ないだろう。

「・・・それにしても、良く笑うようになったな。なんだかんだ学校、楽しんでるじゃん。」

明彦としては話題を変えたかったただけだったのだが、この質問に対して、以外にも真面目に答えた。

「そうだよな。けど、以前のおれならこんな事は無理だったと思うんだ。おれがこうしてられんのも、明彦たちのおかげかもな。」

「まあ気にすんなヨ。俺たちは当然の事・・・」

「ま、明彦自体なにもしてないけどな」

「今度俺と勝負してみるか？おい」

自分から話題に出してなんだけど、明彦なりに照れを隠していた。自分達のした行動が間違っていなかったようで嬉しかったのだろう。自己満足でも、当の本人が良い意味で変わっているのだから、自分達にとつて意味のあるものに感じた。

「・・・ああ、話変わるんだけど、なんで北斗軍団つてできたんだ？やっぱ何か理由があつて造られた組織だとか・・・」

・・・明彦は凍りついた・・・

「待った。今甲斐は居るか？」

「うん。あつちにいるけど、呼んで・・・」

「別に呼ばなくていい。場所を変えよう。」

図書館にて、

「移動の必要つてある？」

「アイツは自分が絡む昔の話がキライだから、本人の前で話せば俺たち二人の命が無いからな。」

明彦は少し遠い目で、窓を眺めた。静かな図書室という状況で健は緊張していた。

「ていうか、まず軍団ができるから順に話すよ。・・・いやー懐かしいな・・・俺たちが一年の、丁度この時期の話だな。まだ俺たち四人・・・いや俺と俊だけが普通に仲がよかった頃で、アイツが無口で無愛想な不良だったな・・・」

・・・そして、時は二年前に遡さかのぼっていく・・・



ちょうど一年の九月ごろ。ぶつちやけ沖縄は年中そんなに寒くはない場所だから基本的には暖かい、が、地元の間でも危険な時期はあるものだった。七月から九月、間違えたら十月の下旬あたりまで蒸し暑い日々を送らなければならない。

・・・細かい日付は忘れたが、珍しく蒸し暑くもなかった涼しい風が吹いていたあの日、確かにオレたちは初めてあった・・・

「げつ。体育館使われてんじゃん」

給食を食べ終わっての昼休み時間、やっぱり学生というのは遊ぶのが好きなんだろう。暑くても体を動かした方が人はたのしいものなだろう。

「まだ始まって十分しか経ってないのに、何だこの人の多さは！  
？ 俺たちこの時間暇にするのいやなんだけど・・・どうする明彦？」

「オレたちといつても二人だけなんだが・・・待てよ・・・俊！  
！思いついたぞ。」

「なんだ。いい場所とこ思いついたのか？」

「今日は涼しいし、屋上で寝ようぜ」

・・・俊はため息をついた。

「おお！結構涼しいもんだな。よく思いついたな」

・・・はつきりいつて、今日は動きたい気分ではなかったし、もとも今日はゆっくりしようと考えていたから、のんびり出来そう

で涼しそうな場所を考えてみたら、なんとなく屋上がでてきたのだ。けど、はつきり言うのも気が引けるから少しごまかすことにした。

「ま、オレにかかれば・・・」

「おい誰かいるぞ」

殴ってやろうかと思ったが、怒りを抑えながら俊の指の指す方を追った。男はフェンスに座り運動場を眺めるようにぼんやりしていた。変わった点があるとすれば、中学一年生が煙の出る棒を口にしている、という点だけだろう。

「・・・なんかアイツ、タバコ吸ってんだけど・・・アレ絶対ヤンキーだよな。」

俊は一度ドアを閉め、オレにこう言った。屋上に入らず、オレたちは一度会議をすることにした。なんとなく、バレないように小声で会話を交わした。

「ほぼ間違いないと思うが・・・なんかおかしくないか？」

「いや、おかしいって、なにが？」

「いや・・・なんかよく分からんだけど、異和感を感じるんだ・・・」

「意味がわからんだけど、つーか『違和感』だから。なんで感じ間違ってるんだよ。なんだ？お前の頭はナタデココで出来てるのか？」

「誰がナタデココだ！つーかお前も！『感じ』じゃなくて『漢字』だから。お前もう一回生まれ変われよ！」

気がついたら、なぜか言い争っていた。・・・原因は覚えていない。知らないうちに小声からただの口ゲンカのレベルの音量になっていた。

そんなときだった。

「・・・あんたらなにしてんの？」

フェンスの男に話し掛けられていた。オレたちはなにも言い返すことが出来ずに黙っていると、男は口を開いた。

「まあ立ち話もなんだから、そこで話そう。」



「・・・そこで・・・なにをしてたんか？」

・・・落ち着かない話し方で話し掛けてしまった。

「何って・・・タバコすってたんだが。ここ意外と誰も来ないからのんびりできる場所だったんだけど・・・結構珍しい事もあるもんだな。」

オレたちはお互いに初対面のはずである。にも関わらず、男は平然と会話をしてきた。何を話せばいいのか・・・

「やっと見つけたぜ、カイい！」

のどかな午後を破る声が屋上に響いた。屋上に八人の見かけない男たちが現れてきた。雰囲気は一気に悪くなつたのがすぐに分かった。

「これだけそろえれば、お前もすぐに殺せるぞ！大人しく死ね」

「・・・まだこりないんですか。見た目と比例して頭悪いんですね。先輩は」

確かに。仲間を連れた男は、今時あんまり見かけないリーゼントの髪型でサングラスと濃い外見をしていた。ぶち切れた男は仲間と一斉に襲い掛かってきた。

「今日こそ殺してやる！殺れ！！」

「やってみろよ、ザコが」

迎え撃つように、その男も大群の元へ駆けていった。

思えば、ここからかもしれない・・・まだあるはずもない名前と、メンバーの無い軍団が広げる物語のゼロからの始まりは・・・

CHRONICLE - 0 - 邂逅（後書き）

やっと書きたかった話を書けてるんで、むっちゃ嬉しいです。結構力入れて執筆しているんで、よろしく！

CHRONICLE - 0 - 『甲斐』（前書き）

超久々です!!!

書き方を大分変えてみました。これからちよくちよく投稿できるように務めたいと思います

正直言つて、1人对8人。どっちが有利なんて言うまでもないはずなのだが、決してそういうわけでもないようだ。カイがポケットに隠し持っていたペットボトルを取り出し、中に入った水をぶちまけて目を眩ませると、その一瞬で一人一発ずつ攻撃を入れて、全員を倒してしまった。しかも、彼の与えた一撃は、アゴ、金的、わき腹といった、ほとんど鍛え様のない部分だけを的確に狙っていた。

「……たく、初めて炭酸水を飲めると思っただのに」

・少し訂正。中に入った『炭酸水』、だった。あれで目潰しはヒドいな……

とか思っていると、カイがこちらに振り返り近付いてきた。後ろには八つの死体……。はつきり言つて、殺されると覚悟した。

「大丈夫か？」

「ま、まあ大丈夫……だな」

かなり意外な一言。この男は訳が分からない。煙草を吸つてたり、ちよつと変わった口調で、十秒ちよいでヤンキーたちを叩きのめしたり……。かといって、俺たちの心配。本当によく分かん。

「じゃ、いいか。大体こんな感じだから、もう俺には関わるなよ。一人のほうが好きだし。」

カイはそこまで言つと、屋上のドアに入り校内に戻って行った。

「なあ、カイってどんな奴？」

隣の席の友人にそう聞くと、友人は恐る恐る聞き返した。

「カイって・・・あの紗次田甲斐だよな？」

「多分ソイツかな？昼休みに屋上にいる・・・」

友人は席を寄せて、小声で話し掛けてた。

「アイツには関わるなって！アイツにろくな噂は無いぜ。この前だつて上級生数人を気絶させたらしいし。あんなのに関わったら命がいくつあつても足りないって。」

いろんな友人や先生に聞いてもこんな感じの話しか聞けなかった。つまりは、この学校においての彼のポジジョンは『大問題児』というのが一般的のようだ。彼の友達にも聞いてみようとしたが、基本的に人とほとんど関わろうとしないらしく、ほとんど友達もいないそうだ。

「学校になにしに来てんだか・・・」

独り言のように呟いたつもりだが疑問になった。友達がいらなら学校に来る必要は無いし、ケンカなら学校じゃなくてもできるし・・・ますます訳が分からなくなってきた。少なくとも、不登校ではないのは確かだ。

（明日、昼休みに聞いてみるか）

答えるとは思えないが、本人に聞くだけ聞いてみる事にした。

『翌日、昼休みにて』

「で？なんでオレも来る事になってんの？」

「しょうがないだろ。一応甲斐とまともに関わってるのって俺たちだけだし、・・・それにアイツ・・・」

「？ 明彦？」

「・・・じゃ、開けるぜ」

（もしかしたら・・・アイツ良い奴かもしれんし・・・）

屋上の扉を勢いよく開けて、俺たちは後悔した。昨日より遙かに多いヤンキーの群れに、その中に甲斐が囲まれたような図式になっていた。そんな光景を見て、（少なくとも）俺は何故かこう思っていた。

（ 給食、食べ過ぎなきゃよかったな・・・ ）

「んん？！なんだお前等は！！？」

こんな世界とはほど遠い俺たちはまともに喋る事も出来なかった。ヤンキーたちからの熱い視線・・・とても耐え切れなかった。その時、

「観客いる方が盛り上がるっしょ？」

甲斐の声だ。そう言った直後にいつの間にか手にした『なにか』を上へ軽く投げた。全員がそれに目をやった瞬間、2人がなぎ倒されていた。それとほぼ同時に、『なにか』が落下しながら炸裂した。

パン！ パパパン パン パパン！

それは爆竹<sup>はくちく</sup>だった。あまりの騒音に耳を塞ぐと、甲斐は読んでいたのか、手を使えないヤンキーたちを次々と倒していった。卑怯といえは卑怯だが、あまりに上手くいつてるせいかな、そういえなかった。気がつけばこれだけの間で、半分近くを地面に眠らせていた。

「さて。うるさくしちゃったし、先輩達も戻った方がいいんじゃないですか？教師が来ると思いますけど？戻らないなら・・・」

「甲斐！後ろ！」

俺が言ったときにはもう遅かった。甲斐に振り下ろされた金属バットが頭に直撃していた。つい数秒前まで暴れていた人間が一瞬に

して糸が切れたように倒れてしまった。

「やったぜー！ー！おい、この間にコイツを殺せ！今までの恨みを晴らしてしまえ」

動けないでいる甲斐に対し、各々は武器を振り下ろしたり、足で踏みつけたりしていた。放っておけば、死ぬのかもしれない。

「逃げようぜ明彦。これじゃ次は・・・」

俊の言う事が正しかった。このまま『観客』で居つづけると、ほぼ間違いなくこっちにも来るかもしれない・・・逃げるのは正しい。

そう、正しい・・・

間違つてなんか・・・

「オラアアア！」

俺が何をしたか？考えが出る前に気がつけばヤンキーの後頭部に思いつき蹴りをしていた。自分でも驚きだ。

「チキシヨー！やつちまった！俊！お前も手伝ってくれ。こんなつたらお前も共犯者だ」

「ふざけんなあ！なんでそうなるんだよおー！ー！」

「叫んでねえでさっさと手伝え！猫み<sup>ツラ</sup>たいな顔しやがって！」



「誰にネコニャーニャだ、ゴルrrrrrrア!!!!」  
「・・・なにキレてんだ、こいつ。・・・まあいいか」

何故そうなったのかはよく分からないが、俺たちは甲斐を助けに  
やけくそに暴れだした。

痛ってえ・・・

殴られたからではなく、全く使い慣れていない拳がごとごとく使われているからだ。喧嘩なんてほとんどしたことがないのだが、よりよっていきなりの殴り合いだ。緊張するしないでなく何も考えずに、手を、足を出し続けた。けど、それでどうにかなるもんだ。残る敵は4人。

「手間かけさせやがつって・・・クソガキが」

しかし、こっちの方がダメージが上なのが明らかだ。動くこともままならない。相手は待とうというそぶりすら見せず、こちらに近づいてきた。

「いや、俺たちはよく頑張ったよ・・・俊、お前逃げとけよ」

「・・・オレも動けないんだって。・・・へへ、イタチの最後っ屁ってヤツだ。」

「どこのカ○ロットだよ・・・」

それが俺たちの最後の会話に・・・

ならなかった！

「バカめ！」

ヤンキーの背後から、復活した甲斐が後頭部に肘打ちを強打させていた。残り三人。それにしても『バカめ!』って……悪役かよ・

「さて……と。あと一回でまとめて片付けるか……」

小声で言っていたが、その言葉は明らかに全員に届いていた。

「一対三で、どうやってオレたちと闘<sup>や</sup>るつもりだ？」

「……一人で、って言ったか？」

甲斐がヤンキーの後方に少しを目をやるとそこからは、

何もなかった。しかし、効果は十分にあった。ヤンキーたちが甲斐の視線を追い、一斉に振り返った。その瞬間、甲斐は敵に目がけて走りだしていた。気配に気づいたヤンキーが顔を戻すが、その時には遅かったようだ。

「あばよ!」

真ん中にいた奴は顎への頭突き、両隣にいた奴は顔面に綺麗にリアットが入っていた。直撃したのか、ヤンキーは反撃をせず、前のめりに倒れこんでしまった。甲斐は、全員が倒れていることをしつかり確認すると、

「ああ、疲れた!」

と言いながら、地面に座り込んだ。俺たち以上にケガをしているは

ずなのに、痛がる素振りをさほど見せないし、あの数を倒しきつたし……俺は自然に口にした。

「アイツ……人間じゃないな。」

「……ま、でもほとんどが汚い手を使って勝ったようなもんだけどな。」

「確かに。ていうか俊、起きてたんだ。」

卑怯といえは間違いなく卑怯だ。しかし、卑怯なだけでこの数を倒せるもんなのか？

考えた結果………さすがに無理かと。

「なあ、一つ聞いていいか？」

「別にいいけど。」

突然甲斐が話しかけてきた。割と普通に話しているところを見ると、もう回復したんだな。そこは置いといて、甲斐が不思議そうにこう尋ねてきた。

「途中から、何故巻き込まれにきたんだ？訳が分からん。」

その後、この屋上での一件は職員会議どころか警察沙汰になっていた。なんせ二十人近くの負傷者が出たんだ、当然といえば当然だろう。結局この事件は、『甲斐の正当防衛』ということで、あのヤンキーたちは一ヶ月の自宅謹慎、もしくは転校を命じられた。俺と俊は巻き込まれた形だから、おとがめなし、ってやつだ。後にこの事件は、生徒の間で呼ばれるようになった。

「それが『九月の暴動』ってやつ。聞いたことある？」

「耳にしたことあるけど、そんな事件だったんだ。」

それにしても、昔の話を他人にするって何か恥ずかしいな。甲斐じゃないけど、今ならしないだろうということを当時は迷う事無くしてたからなあ。

「・・・俺も青かったな」

「まだ十四歳じゃん・・・それよりさ」

「ん？」

「あの甲斐の質問。なんて答えた？」

健が不意打ちてきに話し掛けてきた。確か・・・・・・・・アレ？なんだったっけ・・・・・・・・？ええゝつと・・・・・・・・・・・・・・・・

「おかしいな。俺ははつきり覚えてるんだが？」

「いやいや、お前が覚えられてもこの話に感動ってやつが……」

俺は喋るのを止めた。まだ暑いはずなのに背後から妙に冷えた空気が流れ込む気配を感じた。恐る恐る、ゆっくり振り返ると話の張本人の甲斐が後ろから俺たちを覗き込んでいた。

「……い、いつから聞いてた？」

「そうだな……確か『げっ。体育館使われてんじゃん』って辺りから、かな？あんまり懐かしいから楽しくなってるさ……」

楽しいなら目を笑わせるよ、マジで怖いんですけど……ていうか、ほぼ最初から聞いてるよ、甲斐のヤツ。なんで俺気付かなかったんだろう……

「ま……そういうことだからさ。他言無用で頼む、な？」

「「は、はい……」」

俺たちは、ただ頷くしかなかった。その直後、俺たちはすぐに立ち上がって逃げだした（もちろん、全力疾走で）。スタートの遅れた甲斐は追いかけようとはせず、立ち止まったまま話し掛けてきた。

「あ！おいつ、待て！ジュースぐらいおごってくれたら機嫌直るかもよぉ？！」

「知るか、バカやろー！」

俺はそう言っ、振り向かずに走りつづけた。走りながら、一つの不安がよぎった。

明日が怖いなあ……

夕日を背に走り去る明彦の姿を見送って、僕は小さく呟いた。

「ちゃんと言えたじゃん。あのときの言葉・・・」

たまには昔話も悪くないかもしれない。ジュースはないが、機嫌が良くなってきたし夕日も綺麗だから今日はゆっくり帰ろうとかな・  
・

## 放課後にて（前書き）

久々にバカな内容いってみます。

いろいろパクリなものが入ってるので、ヒマのある人は調べてみては？



## 放課後にて

「甲斐ー、ちょっといいか？」

僕がなんとなく廊下を散歩中、俊が呼び止められた。後ろから急に呼ばれたから驚きを隠せる訳が無かった。

「つうわつ、びっくりしたあ・・・で、どうしたん？」

「明彦から伝言。一時間後の放課後に『第二次闇ナベ大戦』をやるから、それまでにきとうなモノ買って来い、ってさ。」

急すぎだろ・・・ろくなモン準備できないぞ・・・面倒くさいしてきとうにごまかして帰ろうと考えた時だった。

「ちなみに、来なかった団員には明日から『マジユニア』って呼ぶそうだが・・・」

「なにそのチョイス！？・・・分かったよ！行けばいいんだろが、チクシヨ・・・！！」

なんだ、このろくでもない罰ゲームは！？とりあえず『マジユニア』は嫌だから、買出し行ってこつ・・・僕はある気持ちで胸がいっぱいになった。

アイツを殺す！！

『放課後、教室にて、』

「その様子だと、みんな来たようだな。・・・団長はとても嬉しい。」

少なくとも、『マジユニア』さえなければみんな来なかった、と僕は思う。知っている人だと余計に嫌な呼び名だし・・・

「各自の材料をこのナベの中に突っ込んでくれ」

何処から準備したのか、持ち運びの可能な小さなガスコンロに、大家族向けの巨大なナベ。明らかにアンバランスな組み合わせなのだが、誰も何も言わなかった。ともかく、教室の電気を消して、真っ暗な闇を作り出して、コンロの火を頼りにそれぞれが『てきとうなモノ』をつつこんだ。できれば、前回みたいなムチャなものが無い事を祈るしかない・・・

「ルールは前回と一緒に。『熱い』とか『不味い』などの反応見せ<sup>リアクション</sup>たやつはアウト。大丈夫なら『もうまつしろ』もしくは『優勝しちゃったもんねー』で。新ルールについてだが、口を含む時には『せえーのでDIVE!』か『セメナキヤケナイ』のみ！今言ったものの以外の単語を口にしたヤツは強制アウトだ。以上!!」

明彦、ノリノリだな・・・つーか、やりたい放題すぎだつて。そんなにシマリがないとまたみんなにコソコソ笑われるぞ、オマエ。・・・あ、僕もやばいかも。

「順番は・・・下の名前のあいっえお順で。まずは・・・」  
「『明彦』」

わざとかと思えるボケで、明彦はこの大戦の先陣をきつてみせた。

部屋が暗くて様子は良く分からないが、多分表情は青ざめているのが目に浮かぶ。

「ま、マジかよ。……………せえーのでDIVE!」

思ったより早く明彦が箸をナベに伸ばしたようだ。明彦がそれを口にした瞬間、通常ナベで聞くはずの音が聞こえてきた。

バリッ      バリッボリボリボリ      バキッ

・…なんだ、この音は?…ていうか何食べたんだ、あいつ・  
・僕たちがこの音に気になっているうちに音が静かになっていき、  
飲み込んだらしく、ゴクツ、っという音が聞こえた。

「……………もう……………」

僕たちは驚愕した。得体の知れない謎のなんかを口にして大丈夫といえる団長が存在するのだ。言い切れば、あんたは漢<sup>おとこ</sup>だ。僕たちはただ静かに次の言葉を待った。

「……………もう……………」

声色としては、少し苦しそうだがちよつと余裕がありそうだ。多分、皆期待しているはずだ。言え、言うんだ。団長、明彦。

「……………もう……………ムリ」

．．．．ん？

その一言の直後だった。明彦は口から多量の吐血．．．．ではなく、いわゆる　口を床にぶちまけた。大惨事この上ない。

「おい、床掃除するから急いで電気点ける！」

孝之に電気を点けてもらうと、もつとありえない光景を目にした。嘔吐されたものではなく、ナベの中に何故かガンプラが入っていることに。よく見ると頭部パーツが見当たらない。

．．．．まさか

「明彦．．．ガンプラの頭を．．食っ．．．」

あまりの恐怖に、僕の口はそれ以上開かれなかった。ていうか明彦．．．

「分からなかったといえ、無理に食べる必要は無かったと思うが．．．」

こうして、『第二次闇ナベ大戦』は最低なオチを迎え終了した。

明彦　アウト　食べたもの　ガンプラ（機体名サザビー）

大会成績

大会中止

## ヤツの恋人疑惑／甲斐の場合

ある日の昼休み時間、北斗軍団は男子トイレでの会議だった。しかし、そんな場所に関わらず会議には確かな熱が存在した。

何故そうなったのか・・・その理由は、甲斐の持つ一枚の紙からだった・・・

「・・・なんかさ、最近暇じゃね？」

開口一番、明彦がとんでも発言を口にした。明彦は真剣に話しているが、他のメンバー（特に甲斐）にとってもやる気が感じられなかった。

「いや、暇なのはいつもだと思うけど・・・」

「孝之、お前は分かってない。俺たち個人じゃなくて『北斗軍団の活動』がなくて暇だ。ってことなんだよ。これがどう状況かわかってるだろ？」

「いいことじゃないか。平和である事は良い証だよ。おれたちはおれたちで楽しんどきやいいんだよ。な、俊？」

「オレも本当にそう思う。」

「甲斐、お前はどうかんだ？」

余りの反対ぶりに、若干涙目の明彦が甲斐に弱々しく尋ねたが、甲斐は答える素振りをみせないどころか、窓の外を遠い目で眺めていた。

「・・・甲斐？」

孝之が話し掛けてきて、意識を取り戻したようだ。甲斐は視線を明彦たちにもどすと、静かに口を開きだした。

「いや・・・なんか、お前らが喜びそうな・・・そんな感じの・・・えっと・・・話題だが・・・」

よほど話しづらいのか、周りを見渡しながら途切れ途切れで甲斐が言葉を発していった。話し終わると、胸ポケットから一枚のかなり折り曲げられた紙を取り出して、投げ捨てるように明彦に渡した。その紙を孝之が広げると、一言零れ落ちた。

「・・・え？」

明彦からは何かの文字の列のようなものしか見えていなかった。気になった団長は孝之から紙を取り上げて、紙を目にした。

「・・・え？」

明彦が紙を目にしたまま凍りついた。気になった俊は団長から紙を取り上げ（略）

「・・・え？」

甲斐以外の団員が凍りついた。とりあえず甲斐は（略）

「一応、そこに書いてある文章は本当・・・」

「ちよつと来い・・・」

全て言い切る前に、甲斐は三人がかりで男子トイレまで連れ去られた。

『個室にて』

「アレはなんなんだ？説明しろ」

「いや、見たまんまじゃん！説明って・・・」

「そうじゃない。お前から見て、アレはどう見えた！？お前の意見聞きたい！」

約二分間。甲斐はしばらく言い留まっていたが、決意したように口を開いた。

「・・・後輩からの・・・ラブレター・・・っぽい・・・」

テンパリ過ぎた結果、結局小声と奇妙な話し方で甲斐はそう言った。



## ヤツの恋人疑惑 序盤

「で？その娘の名前は？」

何これ？新手の拷問？とにかく、話の内容が内容だから団員に無理を言つて屋上に移動してもらつた。

「手紙には栗原麻奈<sup>くりはら まな</sup>つてかいてあつたんだけど・・・俺知らないんだよね」

「栗原？・・・ああ！！」

俊がひとり言を呟くと、何か思い出したように叫んだ。ビックリさせんなよ。先に反応したのは明彦だった。

「知つてるのか？」

「思い出した。女子バレー部の後輩だったな。」

俊の部活・・・の後輩。

「ていうか俊つて、部活入つてたんだ。何部？」

「男子バレー部だよ！たしかに今更説明するの嫌だけど！！」

「ふーん、一応交流はあるんだ。んで、どんなヤツ？」

なんで僕こんなに冷静に尋ねてるんだろ。凄え。

「なんちゅーか・・・全然大人しい子、大声は出さないやつって感じかな。バレーかなり上手いんだけど、コミュニケーションってヤツが苦手そうなんだよな。」

「よくそんなとこまで見てるな。・・・発情期か？」

「違えよ！まあ、女バレの中では何気に人気高い方かな？」

しかし、考えれば考えるほど分らない。なぜ僕はこの栗原という後輩に目をつけられたのか・・・僕なにかしたのか？だとしたら、あつちからの・・・

(・・・ん？)

ある可能性が生まれた。

「・・・その栗原って、普段はメガネかけてる？」

「ああ、そうそう。かけてるかけてる。最近変わったみたいだけど。」

「・・・その栗原って、普段笑うときにややこらえ気味の栗原？」

「というより、口を開けて笑わないってタイプかな。」

ああ・・・間違いない。確定だ。

「世の中って狭いんだな。」

「もしかして・・・」

さすが孝之。もう感づいたのか・・・

「お前やっぱり知ってたのか」

明彦に突っ込まれた。さすがに気付くよな。今になって後悔がぶり返してきた。

「知ってるっていうか・・・つきしょう！！アレがまさかフラグになるなんて！」

「何があつたんだ？」

団員たちが顔を寄せてくる。実際話しづらいから助かるのだが、ムサイんだよ、この空間。

「案外長くなるけどいいか？」

団員は黙って首を縦に振った。

「あれは確か……4日前の買い出しの時だったな。」

「材料は……こんな感じか」

その当時の夕飯は、なぜか鍋になった。あんな光景見て嫌な時つてのに……しかし、僕にはある楽しみがあつた。それは……

「B・Zのベスト、『ULTRA Pleasure』、やつと見つかったわ」

歌の一つでも歌いたい気分だ！そんな喜びに満ち溢れているときだった。

「いいから、いいから！」

声のほうに目をやると、二、三人の酔っ払いに誰かが絡まれている。酔っ払いが出るには大分早い時間だろ。普段なら無視しているところだが、機嫌が悪くなったのもあるが、絡まれているのが同い年くらいの女子という、世も末的な光景に耐えられなかった。

そこから、僕にも意外な行動に走っていた。

材料の大根を手にして、それで酔っ払いを殴ったのだ。

「え？」

偽りなしの、全くの本音。思わず声に出ていた。周囲が呆然としているスキに、

「に、逃げよう！」

白い凶器と知らない女の手を掴んで、とにかくこの場を後にした。

## ヤツの恋人疑惑／回想中

「ふう、ここまで来ればいいだろ」

そろそろ日も暮れてきて、夜になろうとしていた。自宅のマンションの前まで来たのはよかったが、どうも入りづらかった。殴った拍子に材料の大根は真っ二つだし、今夜は鍋だし、知らない女子を連れてきたり……

……ん？知らない女子？

握られた左手の先をゆっくり目で追っていくと、先程の女子がいる。そのまま連れてきちゃったらしい……

「……あのう……あなたは？」

少なくとも誘拐犯ではないと言いたい、なんて言って信じるかな？……すげ微妙……しかも、なんか睨まれてるし。

「……別に気にしないでいいから。忘れてくれると助かるんだが……」

「……じゃ、名前だけでもいいですか？顔がよく見えないもので……」

忘れる気無いじゃん、この人。

「よく見えない……？メガネかなんかつけてる？」

「はい……でも逃げてる途中で落としたみたいで……」

なるほど。睨まれてるんじゃないくて、目を細めて見てたのか。つか、原因僕じゃん。メガネを探しに行こうにも、もう時間も遅いし、あるいは誰かが踏んで壊したか拾ったとかありそうだし・・・

「コンタクトは？」

「ありません。」

マジかよ・・・仕方ない。あのコースしかないな。

「・・・よし、新しいの買おう」

「え？でも・・・」

「俺は自分がモヤモヤすんのが嫌いなだけだから！心配したいなら自分の家の帰り道でも心配しろ！！」

言い過ぎたのかどうかはよく知らないが、僕は視界の弱いこの女子を連れて専門店まで向かった。

「・・・速く選んでくれ。頼む・・・」

すでに時間は八時を過ぎていた。もうかなりの時間オーバー（材料方から持ちっぱなしだが大丈夫かな？）。僕も無事じゃすまない気がしてきた。

「・・・待ってください。もう少し」

「これで四回目なんだが・・・」

「もうすこ・・・あります。」

三十分かった末、青いフレームの小さなメガネに決定されたよ

うだ。本当に長かった……女子がメガネをかけたままこちらを見ると、まさかの

「……どこかで会いました？」

という、時代を感じさせる殺し文句が口に出てきた。

「……知ら・ね。さつさと……いいから……ふ……そのメガネ買って……帰……らせて。」

笑うのを我慢するのがこれ程苦痛とは……違う意味で顔見て話せなかった。僕はメガネを取って購入しに行った。

「ひどい……出費だった」

わざわざベストアルバムを新品で買って、自費で材料を買って、あげくに知らない他人のメガネを買う。なぜこうなったんだろう……おまけに……

「本当にありがとうございます。家まで送ってもらえるなんて……」

あんな光景見て、一人で帰らせる奴っているのだろうか。それとも僕が変わってるのか？……すごいどうでもいい……

「名前、やっぱり教えてもらってもいいですか？……あ、私、栗原って言います。」

卑怯な自己紹介しやがって・・・名乗らんとダメみたいじゃないか。僕は諦めて名乗る事にした。

「・・・紗次田。別にそうそう会う訳じゃないから、こんなでいいよな？」

「はい。・・・あ、家が見えてきたので、ここまでで。本当ありがとうございます！」

栗原という女子は丁寧にお辞儀をすると、そのまま家の方まで走っていった。途中、振り返って、控えめな笑顔で手を振ってきた。無視する訳にもいかなないので、僕も軽く手を振り返し、振り返って自宅に帰ることにした。

「嫌だなあ・・・」

自分の一時間後の姿をいろいろ考えて、僕は深くため息を吐いた。  
・・・



## ヤツの恋人疑惑〜中盤

「……ということがあったんだ……」

し、視線が痛い……

「テメーエ！どこのマンガの世界の話だ、コノヤロー」

明彦がそう言うのも分かる。当事者が未だにこの状況を夢だと思ってるし。しかし、こんな僕以上に明彦は、涙を撒き散らしながら僕に殴りかかろうとしていたが、孝之たちの制止でどうにか少し落ち着けた。

「俺だつて……女の子と付き合いてえよ……」

やっぱり原因はそれか。ていうかまだ付き合っていないんだが。

「とりあえず。俺はどうした方がいいと思う？」

そう、本題はここだ。僕はこのような経験は全く無かったため、一人でどうこうできる自信が無かった。ところが……

「いや、だから俺彼女いないんだつて。」

「オレも。」

……しまったあ！明彦と俊にもいなかったあ！！……だが諦めるにはまだ早い。

「孝之、キミの意見を聞こう。」

孝之は腕を組んでしばらく考えていた。わずか数秒で思いついたのか、孝之は顔を上げてこう言った。

「とにかく話は聞くべきだと思う。逃げたらダメだ。」

・・・やっぱりダメか・・・

「相手の本音はちゃんと聞いた方がいいよ。自分の思いを全部ぶつけてくるはずだから、考えて返事はした方がいいと思うよ。一応、片思いも立派な恋だし。」

「・・・なるほど、分かった。」

正直、言っていることが分かったような、分からなかったような・・・最後の辺りの名言っぽい発言にちょっとイラッとしたが、抑える事にした。

「たしか・・・放課後だったから、まだ時間はあるな。しばらく考えとくとするよ。」

僕はとりあえず個室から離れ、教室に戻る事にした。その間、ある決意で僕の胸中は固まっていた。それは・・・

（男らしく・・・断ろう・・・）

## ヤツの恋人疑惑　終盤直前

時が経つのは早い・・・今は既に放課後。俺の気持ちも知らずに、屋上のフェンスから野球部たちは声出し合いながら練習をしている。野球部は熱いのに風が妙に冷たく感じた。

「・・・明彦見てみるよ」

「ん？　野球部がどうした？」

「・・・人がゴミのようだ」

「・・・冷静じゃないな」

「当たり前だ！」

これから告白されるって分かってて、緊張しない男っているのか？まあ、作者はそんな経験が無いからなんとも言えないが・・・とにかく！僕には一大事なんだ。

「つーか、なんで俺もここに？」

「一人でできないもん・・・相当しんどいもん」

どう思われようと、僕はどうでもいいから誰かにいて欲しかった。それは事実。

「・・・明彦・・・歌ってもらってもいい？」

「えっ、なんで」

「頼む」

「・・・・・・・・ゆゝめえゝじゃあないいアあれもコあれもおゝ、その手でドアおお開あけましようウオウ！」

「・・・・・・・・やっぱナシで」

声は良いのに、歌い方が・・・むしろ、声が若干似ててムカツク。この状況での選曲もうちよい考えてくれよ。確かに、zは好きだけど、今はタイミング違うって！

「・・・は」

「は？」

「腹が痛い。やっぱ明日に・・・」

「それだけは止める！」

明彦の声から冗談の色が消えた。というより、僕の一言で怒りがわいたらしく、肩をガツチりつかまれた。

「お前が何しようとして別にいいが、俺の前で情けないことだけは許さん。今逃げたらあの娘を裏切ることになる。お前が逃げたいなら勝手にすればいいが、その時はお前を殴らせてもらう。」

この言葉が、さっきまでウル　ラソウルを歌ってた人と同じなのか？けど、確かにここで逃げたら男がすたるところか、裏切ることにもなるからな。よし、決めた。話を全て聞こう・・・明彦のおかげで目が覚めた気がする。

「臆病なお前に団長命令だ。逃げるな、たてやかえ！」

噛むんじゃねえーーーーー！！  
でも大分落ち着けた気がする。

（明彦・・・あながとな）

「ん、なんか言った？」

「・・・いや別に・・・」

一回で聞けよ、恥ずかしいじゃん・・・けど、調子に乗せてもアレだから言わない方がいいかも。っと。

「もうそろそろ時間だ。適当に隠れててくれ。見てろよ、俺は逃げん。」

「もちろんだ。逃げたら脱退だから」

ハードル高くなってるね？とにかく、明彦はそこに倒れている古いロッカーに入り込んでいった。入る直前、臭っ、って聞こえた気がしたが、今集中することにした。覚悟はできた・・・いつでも来い！

そして、屋上の扉が開かれた・・・

## ヤツの恋人疑惑〜終盤直前（後書き）

明けましておめでとございます。

この小説、全然まだ続きますが、よろしくおねがいします。  
（できれば飽きないで）

## ヤツの恋人疑惑〜終盤

汚いロッカーに入ったな、サビの匂いかなりひどい。俺の不満も次の光景で消え去った。ロッカーの穴から、甲斐と栗原氏の姿を確認できた。

（来た！）

叫びそうなテンションを小声でこらえた。

「すみません。少し遅れました。」

素直に謝る栗原氏。それでいて申し訳なさそうにうつむく顔。・・・普通に可愛いぞ。どうする、甲斐？しかし、アイツは

「いややや、べべちゅに気にしてないかりや」

「・・・本当にすみません。」

・・・緊張の塊と化していた。戦えない体になるの早っ！ていうか栗原氏、甲斐の緊張に気付いてないし。客観的に観て、顔を合わせずに謝る女子と緊張で上を見ている友人。自分が何を目にしてるのか、分からなくなってきた。先に気付いたのは甲斐だった。彼女が見てない隙に深呼吸を2、3回行っていた。

（なに？何がしたいんだ、この二人は）

精一杯のツツコミ。正直、この光景は全然ツツコミにくい。ある

意味立ち会いたくない現場だ。

「それで栗原・・さん。一応聞くけど・・・・・話って？」

甲斐の一言が、約450文字目にしてやっとまともな会話が始まった。後輩でも、女子を呼び捨て出来ないのは甲斐らしかった。栗原氏は下を向いたままポツリと話した。

「甲斐先輩、好きな人っています？」

ド真ん中直球が、甲斐の一番弱いコースを着いた。甲斐は703のダメージを負ったようだ。

「・・・・ん？」

顔には出さないが、口元がかすかに震え、目が必死で犬掻きをしていた。激しく動揺しているのがバレバレだった。その証拠に、今聞こえてないフリをやったのけた。

「ですから、甲斐せ」

「ストップ!・・・・その前になんで俺の名前を?教えた覚え全く無いんだけど・・・」

無理矢理場の空気変えたよ、コイツ・・

「えと、友達とか俊先輩から色々話を聞きましたので。でも、いい噂が聞こえなかったんですけど」

「へ、へえ。俊も言ってたんだ。・・・なんて？」

「昔はヤンキーだったとか、面倒臭いやつだったとか・・」



多分、情報のほとんど俊だよな？後輩そんな情報多分知るわけないし……

「でも、私、違うと思うんです。」

違う……？

……！！

まさか栗原氏は

「本当は先輩、凄い良い人だと思うんです。」

あんまり知られてないけど、本当なんだよな。事実、人一倍良いヤツだが、当のアイツは、それを『ただ甘いだけ』と言っている。だから、どんなにいい事しても、気がつけばてきとうな誰かがした事にして隠れている。そのことはあまり教師にも知られてない。

まあ平たく言えば、感謝に慣れてない、ということ。

「私を助けた時の、見返りも求める事もなくただ助けた先輩が本当の先輩なんだと思います。だから、私はそんな先輩が」

その続きを言わせないためか、甲斐が栗原氏の両肩に手を置いた。覚悟を決めたか！？

「栗原さん。俺はな……」

声に震えが無かった。いつもの落ち着いた甲斐がしゃべっていた。

（イエス か、ノー か。）

少しの沈黙を置き、甲斐は顔を上げた。自然に締まった顔つきで

アイツは口を開いた。

## ヤツの恋人疑惑ゝ決着

「俺、立体に興味が無いんだ。」

「・・・・・・え？」

・・・・・・はっ！???

「言い方を変えよう。俺は二次元が大好きなんだ。」

「二次元ってあの・・・・」

「うん。アニメとか、漫画のアレ。」

何言っちゃってんのアイツ！？冗談だよな??それにしても甲斐は凄い真顔だし。ていうか知らなかった。アイツがそんな趣味だったとは・・・・

「マジメに聞いてくれ。」

（あんな話の後で聞けるか！）

小声でツツコンでみるが、うなずいていた栗原氏は顔を上げ、また顔を真っ直ぐ見た。

「俺を良い奴だと言ってたけど、それは大間違い。俺は自分の利益が有るときだけ動く、オタクな奴だ。」

認めたよ、コイツ。でもこの言い回し、なんか嫌な予感がする・・

「でも私を助け・・・」

「アレは気まぐれ。助けられたと思ったなら、それは気のせいだ

よ。」

面倒臭そうに頭を掻きながら説明する甲斐。

「いいか？俺みたいなカバ野郎より良い奴なんて、世界中の車の数ほどいるんだ。少なくとも、俺はアウト。ていうか、お前ほどの奴を無視する男がそういないんだよ。」

「先輩は無視するんですか？」

不覚にも俺はときめいてしまった。あんな笑顔でそう言われたらそうなるのでは？アイツもそうらしく、面と向かって言われ、顔を赤くしてコツチを見ていた。いや、俺に助けを求められても・・・

「・・・残念だけど、俺はあえてする。全然釣り合って無いし、まだ互いを全く知らない。なにより、立体の造型には飽きてるからな。」

なぜ立体の話に戻る。しかも途中から声が高くなって、テンパってるのがバレバレ。ひどい・・・

「・・・分かりました。」

え、なにが？

「先輩がそこまで言うのでしたら、諦めますね。話を聞いてもらってありがとうございます。」

軽くお辞儀をして、屋上の扉に走り去っていった。栗原氏が扉を開けると、

「栗原！」

甲斐が呼び止めた。ここから見えないが、扉が閉まる音が聞こえない様子だと、そこにまだいるらしい。甲斐は恥ずかしそうに鼻の頭を掻きながら、小さく言った。周囲の音は静まり、ただ風が流れていた。

「・・・やっぱ、友達からってことでいい？三次元にもちよつと興味が湧いたから・・・」

「・・・はい！」

栗原氏の明るい声が返ってきた。甲斐がゆっくり手を振ると、扉の閉まる音が低く響いた。しばらくして、俺はサビ臭いロッカーから急いで出てきて、甲斐に尋ねた。

「お前、本当に二次元・・・」

恐る恐る聞くと、自信満々にコイツは答えた。

「いや、まさかだろ。」

やっぱり冗談だったか・・・安心したような残念なような・・・

## ヤツの恋人疑惑〜後日

あれから翌日。

「ハハハハハッハハッハハッハアハハハハッハハ！いや、二次元は無いわ〜」

笑いすぎだろ、俊。腹抱えてまで面白いなんて、どうしても思えないんだけど。まあ、現実でそう言うヤツがいたら確かに面白いではあるが・・・とりあえず・・・

ガッ

「痛っ！急に殴るなよ！」

「限度つてもものがあるだろ？これ以上は肅正という名分でボコボ

・・・

「はいはい、了解デス」

分かればよろしい。

「でも、同じ断り方にしても、もっとマシなのなかった？」

孝之・・・それ言わないで。でも、理由聞いたら納得するかな？

「・・・あ、あの時の俺の中では、重くもなく軽すぎでもなく、明るい雰囲気で断るにはアレが最適だったんだ。えっと、なんか・・・分かる？」

孝之はしばらく腕を組んで、口を開いた。

「・・・いや、普通に断つても良かったと思うけど」

「それじゃ見てくれる人が楽しめないだろ！やるなら裏をかくのが一番だと・・・」

「そんな現場余計誰も見ないから。」

「・・・一理ある。」

はあつ、と溜息が自然に出てきた。今冷静に考えてみると

「俺、他に好きなヤツがいるから」

「君にこと知らないから、友達からでも」

「興味ないね」

「うっせーバァーカ！」

「バカめ、どんな男かも見切れんのか・・・」

ダメだ。僕の頭ではこんなのが浮かべない。ひどい脳内だ・・・特に最後の、どこのベジ・・・

「あ、麻奈だ」

マナ？俊が向いた廊下を目で追っていくと、そこに栗原が恥ずかしそうにうつむきながら、廊下の窓辺にもたれていた。

「多分俊じゃないのか？バレー部キャプテンに用があるらしいぞ。」

「どう見てもお前だろ。・・・とりあえずオレも行くから行くぞ。」

「かたじけない俊・・・」

ホント、助かった・・・僕と俊は廊下で待つ栗原に赴いた。

「ど、どうかした？」

途中、緊張で声が裏返ってしまった。が、栗原は気にせず（もしくは気づいてないか・・・まあどうでもいいけど）話し掛けてきた。

「やっぱり先輩、昨日のウソなんですね。私がここにいるだけ来るなんて。」

「・・・・・・・・・・あっちゃー、謀られた。どう言い訳すれば僕は助かるんだ？」

「けど大丈夫ですよ。他に好きな人がいたら、私かいませんから。」

「・・・・・・・・・・は？」

今、この人はなんと？

「今、他に・・・なんて？」

「ですから、他に好きな人がいるからあんな断ったんですよね？」

なんで？なんでそんな話に突入していくんだ？

「そうなの？」

「オレに聞くなよ！知るワケねえーだろ！」

だよな。少なくとも、そういう理由で断ったつもりは全く無い。



「ちよつと甲斐？なにしてんのアンタ？」

お、愛子。なんか懐かしいな。

「ちよつど良かった。今ちよつとワケ分かんなくてさ、俺・・・」

「なによその子！もしかして・・・」

「待て！多分お前の想像の半分しか当たってないぞ！」

愛子はこつちを睨みつけると、文字通り、廊下を真っ直ぐやってきた。弾丸みたいに・・・必要は無いはずだが、逃げようとしたが、その間もなく捕まってしまった。

「しばらく目を離れた隙に、アンタってヤツは・・・！」

「でででででっ！耳をつねるな、半端なく死ぬ！マジ死ぬ！！」

「うっさい！耳でも切って、芳一になれ！」

僕は本気で痛いんだ。なのに、俊と栗原はその様子を笑いながら眺めていた。こつちは冗談じゃないんだよ！

「おいしいいいい、助けるおおー！」

「バカめ、どういう技かも見切れんのか。」

俊テメエ・・・見切ってるから助け呼んでんだろうが！いつまでも笑うな！

結局、誤解が解けたのはそれから十五分後のことだった。

ヤツの恋人疑惑〜後日（後書き）

次回より、長編的な話に入りたいと思いつす！  
では

序章　話の始まりにしてはかなり分かりづらいが、ギリギリ伝わりそうだからき

・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・ここは？

ただ真つ暗で何も見えない、と思いきや、自分の手足から姿はし  
っかり見える。妙な状況に入り込んだもんだ。とりあえず周りを見  
渡してみるが、何があるわけでも無く、闇が広がっているだけだっ  
た。

「それにしてもなんだこの状況は？ 気味悪い所に来たなあ」

「待っていたぞ、少年よ。」

不意に寒気がした。後ろから得体の知れない低い声が聞こえてき  
た。振り返って正体を確認するが、そのような姿はどこにもなかつ  
た。

「おい、こっちだ。」

視線を下に向けた。声の正体は

新品のように綺麗に整った、クマのぬいぐるみだった。まさかあ  
の声が、この愛らしい見た目のぬいぐるみから発せられたのか？

「あの・・・・・・・・どちら様で？」

「貴様が来るのを待ち望んでいたぞ。遅かったじゃないか。」

え、無視？<sup>シカト</sup>それほどの質問じゃないと思うが・・・

「どうやってここに来たのか．．まあ、そんなことはどうでもいい。私の呼びかけにお前が応じた。まずはそれだけでも良しとしよう。」

話が全然見えねえ．．．誰か僕の代わりにここに来てくれないか、300円あげるから。

「紹介が遅れたな。俺の名はワン。王と書いてワンだ。よろしくな」

声と顔と名前が一つも一致しないんだが．．しかも、さっきからコレは、ぬいぐるみが口を開けて話す訳でなく、本体から声が出ているような感覚で喋るから、会話が妙に難しい．．

「えっと、ワン、だっけ？俺はどうしてこっちに居るか教えてくれないか？全然訳が分からないんだが」

「何、理解してなかったのか？いいだろう。ずばり君は．．．」

どうでもいいが、全部の二人称が完全にバラバラだけど．．．少年、貴様、お前、君。いまいちまとまらない奴だな、コイツは。

「ズバリ！MEの正体は！御主が集めた、七つの金のキヨロちゃんの化身だ。七つ集めた褒美に．．」

「願いを一つ叶える、てきなヤツ？」

「そう。物分りの早くて助かる。」

よく聞いたら、一人称すらバラバラだ。なんて安定感のない化身なんだ。

「ていうか黙って聞いてたらあんた、七つそろえて願いを叶えるって設定、ちゃんと考えて言ってるだろうな？半歩間違えたら大問題だぞ」

「なに！？既にどこかでパクられていたのか！！？」

「お前だよお前！めんどくせーなコイツ！！」

なんかハラハラするな、このクマ。ある意味心臓に悪いキャラだ。

「さあYOUの願いを言ってみろ。可能な限り叶えてやるっ。」

基準がさっぱり分からん。コイツの場合、どっから不可能なんだ？

「遠慮なく言ってみろよ。さあ！さあ！！さあ！！！！」

ワン、うぜえ。微妙に急かせる辺りがかなりうざい。しかも、テンションが上がって、若干口調も変わってるし。

「とりあえず俺をここから・・・」

出せ、と言おうとしたら、ワンの後ろから光が差し込んできた。突然何が起きて・・・

「ふっ、そうか。あなたには無いのか。謙虚な人だな。」

ワンの体は宙に浮き出し、光の方へ後退しだした。いや、話し聞いてた？

「聞け！俺は・・・」

「何も言わなくて良い。てめえの言いたいことは分かっているつもりさ。けど、その言葉はその時の為にとっておけ。人間は、おめえ

が思ってるほど弱くないからな。」

「ワン……」

光に溶ける寸前、さよならを告げるように手を振り、最後に言った。

「甲斐、またな……」

「また出る予定あんのか!？」

「わっ!びつくりした」

隣で驚く愛子の声で目を開けたら、なにかの中にいた。シートに座ってるこの感じ、そうだ

「そういえばこれから修学旅行だっけ?まだ飛んでいない様子だけど、これから離陸テイクオフするみたいな?離陸するときに手を前に出すと勝手に落ちてくって言うアレ、すごい楽しみなんだよなあ。」

「甲斐……外、見てごらん」

沈んだ声に促され窓を覗くと、

「………雪?」

「今着いたの。」

僕は、自分自身に対する怒りで、あるサイヤの王子のように飛行機内で叫んだ。

「クソツツタレ——————!!!!!!」

ああ、車内事故・・・

すでに周知の通りかも知れないが、沖縄県には雪は降らない。例えるなら、ベロを人のこめかみに刺せる殺し屋が実在するくらいありえない、と思う。

しかし、大昔に一度降ったとか降ってないとかあやふやな話があったから、そうも言い切れない。少し確率が上がっても、せいぜい20奪三振の偉業と並ぶくらいだと思う。

つまり、何が言いたいかというと、沖縄から初めて海を越えた人間にとって、雪とはある意味テレビの向こうの未知な世界そのものということである。

「でもアイススケート場はあるんだよな。でも雪と氷じゃ違うな」  
「やべえ、あの中に飛び込みてえ」

まだ移動中のバスの中、外を眺める人、友達と話をする人、寝ている人と、いろんな光景が広がっていた。  
ちなみに

「どうする 団員共？降りるなら今のうちだが？」  
「アホか。お前と孝之の数字足しても、負ける気がしないな」  
「弱い犬ほど吠えるって言うけど、見事に実践してるな」  
「女だてらに強いとこ見せなきゃね」

三人の視線が交わった。

「『『せえーの！』』」

明彦 J

俊 8

孝之 2

愛子 Q

「やった初の一位！」

「くっそ！俺の八連勝があー！」

「まさか流れ持ってかれたかあ？」

「ていうかいつまでこのゲームやんの！？そんなに楽しくない上に、おれ一回も勝ってないし！」

四人はインディアンポーカーで白熱していた。

「途中から思ったんだが、この流れでなんで甲斐と愛子の立ち位置が？」

「良い質問だ俊。アレ見てくれ」

明彦は後ろの座席に振り返り、妙な空きのある座席を指した。その一番後ろの席には、孤独の甲斐が両手を前に出したまま、静止していた。

「・・・・・・なにあれ？」

「余程飛行機の重力体験したかったんだな」

「ある意味おれより運が無いかも・・・・・・」

「しっ！何か言ってるわよ」

一点を見たまま甲斐の口が、音の入っていない映像のようにパクパク上下していた。

四人は会話を止め、その声に耳を傾けた。



「あれは・・・彗星かな？いや、彗星はもっとう・・・バアツと・・・」

四人は絶句した。

「えっと・・・本当に何アレ？」

「愛子・・・あれは詳しくは言えないが、あるニュータイプと同じシヨック症状だよ」

「孝之、読者に分かりやすくカーユって言った方が速いって。」

「俊！孝之の努力を無駄にするな！」

「いや、彗星はもっとう・・・バアツと・・・」

恐ろしくカオスな会話・・・

「そうだ！アイツのカーユ化を阻止した人はどうする？」

「どうするって、何が？」

明彦はニヤツと笑みを浮かべた。

「誰がニヤツ、だゴrrrrルア！！」

「凄い巻き舌だけど、誰も言っただけで無いぞ。聞こえてもナレーシヨンか、作者の声だよ。」

うつさいバカ。運が無いってだけで簡単にキャラが立つ訳無いだろ。

「誰がバカ野郎だ、おい！これでも立派なステータスだぞ！誇りだぞ！」

「落ち着け孝之。何で上見てキレてんだよ」

言い過ぎた。悪い・

「とにかくだ。お前らが何を騒いでるか知らんが、ナレーションの暴言なんかほっとけ。進行上、一応いないと困るし」

明彦は一つ咳を吐いて言った。

「あれ？ナレーションっておま・声聞こえ」

明彦、無視だ無視。

「ルールは簡単だ。アイツの飛行機で止まった時を、見事飛ばしたら勝ち。そんだけ」

「最後のは別に上手くないな」

「私も」

「おれも思った。」

どうにかごまかしきれたが、思わぬ不評を浴び、

「俺は取り返しの・・・取り返しの付かないことをしてしまっ  
た・・・」

彼もニュータイプになってしまった。

「明彦おおー！」

果たして三人は、二人の哀戦士を救出できるのか？

まさかの後半に続く！

## ああ、車内事故・・・2

「でも誰から行くんだ。あんな気まずいのオレは行きたくないんだが・・・」

「確かに。あれを打破出来る明彦ぐらいなのにていつか明彦の仕事なのに。肝心の団長はこれだし」

愛子は二人の隙を見て席を立ち上がるが、

「おい待て」

逃走に失敗した。

「だって怖いのに！アレはキツイって、伝染するって！」

「確かに荷は重いが、そこは耐えてくれ。オレたちがやるしかないんだ、なあ孝之？」

「・・・実はおれも凄い逃げたかった」

両者が睨む。

「と、とにかく！いい加減動かないと話が進まなくて、読者が逃げてくぞ」

「逃げる程読者がいる訳では無いと思う。」

違いないが黙ってやってくれ。

「よし二手に分かれよう。俊とおれでクソ団長をどうにかする。愛子はアッチを」

「もつとこう・・・バアツと・・・」

「・・・絶体アツチが重いと思う」

孝之が軽く手招きして、愛子の耳を寄せた。

「お前甲斐に気があるんだろ？大分前のおれと同じ顔だから。」

「ああ、オレも途中から気付いた。気付いてないの本人くらいだぜ。」

「どんだけバレバレなのよ！」

だから話進めろよ。ただでさえしょうもない話してんの・・・

「よし！各自健闘を祈る！散！！」

「おーい明彦お、戻って来おい」

確認。ここはバスの中だから大した動きはほとんど無い。愛子は最後尾の座席まで移動し、二つ隣の席に座った。

「おーい甲斐、無事？」

「いや彗星はもつとこう・・・」

変化無し。ていうか、どうやって元に戻すとかあるのかこの状況？

「もしもーし？ちょっと大丈夫？」

相変わらず口は閉じない。そもそも対処法があるのか分からない  
(作者含め) 愛子は戸惑いを隠せなかった。

「おーい、飛行機はもう降りたぞー。熊本だぞお」

「そんな大人、修正してやる！」

突如前の空席に右の正拳を繰り出した。

「多分悪化してるよね？」

「考えたら、どうやって直すんだコレ？」

「オレもさっきから気になってた。叩けばどうにかなりそうだけど、すでにひび割れてるから怖いんだよな。」

「うん。始めて15分後のジェンガだよね？かなりギリギリだよ  
ね？」

「・・・フラフラしたっていいじゃないかよ」

二人は瞬時に明彦に向いた。

「今、喋った？」

「今なら大丈夫かも？明彦」

「とりかえしの・・・」

まるで気のせいだったように元に戻った。

「・・・そうか、B・Zだ。今明彦が言ったフレーズは歌詞なんだ。どっかで聞いたと思ったわけだ。」

「てことは俊。B・Zを歌ってたら復活すると？」

二人は頭を抱えた。その原因は

「オレB・Zそんなに知らないんだが、知ってる？」

「おれもそんなには・・・」

根本的な趣味の違いだった。それ以前に、バス中で歌い出すこと自体にためらいがあった。

「・・・B、Z以外で探そう。これでは明らかに武器の相性を間違えている。」

「おれもそう思う。他の装備を探そう」

二人は団長と向かいあいながら、再び策を練った。

ああ、車内事故・・・完

「あの、ちょっと・・・私にどうしろっていつのよ・・・」

「彗星はもつとこう・・・」

愛子は腕を組んで考えるだけだった。進展の無い展開に、正直うんざりしていた。

「ううっ・・・周りは遊んだり寝たりで、自由にしてるってのに・・・何が悲しくて私はこの廃人の救出をしなければ・・・」

愛子はシートから顔を覗き込ませ、俊たちの様子を少し伺った。が、二人の顔がうずくまり、文字通り頭を抱えていた。あまりに絶望的な状況に、愛子はうつすら涙を浮かべた。

「ちょっと！これじゃ攻略法ないみたいじゃない！三話もこんなしょうもない話してるのに、何で変化の一つも見当たらないの！？別の意味で悲しくなってきたんですけど・・・誰か教えてちょうだい・・・」

「これだ！」

「ん？どうした孝之？」

俊が顔を起こすと、隣の孝之はケータイを見て歓喜していた。

「明彦と甲斐はニュータイプ的な錯乱をしているだろ？だから、

実際そんなサイト見てあのシーンの後のセリフが何かでやってみようと思つて・・・」

「それは助かるが孝之・・・」

俊は言葉を詰まらせた。

「ん、どうした」

「いや、その、な・・・それって著作け」

「俊。言いたいことは分かる」

孝之は俊の肩に、ポンツと手を置いた。

「多分大丈夫だよ」

「この人多分つて言つてるんだけど。この人汗かいてるんだけど」

「ええい、ままよ！！ この軟弱者！！」

孝之は俊の手を取り、握り拳を作らせてそれを明彦の顔面目掛けて殴らせた。

バキッ

「いやー、やるな俊は。でもさすがに顔はまずくないか？」

「ちよつと待て！なにオレが殴つたみたい空気作つてんだコラア

ア！意外にしたたかな小細工がましてんじゃねえぞテメエ！！」

「いや、でも戦いに犠牲はつきものつて言うし」

「オレを巻き込んだだけだろうが！」

「うるさいな。何騒いでるんだ？」

横から明彦が割り込んできた。



「お前がうるさいんだよ！明彦は黙って……って」

「アレ？もしかして復活してる？」

「いやぁ寝てたからよく覚えてないが、気が付けばこんなんでさ・  
・・どうかしたのか？」

右の鼻から流血している明彦が神妙な顔つきげ尋ねてきた。しかしどうなっているのか、殴られた箇所も赤くなっているにも関わらず、それに対しての発言は全く出てこない。

「あ、あ……明彦……鼻……鼻が……」

「……ハナ？ああ鼻水か！コレくらいどうって……  
……血？」

明彦は凍りついた。

「……ええ……と？寝ている間オレは一体？？」

「あ、明彦は休んどけよ。ヘタに動いたら血が止まらんだろ？テ  
イッシュ渡すから、それでも詰めて上向いて休んどけよ。ていうか  
さっさと寝ろ。」

「お、おお？なんか知らんがありがとな」

明彦が目を閉じるのを確認すると、二人は最後部の座席に席を移した。

「しゅ……しゅ……ん！孝之い！助かったよおお！私、もう駄目か  
と思っただんだよおお……！！」

愛子も相当追い詰められたらしく、ほとんど涙目になって二人に助けを求めた。

「先生！早く、早く甲斐を助けてください！！」

「落ち着いて下さい！我々も全力を尽くしますので」

「なんでノリが医療ドラマ？」

俊は握り拳を作り、右拳に一つ息を吹きかけた。そして、

「宇宙天地 与我力量 降伏群魔 迎来曙光 吾人左手 所封百  
鬼 尊我号令……」

「ちょ、俊！？何唱えてんの！？」

「多分アニメ版の地獄先生つばい経文だと思う……」

「無に還れ！！」

俊の振った右拳は、見事に甲斐の無防備な側頭部に直撃した。瞬間、甲斐の目の色が、元の若干死に掛け気味の色に戻った。

「おお！甲斐が元に戻った！！」

「やった！」

「これで一件落着、て感じかな？」

「……おい」

甲斐が静かに一言溢した。

「……今俺を殴ったのは誰だ？」

除々に顔を上げ、全員を見つめた甲斐の顔は無表情、だが、確かな怒りの色があふれ出していた。

「誰・な・ん・だ？」

二人は甲斐から目を逸らしつつ、俊に視線を向けた。

「え？ちょ．．．マジで？マジで言ってるの？」

「心配するなって、俺もそこまで鬼じゃない。一応お前にも選ばせてやるって」

俊は安堵のため息を吐いた。

その刹那、

「火葬と土葬、どっちがいい？」

甲斐はシートから立ち上がり、数えるように指を折り始めた。  
俊から血の気が引いていくのは、自身にも理解できた。

「ま、待つて、話し合おう。まだ墓予約すらしてないからそういう話はまだ早いからやめた方がいい．．．」

「大丈夫だつて。俺が立派なもの造つてやるから．．．」

「そんな殺生な．．．」

ウボアアアア．．．．．

湯煙の勇者たち（前書き）

またも下らない話です・・・  
付き合ってやって下さい・・・

## 湯煙の勇者たち

「いやー極楽だ、極楽」

「温泉なんて、おれ初めてだよ」

「まったくだ。しかもここ露天だからな。非の打ち所が見当たらない」

あの後、明彦たちは初温泉に浸かり、ご満悦に感想を述べていた。

「でも俊にはさすがに悪いことしたなあ。結局旅館来ても温泉どころか、川に浸かりかねない勢いで連れて行っちゃったし」

「・・・ゴメン甲斐、ほとんど笑えないんだが。ほとんど事実なだけに」

「いやホント、反省してるって」

確かに甲斐にはやりすぎた事実はあるが、実際目覚ましにグーパーンをされては、誰だって気分悪くなるに決まってる。ていうか、自分の良くなるヤツを募集したいもんだ。

「甲斐を弁護する訳じゃないけど、向こう側、いや向こう川にいるけど、一応うなされてたから、大目に見ても良いと思うよ。逆に、よく我慢できたな、みたいな」

「一理あるが、それ以上にオレの後処理を評価してもいんじゃないか!?」

実を言うなら、俊の負傷が表立ち、旅行の中止を危ぶまれたが、明彦の話術により最悪の事態だけは避けられたらしい。

「まったく、世話を焼かせる団長だぜ、バカ野郎」

「おい、今のセリフそっくりそのまま投げ返すぞバカ野郎。」

「嫌だバカ野郎。あ、そうだ。俺はあのサウナに入ってくる。」

甲斐は湯から揚げると、小屋よりも小さいだろうサウナ室に真っ直ぐ歩いて行った。

「冒険家だな。オレは自主的に行くとは思わないな」

「だから、反省してるんだって。口にするのが恥ずかしいんだよ」  
「孝之・・・」

明彦は孝之の肩に手を置いた。

「アイツ、さっきただ漏れてたんだが」

「え、マジ？」

「おお、懐かしいな」

北斗二人の浸かる辺りに、背の高い男とやや目付きの悪い男が入ってきた。

「お、お前は・・・ヤンキー君とノツポちゃん??」

「殺すぞお前!!」

怒りのあまり立ち上がる二人。

「冗談だよ。だからさ・・・ほら・・・おま・・・とりあえずタオ  
ル取れてるぞ」

二人はあらわにされたフルーッポンチを、恥ずかしがって手で覆

わず、冷静に座り、湯に戻った。

「・・・お前やっぱ名前忘れてるだろ？そつなんだろ？」

「・・・・・・・・いやっ、まさか」

「おれは覚えてるよ。明彦風に言つと、ヤンキー君が良で、ノッポちゃんが瞬、でしょ？」

「合つてるけど、全然釈然としねえ・・・」

「で？南斗ナントカ以来の登場のお前らがなんか用か？」

「嫌なとこ覚えてんじゃねーよ！ま、とにかく集まってくれ」

瞬は言葉にしづらいのか、さっきと比べて小さな声で言った。

「これより、旅行イベントのお約束として、女子風呂を覗きに行こうと思う。間違えば修学旅行は中止になりかねない。しかし、それでもロマンを求める勇者がいるなら、親指を立てたサインをくれ。」

無論、良は親指を立てた拳を瞬に表示するが、当然と言つべきか、あとの二人は表情も動きもないまま、黙っていた。

「ま、無理にとは言わな・・・」

「待てよ瞬。これが答えだ」

明彦が水中から出したのは、親指の立てられた握り拳だった。

「いい返事が聞けて嬉しい。行くぞ同士よ」

「任せる同士よ。そういう訳だ、孝之もど・・・」

「あ、おれパス」

「そ、そうか・・・」

そして三銃士の、楽園を目指す旅が始まった。



## 湯煙の勇者たち 完

「で？具体的なプランはあるのか？」

明彦は瞬に尋ねる。すると、瞬は誇らしげに腕を組んで笑う。

「……無いな」

なんとも頼りない返事を堂々と返してきた。良もそれは初耳だったらしく、呆れたように口を開けていた。

「ちよつと待て。何も考えてないのか？」

「当たり前さ！プランなんてのは、その場しのぎで考えてこそ面白いものなのさ」

「なぜか言い訳にしか聞こえないんだが・・」

「奇遇だな、俺も似たようなこと思ってた」

「とにかくだ！」

瞬は無理矢理さえぎるように、大声をあげる。

「さいわい、ここは露天風呂タイプの温泉だ。だから、楽園への扉はひとつじゃない。分かるな？」

「ああ」

「つまりだ。方法はいくらでもある、ということさ。そういうわけだ、これから作戦プランを考える。」

「どうでもいいが、作戦とプランって微妙に似てないか？」

神妙な顔で瞬が二人に手招きをする。話の内容が内容なだけに、大ぴらに言えないから二人は小声で話せる範囲で近づく。

「さて。何かないか。みんなの案を聞きたい。」

「そう言われてもすぐに出てこねーだろ」

「いや、一つ考えていたんだが」

明彦が拳手をする。

「俺の作戦としてはな。まず瞬があつちの正面から堂々と入る。すると当然、クラスの女子の意識はお前に集中する。その隙に俺と良がその仕切りから覗く、というものだがどうだ？」

おおつ、と良が声をうならせる隣で瞬は不満そうに明彦を見つめる。

「ちょっと待て。なんでオレがそんな汚れ役をしなきゃならない？」

「汚れ役だなんてそんな。戦争映画のキャラで言うなら、家族のために必死で生き残ろうと努力するが、最終的に敵に撃たれて未練たつぷりに死んでしまうような立ち位置だろ。その何が不満なんだ？」

「不満タラタラなんだよ！ていうか明彦の例え話が妙に具体的すぎて、すごくいやなんだけど」

話の流れとして、明彦の提案が却下される。が、そのすぐ後、良が静かに手を挙げる。

「このまま奇策を考えても時間が過ぎるだけだ。ここはオーソドックスに外から覗こう。この仕切りから覗いた所でバレない方がおかしい。」

「なるほど、一里あるな」

「いや、普通だろ」

基本的な方針としては決まった。二人は暖かな湯船から立ち上がり、風呂場をあとにしようとした矢先、

「待て」

途端に良が呼び止める。

「おそらく、女子もその展開を予想しているかもしれない。慎重に行かないでどうする？」

「っと。確かにな」

「安全確保のために、瞬はその仕切りから顔を出してニヤニヤしてくれ。それで瞬が女子を攪乱させている隙におれたちは裏からその様を眺めて・・・」

「て、待てやっ！」

瞬は裏から逃げようとした良の肩を勢いよくつかまえる。

「よく聞いたらさつきとそんなに変わらん立ち位置をオレに任せないか？」

「そんなにじゃない。全然、だ」

「ぶっ殺してえ・・・」

「そうよ。遠慮なくぶっ殺しちなさいよ」

「言われなくてもやってや・・・」

・・・

瞬は硬直した。自分に殺意を促した相手が全く不明確だったことに気がついた。当然、対象である良が言うはずがなく、明彦のいる方向とは違う場所からの声だった。それに気付いたらしく、二人も

呑気な笑顔が崩れていく。

「・・・なあ。今のつてさ」

「ああ。やっぱりそう思うか？」

「いやいや、そんなまさかな」

「よし。じゃあ、『せーの』で声のした方を見よう。それではつきりするはず。」

明彦の提案に二人がうなずく。どう考えてもいやな予感しかしない。しかし、それでも三人はやるしかなかった。

「いくぞ・・・・・・・・・・・・・・・・せーのっ！」

三人は一斉に仕切りに目を向けた。そして、徐々に視線を上げていく。目に入ったのは、

「くたばれ！」

異様に泡のたつた洗面器の湯水を放った愛子の修羅の形相だった。湯気だっているなぞの水が三人の見開いた目に直撃する。

「ぎ、ぎゃーーーーーーー！」

「こ、この！眼球の奥まで刺されたみたいな感覚は！まさか！」

「シャンプーじゃねえかぁー！」

仕切りの上から悶える三人を覗き込んでいる愛子はピースサインを向けて一言言い放つ。

「正義は勝つ」

## 湯煙の勇者（裏）

「あつちい」

沖縄なんて年中暑いかわかい場所にずっと無縁だったから、サウナに入るなんて生まれて初めてだ。感想はというと、以上の通り。ひねりのない感想で申し訳ない・・・

強いて表現するならそうだな、ふたを閉められて蒸しられている中華料理の気分だ。きっと肉まんもマーボーも、こんな気分を幾度となく味わってきたのだろうか・・・なんてかわいそうな中華料理たち、お前たちの痛みを今俺は一身に受けているんだ。なにも悲しくない、俺ももうすぐ・・・

「・・・何考えてんだか」

完全に暑さにやられてるらしい。自分が何を考えているのかあんまりよく分からない。なんなんだよ、中華料理の気持ちって。悪いかよ、上手い感想が言えなくて。でも、コレは黙って座ってるだけでも結構なにかの鍛錬になってしまうから案外キツイ。ましてや初サウナ。暑い以外の感想をコメントするのが酷な話だって。

「そもそも、サウナに入った男の話を好き好んで見るやつなんているのか？この調子じゃダラダラとこの一話が終わっちゃうぞ。それも基本的に全部一人言とモノローグ。どんだけやる気がないのか、この作品の作者は。」

おっと、これ以上の愚痴は危険だ。口を閉じることによつて、側に架かっている小さな時計に目を向ける。時間を計算してみ

ると、

「あつ」

もうこんな時間か。気がついたら、規定の10分を楽勝で超えている。今の時点ですでに頭はそんなに働いていないのに、これ以上いれば死んでしまう。残念ながらワンマンショーは終了のようだ。俺は熱せられたテーブルから立ち上がる。

ガチャッ

「ん？」

ドアに身体を向けた時だった。6、7人ほどの大柄の男が所狭しとサウナに侵入する。口には出来ないが、どうにも柄がよくなさそうに映ってしまい、とても声をかけることを拒んでしまう。俺は邪魔にならないよう、身体を低くさせながら扉に向かう。

「おう、兄ちゃん<sup>あん</sup>」

一際大柄な男が声を揚げる。あんちゃん？誰のことだ・・・？辺りを見てみるが、その呼び名がしっくり来るような男はどこにもいない。

「おいおい、お前以外にいないだろうって、兄ちゃん。」

「は、はあ・・・すいません」

「グハハハハ。気にすんなって。まあこっち座れよ」

・・・俺だった。

男は隣の空いたスペースをダンダンと叩いて示す。外見と合ってなんと豪快な性格か。とはいっても、俺も命が惜しい。

「いや、すみません。せっかくですけど俺」

「連れないこと言うなよ。座れって！」

「しかしですね・・・」

・・・気のせいかな、後ろから妙に敵意のこもった視線を感じる。いや、多分それ以上のドス黒い・・・いや、気のせいだろう。どっちにしても、俺は座らないといけないらしい。まあ、小話するくらいのものでろう、こういう人ならそんなに気負う心配はなさそうだ。

「・・・まあ少しくらいでしたら」

「おお、すまねえな！」

隣に腰をかけるなり背中を平手を打たれる。はっきり言って、ほんの一瞬、暑さでショート寸前の脳内では、この男は確実に俺の右拳でぶん殴られていた。が、ニカツと気持ちよく笑うものだから、うっかり許してしまった。とりあえずブレーキは踏めたから良しとしよう。

「それにしてもサウナなんて俺、初めて入りましたよ」

「おいマジかよ！ガキだな」

「いえそうじゃなくてですね、俺沖縄から修学旅行で来たので。」

「ほおーう、じゃまだ学生なのか」

「はい」

「そーか。感想はどうだ？」

「・・・心が洗われますね」

ぶつちやけ、てきとうな感想を口にしただけで心は真逆にヒートしてる一方だ。

ちなみに、頭が結構ボーンとしてきている。

「粹だな兄ちゃんは。中々気に入ったぜ！将来ウチの組に入らないか？」

「・・・は？」

今自分が何を言われたのか理解できなかった。ぶら下げていた顔を上げておっさんの顔を見ようとした時だった。

（龍の・・・刺青・・・？）

気持ち分の程度に両肩に乗っかるタオルの下から、荒々しい龍の絵がポロリしていた。なんとなく、血の気が引いていくのが実感した。

「てめっ！オヤジにざけた口聞いて・・・」

「落ち着けよ。ガキ相手にキレてんじゃねーよ」

今の会話でほぼ確信した。間違いない。

どうやら、またしても任侠な人々に遭遇してしまったようだ。



湯煙の勇者（裏） 2 舞台を変えて

いや、ちよつと待て。一回落ち着いてくれ。

なんで俺はこうもその筋の人たちと絡むんだ！？今んとこ（作中で）一年に一回関わってるぞ・何、神は言ってるのか、ここで死ぬ定めだ、て。

「？ どうした兄ちゃん？」

「・・・いえ別に。ちよつとのぼせただけですから」

「情けねーなおい。まだ三分そこらだろ？」

そっか、俺はもう十五分が経とうとしてるのか。すげっ・・・

「兄ちゃん？なんで笑ってたんだ」

「いえ、そんな大したことじゃないですけど、一応僕が先に入っていたので三分よりは割と後ですよ？」

「てめーっ、おやじになんて口聞いてんだゴラァ！！」

え、今の沸点だったのか！？今の言い方はまずかったのか？

「おいおい待てよ。兄ちゃんは本当のこと言ってるんだから気にすんなよ。で、兄ちゃんはどれくらいここにいるんだ？」

おお、おっさんイケメンすぎる！このタイミングでそれを聞くんてどんだけ仏様なんだよ。ここは正直に言って逃げるしかない。俺はニコツと笑って言った。

「・・・」ごふんです」

土壇場で声がかすれ、『じゅう』という単語だ出せなかった。表情こそ変えなかったけど、内心では泣き叫んでいた。

「そーか五分か。じゃあもちつと話しようや」

おっさん、俺死んじやうんですけど！こんがり肉になるって！上手に焼けちゃうって！！

「そう言えば兄ちゃん、沖縄から来たとか言ってたけど、どうよ？」

「……………帰りたいですね」

「ガッハハハハ！ホームシックって訳か」

違う、そのままの意味なんだ。おっさんはもうイケメンを返上してくれ。ていうかもう頼むから帰ってくれ。マジで帰ってください。

「すいません。人待たせてますんで、俺先に上がりますね」

「おいおい連れねえな。もちつと話しようぜ」

「いえいえ、□うるさいやつだから後でいろいろ言われるのが嫌なんですよ」

とにかく、なんでもいいからここから出たかった。思いついた限りのてきとうな単語を連発して、逃げの口実を作ってみる。

「へえ、それって彼女なのか？」

「はい」

……………んん！？

ちよっ、おっさん、今なんと……？

「いつちよ前に女なんか作りやがってよ！このヤロ！」

「え、いや、そんなことは」

「よし、会わせろ」

・・・・・・・・・・・・・・・・んん！？

ちよつ、おっさん、マジで今なんと・・・？ていうか返事聞いて。

「えとすいませんが、もう一回言ってもらえますか？」

「だからよ、兄ちゃんの女会わせてくれって。な？」

いや、「な」って言われても困るんですけど・・・彼女なんてい  
いから、バレたら俺死ぬぞ

「いや、そうは言われても」

「つしや、さっそく見に行くとすつか。おいテメーら」

完全に無視されてる。

おっさんは重い腰を上げて、部下を引き連れてサウナを出ていく。

「・・・・・・・・まずい」

まさかとは思うが、俺はここで死ぬのか？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3953a/>

---

北斗による協奏曲

2011年10月3日04時29分発行